
檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下

水沢 莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下

【Nコード】

N8259D

【作者名】

水沢 莉

【あらすじ】

「夢とか目標とかこれと言ってないし、何をしたらいいのかもよく分からないけれど、そのうち変わるかもっていう希望みたいなのは持っていたい」高校卒業と同時に上京した由佳は、一つ年上で幼なじみの敦司の部屋に居候。不安材料を抱えながらの初めての生活、バイト、恋…待っていたのはなかなかハードな日々でした。春企画「はじめての×××。」参加作品です。

1 不夜城とか歌舞伎町の女とか（前書き）

この作品は「春の小説競作企画 はじめての×××。」に参加作品です。

無気力気味な女の子の心の成長を軸にしています。
ごゆるりとお読みください。

1・不夜城とか歌舞伎町の女とか

もう戻ろうと思っていた。

くたくたで、ぐだぐただった。

ダルさがピークに達している足は前に踏み出すのもやっとなのに、すっかり張ってしまったふくらはぎがジーンズの隙間を埋めているから、歩行が余計にままならない。

地面に食い込むような脱力加減。

パン生地を踏みつけて歩いたらこんな感じなんだろうか…などと、こんな状態でもわたしはどうでもいいことを想像してしまう。

昼間おろしたばかりの黒いスニーカーを無理矢理ひっぺ返して靴底を見ると、実際ガムがへばり付いていた。

「はあ……最悪だ」

人の流れも気にせず立ち止まる。

しゃがみ込んでアスファルトにずりずりと靴底を擦り付けると、消しゴムカスみたいに丸まった、こ汚いガムが剥がれ落ちた。

頭の上で誰かの笑い声がする。

顔を上げる気にもなれなかった。

もうすっかり夜だった。

気がついたら歩道は人で溢れかえっていて、すっかり顔を変えた街は、日中のそれとはまるで違っていた。

溢れる人、人、人、靴音と話し声。

このまま寝転がってしまいたいという衝動に駆られて、慌てて頭をふり、立ち上がる。

軽くめまいがする。早く戻りたかった。

「何時間歩いたろう」

ポケットから携帯を取り出して時間を確認すると、八時を過ぎていた。

「あーと、三時からだから、四、五、六、七、八……って、五時間じゃん」

指折りした片手がグーになり、五時間もうとうしてさまよっていただけの自分にため息が漏れる。

うつむいて眺めていたガムは、前から来た誰かの靴底に張り付いて、またどこかへ消えていった。

歌舞伎町に来ていた。

上京して初の、職探しのつもりだった。

はじめからまともな仕事を見つけないなんてなかった。

手っ取り早く、とりあえず、ぱぱっとこなせる仕事はどこかに転がってるんじゃないかと、知りもしないのに昔どこかで聞いた歌詞を思い出して乗り込んできただけだった。

コマ劇場前を過ぎ、メインストリートに戻り、また裏通りに入ってセントラルロードをぶらついて、一丁目周辺で同じことを繰り返しているうちに、何周目かで漠然と「なんか違うかも」と思ったけれど、戻るのも何となくシャクに触った。

コンビニに入り、ペットボトルのお茶を買い、飲みながら歩いて、しらみつぶしに看板を当たった。

「キャバ嬢」のところもあれば「可愛い子に限る」なんていうのもあり、「エステシャン」くらいの遠まわしにもならない表現もある。

れば「接客係」なんてソフトな書き方をしているものもあった。

ま、大差ないだろう。

そのどれかを探しに来たのだ。

けれど握り締めたペットボトルのお茶がだんだんと減ってくるにつれ、そのどれもが自分には係わりのないもののように思えてきて仕方なかった。

気持ちを立て直し、今度は時給を確認しながらまた歩く。

これも大差はなかった。

どれもこれも、コンビニの「時給750円」なんかと比べれば、ぐんと魅力的な報酬額だ。

男に酒を注ぎ、タバコに火をつけて、話を聞いて微笑んで、「すごい」と言ってタッチして、普通より高い金がもらえるんなら、それでいい。

「飛び込み・日払い可」が欲しかったわたしは、今度はそれを探して、山手線みたいにひらすらぐるぐると歌舞伎町を歩き回った。

なのに収穫はゼロだった。

そのうち気づいたらばちばちと電飾看板が光り始めた。

やがてぼちぼちはぎらぎらになり、ピンクやら黄色やらブルーやらに照らされた人の顔が忙^{せわ}しなく通り過ぎるようになっていた。

三三七拍子の調子が外れたようなリズムで光る背の低いビルを見上げると、日中は全然目に入らなかったホストたちの顔写真がずらりと並んでいる。

たいして興味もないけれど、立ち止まって眺めてみた。

皆、一様に上目遣いで、何となく、挑発的だ。

必要以上にライトアップされている写真を一人ひとり確認し、「一番右かな」と品定めしたところできびすを返す。

数メートル先の引つ込んだ入り口の奥にあるピンク看板には、ソープ嬢の笑顔が敷き詰められていた。

立ち止まり、目を擦り、凝視する。

一歩二歩と足を進めたけれど、それ以上前に行くには好奇心より度胸のほうがり足りなかった。

（あの女とあの女には勝ったな）

負け惜しみのようなセリフを胸の内で吐くと、何だか一気に疲れてしまって、あくびが出た。

口を開いたまま振り返ると、ニヤニヤした若い男がすぐ傍にいて、文字通り飛び上がったわたしは、慌ててその場を離れた。

あんなのに触れたら腐ってしまうかもしれない。

酔っ払い、学生、黒服、白いスーツ、たまに黄色い派手なスーツ、意味もなくサングラス。

拳句にこの電飾の海。

くたくたで、ぐだぐだだった。

戻りたかった。

けれどこのままでは帰れない気がした。

「だらだらしてないで、ちっとは仕事探してみるくらいしたら？」

敦司^{あつし}に言われてなければ、こんなところになんて来なかった。

不夜城とか、歌舞伎町の女とか、聞きかじりが膨張した想像を抱えて、足が吸盤になるまで歩くことなんてしなかったんだ。

居候の身としては金を持って帰りたかったのだ。少しでも。

ピンク色が身体にまわり付く。

砂糖に群がるアリのように固まった若い男のグループが、立ち尽くすわたしの肩にぶつかって、大声で笑いながら過ぎていった。

グーになったままのわたしの手のひらは汗ばんでいた。

油の匂いと埃の混じった空気は生ぬるい。

地面に吸い付く足をなんとか持ち上げ、人ごみと電飾から逃れるように、わたしは裏通りへ身体を押し込めた。

2・ストレイキャット

裏通りに入ると、人の流れも看板もそれなりの分量で散らばっているだけになる。

どういうわけか漢字ばかりの看板が増えるので、教科書の中に見えるみたいだ。

思いのほか薄暗い裏通りは、かえって原色看板の灯りが目立って眩しいのだけれど、さっきまで突っ立っていた場所に比べれば全然余裕だ。

読めない漢字がかえって心を落ち着かせる。

ふうつと息を吐く。

大丈夫だ、呼吸はまだ乱れていない。

日中、何度も通り過ぎて何度もメニューをチェックしたラーメン屋から、店先を僅かに染める程度の弱い灯りが漏れている。

脇に積まれたビールケースの隙間から、茶色の縞模様の猫がこっちを見ていた。

近寄ると、はうつつと威嚇されたけれど、猫のほうに逃げる気はないらしい。

都会の猫は強気だ。

裏手から流れてくる、味噌みたいな豚骨みたいな、もんやりした匂いに腹が鳴る。

そういえば昼に近い朝食に、バターを落とした食パンをかじったときり、何も食べていなかった。

空腹に気づくと、とことん飢えた気分になる。

のれんの隙間から、つま先立ちして中を覗き込んでみたけれど、薄汚れたうえに更に湯気で曇っているガラス窓からは何も見えなかった。

ただ、イイ匂いが漏れてくるだけだ。

ジーンズのポケットに手を入れて、小銭を確認してみる。

引き抜くまでもなく、ちゃりちゃりと僅かばかりの感触が伝わってくるだけだった。

これを使ってしまったら戻れない。諦めるしかなかった。

もう帰ろう、と一歩下がったときに、背後から突然肩を叩かれた。

「ちょっと君」

「ひいつ」

吸い込んだ息は、思った以上に喉を締め上げて、そして心臓を飛び上がらせた。

左肩に寄せられた手の感触に全神経が流れ込む。

横目でそれを確認すると、ラーメン屋から漏れる灯りが太くてごつごつした指先を照らし出していた。

なんだ、なんだなんだなんだ。

逃れるタイミングを失っていた。

振り向くこともできずに、わたしは両肩を上げたまま固まった。

ダメなのだ。

突然のこういうことは。

飛び上がった心臓は、胸を突き破って出てくるんじゃないかと思うほど、どくどくと骨を打って暴れている。

マズイ、かなり。

男が背後からわたしの前に姿を現すまで、左肩に乗せられたグロ
ーブみたいな指と、前足を揃えてじつとわたしをにらんでいるさっ
きの猫に交互に視線を泳がせるしかできずにいた。

わたしの前に立ったその男は、けれど予想外な笑顔で微笑んだ。

「お腹、空いてるの？」

にこにここと、中年男が口を開く。

指の印象からは想像もつかないやせ細った男だった。

銀縁の奥の目だけがやけに大きく光って見える。笑う前歯の一本
は、黒ずんでいた。

「君、さっきからこの辺歩き回ってたよね。何か探しもの？」

薄い唇が続ける。

笑っているのに、頬は骨格に沿うようにへこんでいて、この上な
く貧弱に見えた。

おもいきって飛びかかったら、勝てそうな気がする。

しかし笑顔に悪意は感じられない。

骸骨がいこつみたい…と薄っすら思う余裕ができていた。

「これからおじさんラーメン食べようと思ってたんだけど、君も一緒にどう?」

は? と首をかしげると、目の前の骸骨はまたにこりと微笑んで続けた。

「もちろんご馳走するから。一人で食べるより二人のほうが美味しく感じるでしょ。ああ、無理にとは言わないし、お腹空いてればの話なんだけどね。どう?」

いやあ、今日は蒸すねえ…なんてネクタイを緩めている。

グレーの大きすぎるスーツに身を包んだ男は、サラリーマンっぽく見える。

左手に下げた黒い鞆は、角のところが剥げて、そして少し窪んでいた。

骸骨みたいな顔以外、落ち着いてよく見ると、そんなに悪い印象はなかった。

何しろ腹が減っていた。

食べさせてもらえるなら、この際誰でもいい。

棒のように固まった足も、どこかで休めたかった。

「あの……減ってます」

「そつかそつか、じゃあ、一緒に食べよう」

「でもその……いいんですか？」

「いいの、いいの」

男は振り向き、さつさとのれんをくぐって中に入っていくてしま
う。

いや、やっぱりオカシイでしょ……そう思ってその場を離れようと
したけれど、男が開いたドアから一気にスープの匂いが押し寄せて
きた。

まあ、ラーメンくらいいつか。

瞬時にそう思い直せる自分の脳にあきれたけれど、空腹に負けた
わたしは、初対面の、一言二言話しただけの男に誘われて中に入っ
た。

これじゃ野良猫じゃないか。

頭の隅っこに、その言葉を押しやって。

ストレイキャット。

英語にしまえば、なかなかカッコいいじゃんと言いつて。

3・カラオケだけだから

店内は煙っていて、空気は湿っていて、案の定、静かだった。

中国人らしき店主と客の若い男が二人、朱色のカウンターを挟んで向かい合っている。

カウンターの端っこに新聞紙がたくさん積んである。ちゃんと押せば、崩れそうだ。

人ごみから開放されたわたしはその閑散さに安堵し、カウンターにつくなり出された水を一気に飲み干した。

すつと食道を下る冷たさが気持ちいい。

胃を過ぎた水がくねくねと腸を流れていって、ああこんなにお腹が空いてたんだと思ったら、笑えた。

隣の骸骨をちろつと見て、歌舞伎町のメインストリートを思い浮かべる。

目の裏に映像をよみがえらせると、改めて男密度の濃い街だ、とコップを戻しながら軽く身震いした。

ぐっと伸びをして、ストレッチついでに店内を見回してみる。

まだらに汚れた茶色の壁には、変色した紙が適当に貼られている。

その上にへたくそな筆字でメニュー名が書かれていて、どうやらそれを見て、注文するらしい。

『醤油ラー麺』『ミソラー麺』『チャーシュー麺』『チャーハソ』

……

わたしがこの店の前を何度も通り、何度も看板に書かれたメニューを見直していたのは、このカタコトの日本語の、読みにくさの、面白さからだった。

小さい頃からわたしは、どうでもいいものに心惹かれてしまうところがある。

スモックを着て、黄色い鞆を提げて、まだわたしが年相応にハツラツとしていた当時、同じ年長組だった亜子ちゃんという女の子を泣かせてしまったことがある。

お弁当の時間、亜子ちゃんのスヌーピーの描かれた赤いお弁当箱の左上に、タコさんウインナーが入っているのを発見したときのことだ。

タコさんの足を数えると六本だった。それがどうにも気になった。

タコの足は八本だ。

父と茶色いテーブルを挟むひっそりとしたいつもの夕食で、スーパールのパックに入れたままのぶつ切りのタコを口に運ぶ父の姿を、

わたしは気味悪い思いで眺めていた。

ぶちぶちの丸い吸盤。赤みたいな紫みtainな奇妙な食べ物。

タコを口の中でいつまでも噛みしごきながら、眉間に皺を寄せるわたしに父が教えてくれたのは、タコの足は八本だという豆知識だった。

なのに、亜子ちゃんのタコさんの足は六本なのだ。

それがどうにも気になって亜子ちゃんに豆知識をひけらかしていたら、彼女の黒くて大きな目から、いつのまにか涙がぼろぼろとこぼれていた。

裕子先生に叱られた。

「でもやつぱり八本だもん」といつまでも小さな反抗を続けるわたしをなだめる先生の顔は、今思えば、怒ってもいなければ、嘆いてもいなかった。

苦笑いの顔とでも言うんだろう。

わたしはそれから、同じ顔をいくつも見てきた。

他の人にとっては何でもないものが、わたしには重要だったり、貴重だったりする。

しかし関心を持ったそのほとんどがたいして役にたつものではないので、結局、どうでもいいものばかりが身体に、知識に、経験に、増えていくだけだった。

未だに、正しいとされる判断の、基準とかボーダーラインがどう
いうものなのか、わたしは分かっていないような気がする。

「とりあえず醤油ラー麺」と注文すると、「あいよ」とぶっきら
ぼうに店主が答えた。

となりで骸骨と店主がなにやら親しげに会話を始めたけれど、わ
たしはカヤの外だ。

その様子を、観察する。

よく来るのだろうか、ここにある、この店を、あえて選んで。

店主の発する言葉もメニュー同様たどたくて、つい吹き出し
そうになるのを堪えてもう一杯水を飲んだ。

べたべたに汚れた回転椅子とカウンターが気になったけれど、力
の抜けきったこういうところは、なんとなく居心地がいい。

足が休まった開放感も手伝って、身体をよじつてくると回転
椅子で遊ぶ余裕も出てきていた。

醤油ラーメンの差し出されたカウンターで、割り箸をぱちりと弾

く。

真ん中から上手く割れた。何かいいことがありそうだと思ってる。

骸骨は黙々とラーメンをすすっている。

「二人で食べたほうが美味しいから」と言ったくせに、わたしに話しかけてくることはなく、時々店主と会話を交わすのみで、こちらをちらりとも見やしない。

まあ、そのほうが気楽だった。

人と話すのにはエネルギーがいる。

会話にエネルギーを消費するくらいなら、沈黙に耐えていたほうがわたしにはラクだ。

やや脂臭い感はあるんだけど、ラーメンはそれなりに美味しかった。

三杯目の水を飲み干し、ほっと一息入れる。

骸骨はおしぼりでメガネを拭いていた。

顔の大半を閉めていたメガネが外れると、骸骨さ加減はますます濃くなっていて、本当に病人みたいに見えた。

なんだか申し訳なくなつて視線をカウンターに移す。

器の汁の表面で、クラゲの集団みたいな脂が揺れている。

うつむいたわたしの顔が、いくつも映っている。

少し、眠そうだ。

「これから時間ある？」

骸骨はおもむろに口を開いてそう言った。

「はい？」

店に入って初めてわたしにかけられた男の言葉。

意味よりも、唐突さに戸惑った。

メガネを拭いていたおしぼりと同じもので顔をぬぐった男は、首をかしげるわたしに構わず言葉を続ける。

「カラオケ好き？」

「はあ」

「ちょっとつきあってくれないかな」

「カラオケ、ですか」

「嫌い？」

「いや、嫌いというか、数えるくらいしか行ったことがなくて」

突然何を言い出すんだろっ、そう思って男をまじまじと見たけれど、骸骨はさつさと会計を済ませて席を立つ。

つられてわたしも立ち上がる。

尻に張り付いたジーンズは、しっとりしていた。

とりあえず「ごちそうさまでした」と後姿に声をかけ、男の後に
ついて店を出る。

さっきの猫は、もう居なかった。

「すぐそこだから」

前方を指差し、振り返った男は、ぼんやりとしているわたしの腕
を取って歩き出す。

途端、わたしの心臓は跳ね上がった。

つかまれた腕が熱い。

「ちよっ……」

放して、と声にしようとしたけれど、喉に詰まって出てこなかった。

動悸したまま、引きずられるようにして男の後についていくしかなかった。

「ここ、カラオケできるから」

男が立ち止まった場所は明らかにラブホの入り口前だった。

焦った。

カラオケなんてこんなところでやる必要ないだろう、と思ってみただけれど、ああやっぱりという気持ちで胃が締め付けられる。

それよりも、男につかまれている腕のほうが気になって仕方ない。

早く放してくれ、と言いたいのにな、やっぱり声は出なかった。

「いいよね？」

骸骨が笑う。

なかなかいい印象を持っていたさっきまでの笑顔は、まるで別人のようだった。

窪んだ頬が影を作り、銀縁の奥の目は隣のピンサロ店の明かりを受けてきらきらと気持ち悪く光っていた。

「カラオケだけだから」

マズイ、どうしよう。

足がすくむ。

胃はますます締め上げられ、口の中に胃液が込み上げてきた。

奥歯をかみ締めて、ぐっと堪える。

ラーメンにつられた自分が馬鹿だった。

よく考えれば、いや、考えなくたって分かるようなことだ。

誰が見ず知らずの他人に、気前良く飯をおごるんだと。

上京してまもないとはいえ、こんな安直な手に引つかかるなんて、わたしという人間はなんて世間知らずなのかと。

男の力は、体格からは想像つかないほど強かった。

逃げる隙も与えてもらえず、わたしはずるずると中に入るしかなかった。

4・死ぬかもしれない

三階まで昇る狭いエレベーターの中で、わたしは男に腕をつかま
れたまま、うつむいていた。

男の黒い革靴とわたしの黒いスニーカーは、人ひとり分もない距
離で並んでいる。

ぎゅっと目をつぶる。

逃げたほうがいいんだろう、こついうときは。

けれど、わたしはどこかで諦めていた。

これが援交か。いいじゃん、それで。

手っ取り早く、金が欲しかったんだ。逆に考えればラッキーじゃ
ん。

無理にでもそう思おうとしていた。

目を開くと、男の足が数歩前に出ていた。

床の隅のほうに、小さいピアスが転がって光っている。

エレベーターを降り、男が部屋のドアを開くと、薄暗い部屋のなかの色あせたカーペットが目に見え込んできた。

ゆるゆるした音楽が流れている。

ぱたんとドアが閉まり、部屋のなかを進むと、枕もとの蛍光灯に照らされた白いベッドが壁際に置かれていた。

狭い部屋で、それだけがやけに大きく見える。

カーペット以外は真新しく、薄暗さの中に白々と浮かび上がる大きすぎるベッドをのぞけば、普通の部屋となんら変わりなく見えた。大きなテレビがあって、安っぽいソファがあって、テーブルがあつて。

陳腐なカラオケマイクが二本、テレビボードに突っ込まれて置いてあるだけだ。

ラブホなんて初めて入ったけれど、なんだこんなものかと、この状況でも少しがっかりした。

もつとこう、お姫様みたいな気分になれると思っていた。

高校生時代、「行ってきた」と自慢していた女子の会話から頭に仕込んでいた前情報とはだいぶ違っている。

田舎のホテルのほうが、案外快適なのかもしれない。

密閉された重苦しい空気は、他人の部屋に上がりこんでしまった
ときのように気持ち悪かったけれど、もう腹をくくことにした。

男は上着を脱ぎ、マイクの方など一度も見もせず、ネクタイまで
外している。

処女を捨てるなんて、こんなもんなんだろう。

勢いか、焦りか、あせ過ちか。あやまち

初めての相手が誰かなんて、思い出としてとっておくほどのもの
でもないと思う。

むしろ恥ずかしさと痛みのほうが、記憶に残るのだろうから。

バスルームから、ジャワジャワと勢いのいい音が聞こえてくる。

いつのまにかパンツと靴下だけの格好になっていた男は、にやに
やししながら部屋に戻ってきた。

ぎよつとした。

生白い身体は、やっぱり骸骨だ。

浮き上がったあばらは、別の意味で恐怖心をよみがえらせた。

わたしの目の前まで来た男はおもむろにパンツを下ろした。そして靴下を脱ぎ捨てた。

凝視するしかなかった。声など出てこない。

その身体に、それが。

初めて見た。こんなになるものなんだろうか。

震えさえ起きなかった。ただ啞然として眺めていた。

ニヤついた男は背を反らし、どこか満足げに腹をさすっている。

「先に入ってくるから、テレビでも見てて。ちょっと待っててね」

鼻にかかった声で男はそう言うと、わたしの返事など待ちもせず、やや小走りでバスルームへ戻っていく。

わたしはへなへなと力なく床にへたり込んだ。

目の前に、男の脱ぎ捨てたパンツと靴下。

小さいさくらんぼが散らばった紺色のパンツだった。足先が擦れた靴下はゴムが伸びていた。

思い出なんて、抱え込むだけ無駄なものはいらない。にしても、これじゃ記憶にばっちり残る。

過ちで済めばいいけれど、わたしはここで死ぬかもしれない。

ちよつと待っててね？ 待ってまですることのものだろうか、あの男と。

死ぬかもしれないときの相手くらい、やっぱりちゃんと選びたい。

バスルームから、シャワーの音と、何だか分からないメロディの鼻歌が聞こえてくる。

わたしはドアの隙間から這い出すように漏れてくる白い湯気を眺めていた。

呼吸が速くなってきた。

「逃げよう」

決心は早かった。

立ち上がり、ゆっくりと深呼吸をしてから、だらしなく丸まった男のパンツを踏みつけて、ドアへ向かう途中で気がついた。

テレビボードの隅に置かれた男の黒い鞆。

ごくりと唾を飲み込んで、じっと見下ろした。

きよろきよろと、誰もいないはずの部屋を見渡し、しゃがみ込む。

バスルームからは、まだ男の鼻歌が聞こえてくる。

角だけ窪んでいると思っていた鞆は、全体的にくたびれていた。サラリーマンの背中そのものだ。

変色した持ち手部分に触れないようにして、静かに開けた。

手帳と何かの書類、水着を着た女が表紙の雑誌、栄養ドリンクの空き瓶と、薬袋。

くしゃくしゃの薬袋には、「岩田義則様」と書かれている。

他人の名前は文字にすると、もっとずっと遠くの誰かに感じる。

眼鏡ケースとボールペン、そして二つ折りの黒い財布に行き当たって手を止めた。

確認するだけだ、と自分に言い訳をして中身を抜き出し、数えて

みる。

一万円札が一枚と、千円札が三枚。

これだけでも持って帰れば、一日のアルバイト代としてはたいした額だ。

一瞬そんな考えが浮かんだ頭をぶんぶん振って、金を財布に引っ込める。

財布を鞆に戻しかけたときに、ふと思った。

ぎりぎりの緊張感のもとでは、案外、頭の回転も速くなるものらしい。

わたしは、この金で買われようとしていたのだろうか。

一万、三千円で。聞いている相場の半分以下で。

そもそも、男のほうにわたしを売る気などさらさらなかったのではないか。

ラーメン一杯で釣れた、ラッキー、ぐらいの気持ちで鼻歌なんぞ歌っているのだろう。

あばらの上に、石鹸を滑らせているのだろう。

嘘みたいに立ち上がったあれを、どうやって洗っているのだろうか？

860円で釣れた女とこれからすることを想像して、さぞ気分のいいことだろう。

思っているうちに胸やけに似たむかむか感が込み上げてきた。

もう、震えていなかった。

なんとなく千円札三枚は引っ込めて、一万円札を尻ポケットに押し込んだ。

立ち上がったから、もう一度しゃがんで、雑誌を引き抜いて小脇に挟んだ。

シャワーの音が止む。

からんと音がして、男の鼻歌も止まった。

足音を立てないようにして、わたしはバスルームの前を通り過ぎた。

擦りガラスに映る肌色の輪郭はぼやけていて、ただのカタマリにしか見えない。

入り口ドアを引くと、かちゃっと音がして、ぴんぽんと甲高い電

子音がした。

驚いて、部屋から駆け出した。

振り向かず、非常階段を転がるように駆け下りた。

自動ドアの前でホテルに入ってきたカップルとおもいきりぶつかって、よろめいた女の人が「きゃ」と声をあげたけれど、謝る余裕なんてまったくなかったわたしは、猫のようにひらすらに前進した。

歌舞伎町の人ごみのなかを、全力で走る。

どこまで走っても、追いかけられているような気がして振り向けなかった。

ピンク色は、わたしに執拗についてくる。

足がもつれて、派手に転んだ。

雑誌は二メートルくらい先まで飛んで、水着の外れた女が横たわっているページを開いている。

アスファルトは、生ぬるかった。

手のひらを見ると、滲んだ血の隙間に細かい砂がいっぱい挟まっている。

人、人、人、靴音。

耳元でするたくさんの音は、雑誌とわたしを取り囲むようにして、
だけど絶えず流れていく。

二メートル先でしんと横たわる女の写真を見ながら、自分は
歌舞伎町の女には絶対なれないだろう、地面に突っ伏したまま、そ
う思った。

5・東京で頼れる人間は

とぼとぼと、新宿駅へ向かう。

擦りむいた手のひらが、ひりひりする。

打ち付けた膝は、ジーンズに擦れて痛い。カクカクと笑ってさえいる。

久しぶりの全力疾走は、身体のあちこちの力を抜けさせた。

胃は重く、なんとなく奥の方がきりきりと痛んでいる。

深呼吸をすれば少しはマシになるだろうかと思い、めいっぱい空気を吸い込んで、その勢いのまま息を吐き出したら、豪快なゲップが出て、焦った。

しかしいくらラクになる。

放置してこようかと思った雑誌は、けれど二つ折りにして、ジーンズと腰の間に挟みこんできた。敦司への手土産のつもりだった。男は、こういうのが好きだろう。

隙間から少し冷たい空気が入ってきて、しめったパンツがひんやりする。

顔を上げるのも面倒で、スニーカーの足先を見つめてただぼんや

りと歩いていたら、自分がどこにいるのか一瞬、分からなくなった。きよろきよろと辺りを見回すと、低いところからぞくぞくと頭が現れて、そこが地下通路へ繋がる階段だと気づく。

一歩足を踏み出すたびに膝がかくんと沈み込んでしまつて、手すりにつかまりながら、お婆さんみたいに腰を曲げて慎重にくだった。

地下に入ると、時々へんにぬるい風がぶわつと首筋を通り抜けていく。

地下道は嫌いだ。

接着剤みたいな、ガムテープみたいな、粘着力の強そうな匂いがある。そのまま動けなくなってしまうような気持ちに陥って、いつもなんとなく小走りになってしまう。

人の波に押されるようにして駅構内を横断し、券売機の前に着いてポケットに手を入れる。

小銭にたどり着く前に、紙の感触で手が止まった。

引き抜いた一万円札は、しんなりとしていて、くしゃくしゃに縮こまっていた。

両手で端をつかみ、そつぽを向いた諭吉を見つめてみる。

視線を逸らされている分、何だか無視されているような気持ちになり、半分ムキになってその目を睨みつけたけれど、かえって惨め

になるだけだった。

それどころか、札に描かれたその顔が次第にさっきの男の顔に見えてきて、手が震えた。

にやにやと笑うへこんだ頬。

あばらの浮いた白い身体、信じられない勢いで起っていたアレ……
……が見つめる諭吉の顔とは別のところに浮かんできて、全身が震えだした。

札を握りつぶして、ポケットに押し込む。

小銭を取り出し、券売機に入れようと手をかけたけれど、治まらない震えは酷くなるいっぽうで、わたしは両手で身体を包んでその場にしゃがみ込んだ。

目の前を何人もの足が行き来している。

時々、革靴やヒールが立ち止まるのだけれど、声をかけてくる人はいなかった。かけられても、今のこの状態では口も開けないだろう。

この街の、こういう薄情さ加減は、でも好きだ。

這いつくばって隅に移動し、左ポケットから携帯を取り出して開くと、二件の「留守録アリ」のメッセージが表示されている。

震える指でボタンを押し、携帯を耳に押し付けた。

『ピー……「おい、由佳、お前どこほつつき歩ってたよ。散歩か？ 買い物か？ っていうか、どこに居んだよ。アイス、ハーゲンダッツ、出しっぱなしだったぞ！ 食いたいわって言うから高いのわざわざ買ってやったのによー。洗濯物も干しっぱなしだしよー。全部ちゃんとやってから出かけるよ。んで、ど……」 ピー……』

敦司^{あつし}からだった。

その声にはっとし、次のメッセージを聞く。

『ピー……「留守録って短けーんだな。っていうか、どこ？ 早く戻ってこい。倒れたらどうすんだ。これ聞いたら電話しろ、分かったな？」 ピー……』

怒っているとも呆れているとも、どっちにもとれる敦司の少し高い声は、だけど心配しているのが分かる語尾の柔らかさだ。安心してますます力が抜けた。

履歴を表示し、小刻みに震える親指でボタンを押す。

四回の呼び出し音で、勢いよく敦司が出た。

「由佳？ 何やってんだよお前。もう十時だぞ？ 散歩にしては長すぎるだろ」

敦司の声の向こうで、かちゃかちゃと陶器っぽい音がする。

皿でも洗っているのだから。そういえば頼まれていた昨日の夕食の片付けもしないで出てきちゃったな、と思い出す。

携帯、濡れたらどうすんだろ……またどうでもいいことが浮かんで苦笑した。

「敦司」

「なに？」

「ヤバイ」

「あ？ なに？」

「立てないんだけど。あたし」

「は？ 立てないって、何？ 何してんの、お前」

「座ってる」

あ？ と言った敦司の声は、少し黙ったあと、思い出したみたいにして受話部分から低くこぼれた。

「由佳お前、今どこ？」

「歌舞伎町帰りの新宿」

「あ？ 新宿？ の、どこ？」

「駅。東口。の、券売機前……っていうか、その隅」

「何だよそれ。よく分かんねーよ。いいわ、すぐ行くからじっとしてろ。新宿着いたらまた電話するから。そこに居ろよ。動くなよ」

一気にしゃべった敦司はぶつりと電話を切った。

プー・プー・プーという音しかなくなり、抱え込んだ膝の上で携帯を閉じた。

切符を買う人たちのほぼ全員がちらちらとわたしを見ては、怪訝な顔をする。

羽目はずした若い女の、自分の限度を知らない女の、そんな類たぐいの酔っ払いとでも思われているのだろう。

コーチのショルダーバッグを下げたお姉さんに「どうしたの？」と声をかけられたけれど、わたしはうつむいて首を振るだけにしておいた。

かまうのも、かまわれるのも、今は面倒くさかった。

周りを無視すると、不思議と足音も声も遠くなり、前に行く人たちなんかも、スクリーンの中で動いているように見えてくる。

膝を抱えて、無声映画みたいなその光景を上目遣いで時々眺めて、敦司を待った。

四十分、経つか経たないくらいで握り締めていた携帯が震え出した。

携帯を開いて、もしもと言いかけたけれど、それより先に敦司のせかせかした声が耳に飛び込んできた。

「着いた。新宿。で、どこ？」

敦司の声の後ろで、電車のごおつという音と、ホームに響く駅員の声がしている。

受話の向こうの鼻息が荒い。携帯から漏れてきそうなほどふがふがしている。

ここに着いたらたぶん怒るな、と思いながら、それでもわたしは周りに見える看板の文字や物の説明をし、敦司を誘導した。

仕方ない。立てないのだから。東京で頼れる人間は、まだ、敦司しかない。

「は？」「ああ、はいはいはい」「なんだそれ」、少しイラついている敦司の声を聞きながら、ここに辿り着いたときの奴の第一声は何だろう、なんて想像してみる。

おそらく「アホ」とか「馬鹿」とかに違いなければ、言われても仕方ない。その通りだ。

なんて言い訳をしよう、そう考えてはみたけれど、尻をついている床の硬さに神経は傾いていく。

どうしようもないくらい、わたしは自分本位だ。

むずむずと腰を動かしてふと前方を見ると、人ごみのなかをこちらに向かつてつかつかと歩いてくる点が見えた。

携帯の中の声が途切れる。次第に近づいてくる顔の主は、敦司だった。

「よー！」

眉間に皺のよった敦司の顔を見ながら、わたしは馬鹿みたいに手を上げて笑ってみせた。

最後の数メートルを小走りしてわたしの前にしゃがみ込んだ敦司は、持っていた携帯をぱたりと閉じて、大きく息を吐いた。

グレーのシャツから覗く首元に、薄っすらと汗が光って見える。

よほど焦っていたのだろう。悪いことしちゃったな、と思いながらも心配をかけたくなかったわたしは「べ」と舌を出して笑ってみた。

そんなわたしを見て、ぼりぼりと癖のない真っ直ぐな黒髪の頭をかいた敦司は、やれやれといった表情で、ぼんと軽くわたしの頭の上に手を置いた。

「大丈夫か」

予想外の第一声。わたしは驚いて敦司を見上げた。

「なにが、よ！、だ。馬鹿かお前は。何してたんだよ、こんなところで」

「見れば分かるでしょ。座ってたの」

ああ、違う。

本当は「ありがとう」と言いたかったのだけれど、案の定「馬鹿」と言うセリフが出てきたことに少しばかり腹が立ち、つつきんどんに返事を返してしまう。

「そうじゃなくて。何でこんな時間に、新宿なんて一人でほつつき

歩ってるんだって聞いてんの」

呆れ顔の敦司はわたしの頭から手を下ろし、まじまじとわたしの目を見ている。

黒目が大きくて、というよりも目そのものが大きくて、じっくり見られると意識しなくともそわそわしてしまう、敦司の目にはそんな力がある。

「……職探し」

リノリウムの床に視線を逸らしてそう言つと、視界の隅に映る敦司の首が傾くのがわかった。

「職探し？」

「そう」

「職探しって。何だよ急に」

「だって、ぶらぶらしてるなって、敦司言っただじゃん」

言いながら、唇がとがってくるのが自分で分かった。

迎えに来てもらってこの態度もないだろうと心では思ったけれど、

話しているうちにさっきの男の顔がまた浮かんできて、言葉が詰まった。

また膝を抱えてうつむいたわたしの肩に敦司の手が触れる。

「由佳、立てるか？」

「わかんない」

「ほれ」

敦司に両腕を支えられ、まだカクカクと小刻みに震える膝をなんとか踏ん張って立ち上がる。

敦司のわき腹に手を添える。尻は痛いけれど、少なからず歩けそう
だ。

切符を買い、敦司に支えられながら改札を過ぎ、ホームへ出る。

轟音を立てながら、電車はすぐにホームへ滑り込んできた。

鉄みたいな匂いの風が吹き付けて、立っている足を少しばかり踏ん張った。

乗り込む間際、気になって後ろを振り向いたけれど、知らない顔

たちが笑ったり無表情だったりして通り過ぎていくだけだった。

残された部屋の中で、骸骨はどうしてるんだろう。

無くなった金に気づいただろうか。踏みつけたパンツをちゃんと穿いただろうか。

あの高ぶりは一体どこから来たものだったのだろう。わたしみたいな女に興奮するほど、飢えてるんだろうか。

居なくなったらわたしと二万円札で、その気持ちもアレも治まったのだろうか。

そんなことを考えながら、わたしは敦司のシャツを握り締めて、シートに深く腰を下ろした。

窓の外に流れる景色に目を凝らし、その向こうにあるはずのホテルを探してみたけれど見えるわけもなく、映るのは、そこらじゅうに散らばる色とりどりの灯りだけだった。

6 ・まだ、抜け出せない

中央線でひとつ先の中野には、あっという間に着いてしまう。

握り締めていた敦司のシャツをもう一度しっかりつかんで立ち上がると、敦司はわたしの手をシャツごとつかんでホームへ降りた。

電車とホームの隙間はぱっくりと口を開けていて、さほど深くもないのに、いつも少し、怖い。

踏み出す右足に力が入る。敦司の手にも少しだけ力が加わって、わたしは無事、ホームに帰還する。

改札を出て、中野通りを歩いて北へ向かう。

新宿とは明らかに違う空気の緩^{ゆる}さにほっとして、幾らか新鮮に感じるその空気を吸い込んでみたらバスの排気の味がした。

東京で、田舎の空気みたいな美味さは期待していない。

ただ少しでも、安心する空気が流れる場所くらい、確保しておきたいものだ。

サンプラザ前の広場には、わたしぐらいの年齢の若者たちが大勢集まっていて、なにやら騒いでいた。

誰かのコンサートでもあったのだろうか。遠目でもわかるほど表情が生き生きとしている。

女の子たちが飛び跳ねながら腕を振り回すたびに、蛍光ピンクのサイリウムが光の緒を引いて、めちゃくちゃに動き回るねずみ花火みたいに見える。

若いな、と思う。

馬鹿にしているのでも、批難しているのでもなくて、今を満喫していて羨ましいな、と素直に感心する。

そしてしみじみ眺めてしまう。

自分だって十分若いのはわかってはいるけれど、あんなふうに大っぴらに、若さを周りに振りまける同年代の人間を見ると、妙に年寄り染みた気分になってくる。

運動会の控え席にいらするときのような、学級会で漫才を披露している友人を眺めているときのような、そんな感じだ。

「若くていいね。軽やかだよね、全部」

「なにが？」

敦司はわたしを見下ろして首を傾げている。

頭ひとつぶん高いその顔に、車のライトが滑って通り過ぎた。

首筋はもう光っていない。汗は乾いたみたいだ。かわりに鼻先が少し、照かっている。

「あの子たち。楽しそう。生きてるって感じだね」

「なんだそれ」

敦司は右手で髪をかき上げて、ほんの少し笑ってまた前を向いて歩き出す。

年寄り染みた気持ちを抱えたまま、わたしもその後に続いて、斜め前方の敦司の横顔を眺めてみる。

一つ年上なだけなのに、わたしの手を引く今日の敦司の顔は、おじさんっぽく見えた。

いや、保護者の顔とも言っただろうか。

わたしが作ってしまったっている顔なんだと思ったら、少し申し訳なくなつて「ごめん」と口にする、
「は？ 何が？」と不思議な顔をして振り向かれただけだった。

途中のコンビニに寄って、板チョコとコーラを買う。

わたしだって、選ぶ物は若者好みから外れていない。

魚より肉が好きだし、あんこよりチョコが好きだし、お茶は好きだけれど、炭酸水を一気飲みしたいときだってある。

若者っぽいことをあえてしようと思わなくなつて、それらしいことをちゃんと選んでやっている。

なんだかんだ言つても、所詮若いのだ。

早稲田通りにぶつかつて横断歩道を渡つて、路地を右に入つてしまつと、途端に暗くなる。

春先の蛇みたいなの、緩いくねり具合で続いている小道を五分くらい歩くと、居候先の敦司のアパートが見える。

隣の部屋の明かりがアパートの前の砂利を四角く照らしていた。

「さつきから気になってたんだけど、それ、何？」

部屋の明かりをつけた敦司は、ベランダのカーテンを引くわたしの背中を指差して言った。

指先と視線をたどると、わたしの腰のあたりに行き着いて、二つ折りになつて突っ込まれている雑誌に行き当たつた。

そつえば挟んだままだった。

気になっていたんならコンビニに入ったときにも言ってくればよかったのに、そう思ったけれど口には出さず、雑誌を引き抜いて表紙を見ると、女の顔が汗で歪んでブスになっていた。

「お土産」

「あ？」

「好きでしょ、こづいづの。手ぶらで帰ってくるのもどづかと思つてさ」

「好きつて。いや、嫌いじゃねーけどさ。わざわざ買ったわけ？
そんなの」

「いや、拾つた、みたいな」

「は？ 拾つた雑誌が土産かよ。っていうか、んなもん拾つてくんなつて」

コーラ片手に雑誌を受け取つた敦司は、湿つたページをばらばらとめくつて、寝そべつた女のページで少し止まり、だけど見なかつたことみたいにしてはさりと雑誌を閉じた。

「気に入つた？」

「何が」

「裸の女」

「馬鹿かお前は。それより由佳、そこに座れ」

雑誌をテーブルに放りながら敦司が指差す先には、わたし専用の群青色の長座布団がある。

中野サンモール内の小さな店で敦司に買ってもらったやつだ。

おばちゃん好みの洋服店の店先で、ワゴンの中に山積みになっていたセール品。

安物商品の布地は、どうしてもいつも余計な柄が散りばめられているのだろうと思いつながら、積み重なった長座布団をめくっていた。

赤い小花柄や大きな牡丹みたいな絵の描いてある長座布団のなかに、一つだけ単色群青色のそれがあって、どうしても目にとまった。

温泉宿の大広間にあるような、ただの四角い渋い座布団が、一回り大きくなっただけのような代物だ。

たぶん、そのときは良く見えたんだろう。欲しくなった。

部屋の中ですごろごろとするのが日課みたいになっていたわたしに、長座布団は必需品に思えたのだ。

学校から帰ってきた敦司に金をせびり、千円札を握り締めてその店へ戻った。

六百円の長座布団を抱えて、おつりで八百屋の籠入り林檎を買って意気揚々と帰ったら、敦司は少し、むっとしていた。

そういえば敦司は、昔から林檎が嫌いだった。

林檎は摩り下ろして一人で食べた。わたしは好きなのだ。

「座る？　なんで？」

「いいから座れ」

「どうせ怒るんですよ。分かってるよ」

「分かってるなら、座れ」

命令されて、しぶしぶ長座布団に腰をおろす。

向かい側の床に腰を下ろした敦司は、テーブルの上で手を組んで生徒指導室の先生みたいな顔をしてわたしを見ている。

じつとあの目で見られて、やっぱりそわそわして、わたしは自分の股の間に視線を落とした。

「人の多い所に一人で行くなって言っただろ」

少しだけ強い口調だけれど、ちゃんと心配が含まれていて、そこ

が生徒指導室の先生とは決定的に違うところだ。

「……ごめん」

「職探するんなら、俺に言っただけにしろ。何か探してやるから」

「自分でみつけようと思ってさ。あたしなりに気を使ってみたんだけど」

「だからっていきなり歌舞伎町はねーだろ。っていうか何で歌舞伎町なんだよ。この辺だって色々あるだろ、コンビニとかスーパールとか本屋とか」

「いや、手っ取り早い方法と高い金を、と思ってさ。何となく新宿に出てみたんだけどね」

あはは、と笑ってみせたけれど、敦司は少しも吊られなかった。

それどころかますます渋い顔つきになり、組んだ手に体重を乗せて前かがみになっている。

「お前さ、何する気だったわけ？ まさかキャバクラとかで仕事しようとか思ったわけ？」

「そう。そのとおり。ピンポン」

「何がピンポンだよ、出来るわけないだろーが」

「いや、大丈夫かなって思ったんだけど。結局いい店が無くてさ。ま、いいじゃん。ちゃんと戻ってきたんだし」

言ってから「しまった」と思い、上目遣いで敦司をちらりと見た。

ちゃんと戻ってこれたのは敦司に迎えに来てもらったからだ。

さも自分で戻ってきたみたいないい方をしてしまっわたしは、本当に、救い難い。

「お前なあ」

ため息と一緒に吐き出される呆れた声。

うつむいて「ごめん」と言うと、敦司の手が頭に伸びてきて、軽く叩かれた。

「何であんなところに座り込むはめになったんだ？」

「……いや、ちょっと人に酔っただけ」

「ホントに？」

「ホントに」

本当は話してしまいたかった。

話したほうが気分的にすっきりするように思えたし、一万円札だって、渡したい。

言い出そうと思って迷い、金魚みたいに口を開け閉めしながら、歌舞伎町での出来事を順を追って思い出してみる。

空腹のあまり、初対面の男に誘われてラーメンを食べたこと。

ラブホに連れて行かれて、あんなになったアレを初めて見て驚いて、気持ち悪くなって敦司を呼んでしまったこと。

盗んできた金が今、尻ポケットに入っていることなど、全部。

どこかを掻い摘んで話そうとしても、いいところが一つも見当たらない。

勢いで話してしまっても良かったけれど、結局は敦司の心労を増やすだけの惨事ではないことに気付いたら、どうでもよくなった。

無駄に怒らす必要もない。

それより、外出禁止例が出たら大変だ。

「ホントだな？」

やや見上げるような黒い目が、確認するようになわたしに向けられる。

わたしはうんと頷いた。

「とにかくもう、夜一人で出歩くのはやめろ」

「了解」

確かにもう、一人で夜の街を歩くのは止めておいたほうがいいだろう。

「それこそ……男に何かされでもしたら、どうすんだ」

目の前の敦司は、疲れたおじさんみたいな顔をしている。

色白で通った鼻筋。黒目がちな大きな目。イケメンの部類に入る顔だろうに、すまないことをした、と反省する。

敦司の言うとおりだ。男に何かされたらヤバイだろう。

今回は未遂で終わったけれど、あれしきのことですえ、わたしはへたり込むほどびびったのだから。

やっぱりまだ、駄目なのだ。

わたしはまだ、男嫌いから、抜け出せないでいる。

7・近づきすぎると駄目になる

敦司とわたしは、幼稚園に通う前から、小学校、中学校とずっと一緒だった。

頭の出来が違いすぎたわたしたちは、高校こそ離れたけれど、家が隣同士ということもあって顔を合わせない日は無かったと言ってもいいくらい、常に傍にいるような間柄だった。

いわゆる幼なじみだ。

物心がついたときからすでに敦司は傍にいて、互いの家にも行き来していた。

わたしは気がつけば父子家庭で育っていて、父の帰宅が遅いときなど、敦司の家に預けられたりもしていた。

敦司の家にはちゃんとお母さんがいて、お父さんも定刻になれば帰ってきた。

柔らかいオレンジ色の明かりの下で皆で食べる夕食は、自分の家とはずいぶん違うなと感じていた。

これが一家団欒というものが、なんて幼いながらに感心していた覚えがある。

お腹一杯になって敦司とテレビアニメを見て、自分の家にはない

ゲームで遊んで、たまにお風呂も一緒に入って、眠くなれば寝てしまつて、揺り動かされて気がつけば、父に抱かれて自宅の玄関をくぐる朝を迎えていたなんてこともある。

敦司とは、近所の川や公園の砂場でよく遊んだし、待ち合わせなんてことはしなかったけれど、学校からの帰り道ではったり会ったときには、買い物をしたり、映画なんかを見てから一緒に帰宅したりもした。

敦司は一つ年上だけれど、あまりにも幼い頃から一緒に居すぎたので、先輩という感覚は無い。

わたしは敦司のことを幼稚園のころから呼び捨てにしていたし、隣に住む遊び相手くらいにしか思っていなかった。

お兄ちゃんという表現が一番しっくりくるかもしれないけれど、それともまた違うような気がする。

そんな関係が続いたある日、大学生になる敦司は家を出ることになった。

「しっかりやれよ」と、本来ならわたしが言うようなセリフを残して、敦司は東京へ向かった。

そしてわたしは高校三年生になり、敦司と初めて離れることになったというわけだ。

敦司が居ないということもあって、あのオレンジ色の明かりの下で夕食を摂ることも無くなったし、もともと友達の少なかったわたし

しは、遊び相手も暇つぶしの相手も居なくなつた。

ただ父とひっそりと、過ごした。

別に寂しくもなかったし、不満もなかった。

それが普通だったから、なんとも思わなかった。

敦司が保護者みたいな顔を覗かせるようになったのには、幼なじみでわたしが年下という理由の他に、もうひとつある。

わたしが、変質者に狙われた中学二年の春からだ。

朝、いつも通りに家を出たわたしは、気持ちの良すぎる空の青さと陽気の良さに、学校に行くのが面倒になった。

こんな日は、授業を受けながら眠っているより、外の空気に触れながら本でも読んでいたほうがいいと思ったわたしは、学校へ行く途中の橋の下に寝そべって本を読んでいた。

薄暗さで文字が読みにくくなり、川面を滑ってくる風がむき出しの足を滑って少し寒いかも…と感じたときには、陽が半分沈んでいた。

さて帰ろうか、とスカートについた砂と枯れ草を払い、歩き出したその時に、背後に何かの気配を感じた。

腕を掴まれて、驚いて振り向いた。振り向いてすぐに、押し倒された。

背中にコンクリートの冷たさを感じた。頭を打ってしばらく動けなかった。

動けないわたしの身体に覆いかぶさりながら、黒い物体の息が耳に吹きかかる。

何が起きているのか、分からなかった。

ぎゅっと目をつぶり、身体を這いまわる熱い感触に耐えていた。

大きくもない胸を弄られ、首筋に唇を押し付けられ、太もみを滑ってスカートの中に入り込んでくる手のひらの温度を感じたときに、ようやくわたしは襲われているのだと気がついた。

硬く閉じていた目を開くと、黒いニットキャップを被った男の顔があった。

たぶん、若かったと思う。春先にもかかわらず、厚手のニットを着込んでいた気がする。

全身、黒づくめの男だった。いや、そう見えただけなのかもしれない。よく覚えていない。

視線がぶつかりと男は、奇妙な笑いを浮かべた。

笑う目と唇だけがぎらぎらと光っていた。

男の手がパンツの中に入ってきて、わたしは声を上げた。

男の右手が、わたしの頬を打った。

打たれた反対側の頬がコンクリートに擦れて、息を吸い込むと砂が口の中に入り込んで、咽まで届いた埃に、咳き込んだ。

夢中でもがいたけれど、男の力は強かった。

何度か殴られ、その度に鈍い痛みが骨と頭に走る。

口の中は、ざらついて、血の味がした。

もう駄目だと思った。けれど抵抗を緩めたときに、男の手がわたしの身体を離れた。

ジーンズのボタンに手をかける男の姿を薄目に入れたわたしは、右足でおもいきり男の股間を蹴り上げた。

そこが急所だということは、保健体育で習っていたから知っていた。

授業内容が初めて役に立った瞬間だった。

股間を押さえて奇声を上げる男の股の間から抜け出して、鞆を抱えて、夢中で逃げた。

本を投げ出してきてしまったことを今でも悔やんでいる。お気に入りの一冊だったのに。

土手を上がるときに何回か転んで、膝も手のひらも擦りむいて血

が滲んだ。

振り向かず、ただひたすらに走った。

走って走って、息がつけず立ち止まったところが敦司の家の前だった。

何も考えず扉を開け、まっすぐに敦司の部屋へ続く階段をのぼる。

「由佳ちゃん？」 キッチンの脇を過ぎるときに敦司のお母さんの声を聞いたけれど、返事もせずに部屋へ入り込んだ。

こんなことはよくあった。

わたしは自分の家みたいにして敦司の部屋に上がり込むことなんてしよっちゅうだったから、敦司のお母さんが特段気にかけることもなかったのだ。

夕飯近くになって、部活動を終えた敦司が帰ってきた。

埃と砂まみれの制服で床に突っ伏したまま泣いていたわたしに、敦司は相当戸惑っていた……という話を、後で聞いた。

学校や近所や、新聞で取り上げられるような大事にはならずにするんだ。

そんなことになっていたら、わたしは不本意な有名人になって、どこに行っても、レイプされかけた可哀想な女の子という、同情の

含まれた目で見られていたことだろう。

マイナスイメージで近所のネタにされることなど、まっぴらだ。

そんな饅頭の皮みたいなしつとりとした哀れみなど、受けたくなかった。

敦司だけに話した。

話すつもりはなかったけれど、自分から敦司の部屋に上がり込み、床に突っ伏して泣き、そんな姿をさらしておきながら「何でもない」なんて言えるはずもなかったし、口ごもっているわたしを優しく問いただす敦司の声に安心してしまったものだから、わたしは大袈裟に泣いて、敦司にしがみ付いて、どんなに恐ろしかったことが、という話をしたようだ。

……他人事みたいな言い方だけれど、その頃のわたしは本当に素直で純情で、男がどんな生き物かもよく分かっていなかったのだから仕方ない。

わたしの周りにいる男といえば、父か、敦司か、クラスメートのやんちゃな男子だけだったし、身に危険を感じるような雄などいなかったから余計に傷ついた。

そう、傷ついた。身体に出来た擦り傷はすぐに治ったけれど、受けた心の傷は相当のものだったらしい。

それ以来、わたしは、男という生き物に近づきすぎると駄目になる。

今日みたいに、新宿駅で隅っこに座るはめになるくらい。

あれから五年が経とうとしているけれど、まだ、駄目だ。

敦司はと言えば、それからずっとわたしの心身を気にかけるようになり、こちらが恐縮してしまうほど、面倒をみてくれるようになった。

面倒という大層なものでもなかったけれど、いつでも気にかけてくれたのは確かだ。

登校時には、わたしが学校をさぼったりしないように隣にぴたりとついて監視されたし、下校時も、なるべく一緒に帰るように調整してくれていた。

義務感、みたいなものがあつたのだろうか。

昔からずっと傍にいる相手としての。

それとも、わたしの心の傷をわかっているのが、自分しか居ないという意味で。

どちらにしても、負担をかけてしまったことは確かだ。

大学進学と同時にせつかくわたしと離れることができたのに、今またこうしてわたしは、敦司の部屋に押しかけて、世話になっている。

8・少し負けた気分

「出かけるなら皿洗いとその辺の洋服ちゃんと片づけてそれからしろよ。あと必ず火の元確認して戸締りは絶対忘れんな」

大学とバイト先へ出かける朝、敦司は毎回同じことを言う。それも一息で。

ロールパンをくわえている時もあれば、シャツに腕を通しながらの時もあり、稀に歯磨きをしながらなんて時もあるけれど、視線だけは、ながら作業ではない。

キツとわたしを睨みたいにして、少し、キツメに言い聞かせる。

わたしがここに来てからおよそ二週間が経とうとしているけれど、初日を除いた二日目以降の出発前のセリフはいつもこれだ。すっかり覚えた。

日によって皿洗いが洗濯に、洋服片づけが風呂掃除に微妙に変わったりもしながら、忙しそうに部屋中を歩き回っているのだけれど、このセリフをわたしに投げることは何故だか忘れない。

今日は薄いベージュ色のシャツのボタンをテンポよく追いながら、慣れた手つきで重ね合わせている。

しかしいつ見ても、敦司のシャツ姿は、いい。何というか、ボタンの似合う男だ。

「言わなくてもわかってるよ」

「何かしら忘れるだろ。いつも完璧なら何にも言わないの」

「はいはい。いつてらっしゃいませ」

ひらひらと手を振るわたしは、まだ布団の中で丸まったままだ。

敦司のこのセリフを起き上がって聞いたことは、まだ一度も無い。

天井とわたしの手のひらの間で、若いくせに渋い俳優みたいな顔をしながら敦司は、丸まったわたしを見て軽いため息をつく。

「わかってるならちゃんとやるように。そして昨日みたいな無茶はしないように。今日やったら、もう知らね」

「無茶しません。布団、干しとくから。天気いいし」

うん、と伸びをして、窓の外に目をやる。

一階の端の、敦司のこの部屋にはベランダがない。

外には、布団一組を干してしまえばすぐにいっぱいいいっぱいの、少しだけ茶色に錆びた柵があるだけだ。

下半分が擦りガラス、上半分が透明の窓の外から光が射し込んで、狭い六畳部屋を照らしている。

向かいの家のトタン屋根の上に、青に成りきらない薄い水色の空が広がっていて、その中をスズメが二羽、横切った。

今日は一日、絶対晴れる。

「布団干すなら早く起きろよ」

「もう少ししたら起きるから。掃除も洗濯も、問題なし」

「ついでに乾燥ひじき、買っというて」

「乾燥ひじき？」

「作るから。久々に食いたくなった、ひじき」

マメな男だ。

布団の中から敦司の背中を見送った。

今日は大学と、確かバイトもあつた日だ。

敦司はここから電車で三つ先の大学に通っていて、バイトは大学近くのコンビニでやっているらしいが、詳しいことはよく分からない。

バイトのある日は十時半過ぎに帰ってくる。

布団の中で膝を抱えて丸まって、一気に伸びをすると掛け布団から埃が舞った。

射し込む光でキラキラ光って、わたしを取り囲むようにしてゆっくりと落ちてくる。

もぞもぞと布団から抜け出し、四つんばいのまま窓へ移動してカラカラと引くと、砂利の上に白い猫がいた。

猫は一瞬驚いて、警戒するようにわたしを見上げて、やがて何事もなかったようにそっぽを向いて小道へと歩いていった。

ぴんと立ったしっぽの先だけがぴくぴくと動いていた。

東向きのこのアパートは、朝こそ眩しく照らし出されるけれど、昼を過ぎてしまうとそうでもない。

布団を干すなら早めに出して、昼過ぎには引っ込めるのがベストだ。

長く干しておく、東京の空気みたいにもんやりとして、どこから流れてくる生臭い匂いが染み込んでしまうような気がして、干したという達成感を味わえない。

わたしは家事というものなどままごとくらいにしか出来ないけれど、敦司が言い残していくことくらいは、ある程度、ちゃんとやる。

洗濯をして掃除をして、気分がのつてくると、それ以上のことを

やったりもする。

敦司が帰ってきて、ぴかぴかになった床などを見せ付けてみたりもするけれど、反応はイマイチだったりするので、面白くはない。次の日は大抵サボる。

開けた窓からいい具合の風が入り込んで、前髪を抜けて、少ししっとりとしている額に届いた。

立ち上がって腕を上げ、深呼吸をするとパジャマから腹が出て、外の空気に少し、冷たかった。

部屋の掃除をして、言いつけの皿を洗って、服をたたんで重ねて置いて、自分の布団と敦司の布団を交代で干して、洗濯をしながら牛乳を啜り、ときどきぼんやりと濃くなり出した空を見上げてため息なんてついてみるうちに、時計は昼を回っている。

布団を取り込んで部屋の隅に押しやり、洗濯物を外付けの竿にぶら下げて一息つく。

することが無くなる。

群青色の長座布団に被さるように寝そべってテーブルの下を見ると、あの雑誌が投げ出されていた。

手を伸ばし、そのままページをめくってみただけで、ぱらぱらと下に落ちるページが作る緩い風が顔を撫でるだけで、面白くも何ともなかった。

しばらくごろごろとして、天井を見たり、床の傷をなぞってみたりしていたけれど、それにも飽きた。

起き上がって流しへ行き、冷蔵庫から食パンを取り出してトースターに入れる。

しばらくすると、パンの焼ける朝っぱい匂いが流しに広がって、わたしはそれを取り出して新鮮な気分でバターを落とし、くわえながら窓へ戻った。

錆びた柵に寄りかかってパンを齧ってみたけれど、日はもうだいぶ高い位置にあり、朝の気分は直ぐに過ぎていった。

さっきの猫がいつの間にか戻ってきていて、向かいの家の側溝の手前からこちらを見ている。

丸まって両足を揃えて、目をつぶりながら微かに「にゃあ」と言っている。

ちゅちゅと舌を鳴らしてみても、やっぱり警戒しているのか少しも近づいてこない。

そのくせ、いちいち「にゃあ」と目を閉じながら鳴くものだから、わたしもつい意地悪くなってしまう。

もぐもぐと大袈裟に口を動かして、じつと猫を見る。

ひとかけ分を残して砂利へ落とすと、猫は黙って、しっぽの先だけを動かして、パンとわたしを交互に眺めていた。

わざとゆっくり窓を閉めながら、隙間からしばらく覗いて見ていたけれど、猫に動く気配はなかった。

ぐるりと部屋を見回して、抜けていることはないかチェックする。皺だらけの一万円札が尻ポケットに入っていることを確認し、少し怖くなって肩掛けのカバンに腕を通した。

その中に携帯とむき出しの一万円札を入れて、玄関へ向かう。

流しの火の元を確認し、スニーカーに足を入れる。

ベージュの扉を開くと、まったりとした春風が髪を揺らした。

まだ裏手に落ちてこない日の光は、遠くのマンションのベランダを照らしている。

気持ち良さそうにだらりとぶら下がった何枚もの布団が白く光っている。

やっぱり今日は、天気がいい。

行き先が必然的に決まって、わたしは玄関の鍵を閉め、抜き出した鍵をカバンに入れ、ドアノブを何度もくるくると回してきちんと閉まっていることを確認してから、歩き出した。

アパートの前を過ぎるとき、白い猫が目の前を勢いよく走り去っていった。

口に、パンをくわえていた。

少し負けた気分になって後ろ姿を見送った。

チャンスは、うまく掴む必要があるらしい。

9・カクアリタイモノヨ

中央線で東京まで一気に出てしまい、山手線に乗り換えて新橋へ向かう。

平日の電車は、サラリーマン率が高い。

東京駅から一緒に乗り込んだグレーのスーツのおじさんが、隣で「はあ」と深く息を吐いている。

つり革にもたれるようにつかまって窓の外を見ているけれど、表情は無く、眺めるともなしに明後日のほうを見ているという感じだ。

前に座るおじさんも同じ顔をしている。

時々ぎゅっと目をつぶり、顔中に皺を寄せ、渋々といった感じでゆっくり目を開けて、わたしのスニーカー辺りをぼんやり見始める。

くつくと足を動かすと、おじさんの視線が外れて、ため息とともにまぶたが閉じられた。

サラリーマンの疲労度合いなど、わたしには分からない。

けれど時々、鞆を抱えて眠り込む姿を見ると、泣きたい気分になるのはどうしてだろう。

そんなことを思っていると背筋の伸びたサラリーマンが乗り込んできた。見るからにバリバリだ。おじさんなのに、勢いが違う。

人によって、抱えるものも考えも、重みも違ければ受け止め方も様々なのだろう。

電車の乗り換えは面倒くさい。

第一、何に乗ればどこへ運んでもらえるのかが、まだよく分からない。

地下鉄は苦手なので避けている。あの、もんやり感が好きになれない。

新橋駅に着き、そのまま改札出る。

SL広場は結構な人がいて、にぎわっていた。

古本市をやっていたので一通りぐるりと眺めて見てまわる。

何冊か手に取り、面白そうなものを適当に選らんで、二百円を払う。

スカーフを頭に巻きつけたおじさんに、「へえ、おねえちゃん若いのにこういうの読むの?」と感心されたけれど、こういうの、という内容がどんなものか分からないので「ええ、読みます」とだけ答えておいた。

本を受け取るときに手が触れて、どきりとした。

ずらりと並ぶガード下の飲み屋街を過ぎ、さらに小さな飲み屋の立ち並ぶ細い路地を歩く。

一度夜のこの辺を間違つて通つてしまつて、冷や汗とあぶら汗をかきながら歩いたことがある。

ふらふらになつたたくさんのおじさんたちとすれ違った。

ぶつからないように必死で避けながら歩いた。

触れるのも酒臭いのも嫌だつたけれど、陽気に肩を組み歩くその姿は気に障らなかった。

うつぶんを晴らすように笑う赤い顔を見て、大いにはしゃげ、とさえ思った。

翌日にはまた、何か重いものを抱えて、ぼんやりとした表情で電車に乗り込むのだから、ふらふらになるまで飲んで騒ぐ日があつても、いいと思う。

店と店の間に突っ込まれた看板やビールケースなんかを見て、敦司もサラリーマンになつたらこういうところに通うようになったりするんだろつかと、ふと思う。

ボタンの似合う男だ、たぶん、スーツも着たその日からしっくりと似合つてしまふんだろ。

けれどスーツ姿の敦司を、新橋の、この路地裏の雰囲気には当てはめようとしてみても何だか旨くいかなかった。

どちらかといえば、駅の反対側に見える、新しいビル街の、そっち側の人間になるような気がする。

大きな道路に出て、見えた東京タワーに向かってひたすら真っ直ぐ進む。

歩いてる側の日射しが強すぎてめまいがして、横断歩道を渡って反対側へ移動した。

背中と脇の下に薄っすらと汗が滲んでくるのが分かる。

コンビニに寄って、迷ったけれど炭酸じゃなくお茶を選んで買って、また迷ったけれど、いつもの弁当屋へ向かった。

途中の狭い道に入り、少し進むと小さな弁当屋がぽつんと建っている。

おべんとう、と書かれた緑色ののぼりが、道路に向かって二本、頭を垂れている。

左側の壁に吊るされたホワイトボードに黒マジックで、数種類の弁当名が丸っこい文字で書いてあって、価格もリーズナブルだ。

カウンターの右端に乗せられたガラスケースの保冷器には二種類のペットボトルのお茶と、何故か、瓶入りのコーヒー牛乳が入っている。

わたしがこの弁当屋をみつけたのは、何てこと無い、道に迷った末の結果だった。

上京して三日目、東京に来たら東京タワーだろうと、中学生以来の観光気分で作ってきたのだが、案の定、迷った。

適当に歩くうちにものすごく腹が減って、ふと目に入ったのがこの弁当屋だった。

のり弁を買った。店頭立つ人の良さ気なおばちゃんからおつりを受け取るときに、話しかけられた。

「学生さんかい？」

「いや、違います。観光みたいなもので」

「観光？ 一人でかい？ 東京タワー？」

「はい、そんな感じです」

久しぶりに見る三角巾を頭に小粋に巻いたおばちゃんは、ほうれい線がくつきりと刻まれた頬にさらにえくぼを食い込ませ、気持ちのいい顔で笑った。

赤いエプロンの胸の部分に、熊の刺繍がしてあった。大きな胸はばんぱんに張っていて、その下の腹も、気前よく張っていた。

わたしは、人に話しかけるといふ行為が得意じゃない。

けれど目の前のおばちゃんの、ゴム鞠のような風貌を見て、話し

かけても、言葉の妙な吸収などせず、ぽんと素直な軽やかさで返事が返ってきそうな感じがした。害はないように思えた。

弁当を受け取って、しばらくその場でもじもじしていた。

するとおばちゃんの方から話を切り出してくれた。

「どうしたんだい？」

「あの、分からなくなってしまうて。その、東京タワー。そのためここに来たんですけど」

「なんだ、迷ったの」

「はい」

「すぐそこさ、ほら、見てみ？」

おばちゃんの指差す方向に身体を向けて見上げると、この店に降るはずの日光をさえぎっているビルの空の上に、タワーのてっぺん部分が見えていた。

ああ、なんだ、近くに来てたんじゃん、そう思ったら安心して可笑しくなつて、振り向いて笑った。

「お、いい笑顔だね。味噌汁つけてあげるよ、持っていきな」

笑顔を褒められたのなんて初めてのことで驚いた。

笑顔ひとつで味噌汁までサービスしてくれるのか、このおばちゃん少し単純すぎるんじゃないかとその時は思ってしまったのだけれど、どうやらそうではなく、単に人がいいのだということを後々知った。

話しかけてもらったのと、味噌汁をサービスしてくれたのと、おばちゃんの雰囲気が好きだったことで、わたしは東京タワーに行く前に、この店に寄るようになった。

弁当を買つと、やっぱり味噌汁をつけてくれる。

まだ四回目だけれど、相変わらず赤いエプロンでにこにこ顔を出すおばちゃんとは、仲良くなったと思う。そういう気に、わたしがつまっているだけかもしれないが。

「こんにちは」

「こんにちは。今日も東京タワーかい？ 飽きないね、あんたも」

「はい、飽きないです」

「天気の良い日はすっきり見えるからね、遠くまで。たまには夜のタワーに上ってみたらどうだい？ そのほうが綺麗だろ、若いし、そういうの好きだろ」

「夜は、駄目なんです。それに上ってるわけじゃないし。下で弁当

食べて、見てるだけなんです」

「見てるだけ？　なんだい、それ」

「下から見るタワーが好きなんで」

変わった子だねえ、とほうれい線をさらに奥にへこませて、おばちゃんは笑った。

弁当を受け取って、タワーへ向かう。

どんどん大きくなってくるタワーは、水色の空をバックに、凜と朱色に構えている。

変わらずにそこにある安心感、それが好きだ。

途中の大きな方の芝公園の中を突っ切った。

カメラを手にした若い男やおじさんがたくさん居て、何をしているんだろうと近くに寄ってみたら、花壇の前でしゃがんでにっこり微笑む女の人が出て、どうやらその姿を撮影しているらしかった。

ちょうどタワーが真後ろに見える位置の小道でも撮影をされていて、腰に手を当てた女の人が次々にポーズを変えていく。

ビニール袋をぶら下げたまま、しばらくその様子を見ていたけれど、隣に立った若い男の視線を感じ始めてそっちを見ると、カメラを向けられて、驚いて逃げた。

学生たちがロードワークをしている。

歩道の端に寄り、そろそろと歩きながら交番の手前の小さい方の芝公園まで歩く。

いつものベンチに荷物を置き、背伸びしてタワーのほうを見やると、平日だというのに相変わらず入場待ちの列が出来ていた。

その前で、でんと、堂々と、東京タワーがそびえ建っている。

待ち構えているわけではないけれど、来るものを拒まない、そんな感じだ。

力強いのに何処か優しい感じがして、わたしは下から見る東京タワーが好きだ。というか、好きになった。

初日、タワーに来たのはいいけれど、入場料がもったいなくなつて中に入るのを諦めた。

真下で口を開けてタワーを見上げているうちに、下から見るその姿にはまってしまった。

こちらは一心に見上げて感心しているのに、タワーのほうはと言えば腰を屈めるようなことはしてくれず、かと言って見下すようなこともしない。

ただ遠くをじっと見据えて、自分の中に入ってくるものを受け入れて、涼しい顔をして、立派だ。

上ってしまうと分からないけれど、下からこうして見上げると本当に大きくて、てっぺんがどの辺りまで伸びているのか、曖昧になってくる。

今日みたいに雲の無い日は尚更で、天井が果てしない分、先が見えなくて吸い込まれそうで、くらくらする。

しばらくぼんやりとタワーを見上げて、わたしは味噌汁を啜った。唇についたわかめを舌で取って、飲み込んだ。

木の陰を、車が忙しく過ぎていく。

のり弁を食べきって、ベンチに横になる。

平日のこの辺りは、犬を連れた散歩のおじいさんくらいしか通らない。

買った本を読もうかと広げてみたけれど、直ぐに眠気が襲ってきた。

わたしは本を頭の下に敷いて、両手を胸の上で組んで、すっかり青くなつた葉の隙間で踊る木漏れ日を目で追った。

時々鋭く落ちてくる眩しさに目を細める。

木漏れ日の向こうで、東京タワーの朱色の身体が、傾きかけた日の光を受けて鮮やかに色を増していた。

水色の空と光以外、背後に何も抱え込まないタワーが羨ましい。

カクアリタイモノヨ、なんて思ってみて目を閉じると、輪郭だけになったタワーがまぶたの裏に映っている。

まぶたを閉じたまま、緑色のその輪郭を眺めているうちに、わたしはいつしか、眠りに落ちていた。

10・それも遺伝なのだろう

父の夢を見た。

八畳の、薄茶けた畳の敷かれた見慣れた空間。自宅の茶の間だ。

部屋の中央にある四角い茶色のテーブルの奥に、横になった父の姿が半分見えている。

ぐぐぐと、くぐもったいびきが聞こえる。どうやら寝ているようだ。

部屋の奥の左隅に小さな黒いテレビ、右隅に母の写真の飾られた黒い仏壇がある。

手前の右隅に客用の深緑色の座布団が五枚ほど積み上げられていて、全体的に、しんみりとした部屋だ。

他に目立つものといえば、右側の壁に青いクレヨンで描かれている、目と頭の大きいお姫様の落書きくらいのもので、その絵は、幼いころのわたしの作品らしいのだが、まるで覚えがない。

本当にわたしが描いたのか不思議なくらいの、三段レースのふりふりのドレスを着た少女趣味のお姫様だ。

つま先立ったお姫様は、頭と身体のバランスが悪い。にっこりしながら、傾いている。

ふらふらしている。何となく、わたしに似ている。

彩度明度ともに低いこの茶の間は、わたしが小さい頃から少しも変わっていない。

変わるものといえば、仏壇に供える花と食べ物と、縁側の向こうに見える猫の額ほどの庭を覆った季節毎に生えては枯れる雑草くらのもので、ブロック塀に沿って並べられている何も入っていない植木鉢なんかも、記憶が出来たころから同じようにそこにある。

テーブルに添うようにして仰向けで眠る父の隣に立つ。

寝巻き代わりの紺色の作務衣の胸元から、浅黒い顔につり合わない白い肌が覗いている。

だいぶ広くなった額に、くつきりと三本の皺が刻まれている。

両サイドの髪も、そろそろ危ないだろう。

こうしてじっくり顔を見てみると、随分歳を取ったな...と思わざるを得ない、艶のなくなった皮膚だ。

見下ろしたまま「お父さん」と声をかけてみたけれど、返事はなかった。

しゃがんで顔を覗き込む。時々いびきが止まるので、ほんの少し、心配になる。

わたしが育ったこの家は、一階に茶の間と和室二部屋、二階に和室二部屋の、父とわたしが暮らすには広すぎるくらいの木造住宅で、二階の一室をわたしが部屋として使っている。

もう一方は物置部屋と化していて、ランドセルとかダンボールがぎゅうぎゅうに詰まっている。

父は一階の一番奥の和室を自室としているのだけれど、そこで寝ている姿はあまり見たことがない。

いつも今みたいに、茶の間でごろりと横になって、そのまま朝まで眠ってしまう……といった感じだ。

父の朝は早く、夜は遅い。

知り合いの運送会社に勤めている父は、四トン車で中距離コースを廻るドライバーで、主に県内か隣県のスーパーに牛乳やヨーグルトや、トマトやキャベツなんかを運んでいる。

たまに、ぐしゃぐしゃになったプリンなんかを持って帰ってくる。

降ろし損じたものらしいのだが、ぐしゃぐしゃでもプリンはプリンだ。喜んで受け取る。

大型免許も持っているのだけれど、父は中距離をあえて選んでいる。

遠出の多い大型車だと、どうしてもその日中に帰ってこれないことが多いらしく、家にわたしを残していることを考えてのことだそう。

それでも、帰りの遅い日はとことん遅い。朝方になることもある。

そのまま少し休んで、わたしのお弁当を作って、また出勤する、なんてこともしょっちゅうだった。

眠そうに台所に立つ父の姿を見て、「弁当なんていいよ」と言ったことがあるのだが、父は菜ばしを持ちながら、「おかあさんと約束したから駄目なんだ」と腰に手を当てて、慣れた手つきで油の中のコロッケをひっくり返していた。

母は、わたしを産んで、一年も経たないうちに死んでしまったらしい。

父にわたしを残して、逝ってしまったのだ。

だからわたしには、母の記憶がまったく無い。今日までずっと、父と二人で暮らしてきた。

父とは、朝の僅かな時間と夕食時くらいしか一緒にいることもなかったのだが、それでも父は、わたしの話をなるべく聞こうとしたし、学校行事にもきちんと参加したし、家庭訪問もこなしたし、自分も仕事の話なんかをして、一生懸命に、父親をやっていた。

ただやっぱり、味気ないこの部屋の、二人きりのテーブルは、ひっそりとしていた。

それでも、暖かった。初めから母の記憶がないわたしには、それで十分だった。

父は、よくやっていると思う。

どうしても手の回らないことは、会社の事務のおばちゃんに助けてもらったり、隣の敦司の両親に頼んだりしての生活だったみたいだけれど、男手ひとつでわたしをここまで育てあげたのだから、相당한苦勞があつたはずだ。

わたしはわたしで、同性の母親がいないことで多少苦勞したこともあつた。

ひねくれてみようと思つた時期もあつたけれど、旨くいかなくて結局流されるままに生きてきた。

反抗期なんかも知らないうちに通り越していたし、特にわがままも言わず、それなりにいい娘として、すすくと育つたと思う。

家を出たい、と言つてみたのは、高校を卒業する一ヶ月前のことだつた。

石油ヒーターのぼおという温風と、テレビから聞こえる野球中継のやかましいアナウンサーの声を聞きながら、「東京に行つてみたいんだけど」と、ふと口をついた。

野球をぼんやりと見ていた父の、かつおのたたきを口に運ぶ手の動きが止まつた。

驚いた顔をして、「なんだ急に」と聞いた父に、「なんとなく」

みたいな返事をした。

数日後、許可が下りた。

敦司のところに世話になるという条件付きで。

年頃の男女を同じ部屋に住ませるのが条件というのもおかしいものだが、それだけわたしと敦司は兄弟みたいなものだったのだ。

どうせいつもの気まぐれで、わたしの東京行きも短期間のものだと思ったのだろう。

父が敦司の両親にぼろりと話をしたら、「それならしばらく敦司の部屋で様子を見てみたら」という内容でまとまったらしい。

わたしもわたしで、一人で何かしてみたい、という願望みたいなものは持っていたけれど、だからといって東京でなにをしたいという目標もなかったし、ただ何となくここを離れてみたかったただけだから、それで納得した。

父が、いくら敦司に送金しているのかは分からない。敦司にも聞いていない。

家の状況からして、大した額ではないだろう。

一人で何かしてみようと思っていたくせに、父に、敦司に、敦司の両親に、わたしは頼りきっている。

とりあえずバイトくらいは、早くみつけたほうがいい。

父の呼吸を確認して、母の写真の前に立つ。

若く、綺麗なその人は、線香立ての隣でわたしに微笑んでいる。

母親、なのだろう。

どんな人だったのかまるでわからないのに、おかあさん、ということが本能的にわかる。

いつも心の深いところで、切ないような物悲しいような、だけど温かい、懐かしい感覚が沸き起こってくる。

この人の中で、守られていたんだろうと、感じる。

顎がきゅっと締まった、結構な美人だ。どうして父と結婚したんだろう。

父は、お世辞にもカッコいいとは言えない。

丸顔に、低い鼻、大きな口に、つぶらな瞳。愛嬌は、ある。

わたしは、父親似だ。遺伝子の殆どを、父のものを受け継いでしまった。

けれど、くつきりとした二重まぶたは、おかあさん譲りの可愛い目だね、と言われる。

それだけで、満足だ。母との繋がりも、絶たれていない気がして、嬉しくなる。

マツチから直接線香に火をつけて、一本だけ、供えた。

細い煙が、真っ直ぐに天井へ上って、落ち着いた香りが広がった。

縁側へ出る。

雲のない空は、檸檬色に光っている。夕日が放つ、辿り先の無い光で、覆われている。

その下に、かわら屋根の低い家々が並んでいて、なぜか、連なる家のずつと遠くの方に、東京タワーが見えていた。

遠くにあるすぎて、まぶたの裏に映った緑色のタワーみたいに、輪郭がぼやけている。

ふと気配を感じて振り返ると、いつの間に起き上がったのか、作務衣姿の父がぼんやりと立っていた。

両手を腰に当てていた。いつものポーズだ。運転は、腰に来るらしい。

「東京タワー、ここからも見えるんだ」

わたしは何も考えず、そんなことを言っていた。

「見える日と見えない日があるけどな」

父も、当たり前前みたいに、ぼそりと言った。

父と立つ縁側に、線香の香りが届いた。

「飯にでもするか」

「お腹減ってないんだけど。さっき弁当食べたばかりだもん」

「じゃあ林檎でも食うか」

「だから、お腹、減ってないんだって」

そうか、と言って遠くの景色に目を細める父の手には、またいつの間にか林檎が握られていた。

檸檬色の光を浴びて、東京タワーみたいな色をしている。

父の左奥に見える仏壇の線香の、長く伸びた白い灰が、音もなく、落ちた。

「お父さん」

「ああ？」

父を呼んでみたけれど、何を言いたいのかわからなくなった。「なんでもない」と言ってから、わたしは黙った。

父はまだ、目を細めて、東京タワーを見ている。

「お父さん」

もう一度呼んだ。

父は黙ったまま、ん？ という顔でわたしを見た。

今度は、わたしの手にも林檎が握られていた。

昔から、ずっと遠い昔から、わたしは林檎が好きだ。ほんの少し明るくて、ゆったりとした温かいものに包まれて丸まっていた、本当に小さなころから。

きっと、それも遺伝なのだろう。

「弁当作りのほかに、おかあさんと約束したことってなに？」と聞こうとして口を開きかけたときに、父は大きなあくびをした。

わたしもつられた。

二人で同じ格好で、縁側に立っていた。

線香の香りが、殊更に強くなって、そして消えた。風がさわりと

通り過ぎた。

少し寒くなってぶるっと一回震えた。東京タワーも手にした林檎もぼんやりと薄らいできた。

あくびで出た涙のせいかと思い目を擦っているうちに、全部が見えなくなって、わたしは、目を覚ました。

11・同じことをやられた

鼻先がくすぐつたい。

葉の擦れる、さわさわという音が聞こえていた。

顔に手をやると、サイドの髪が束になって被さっていた。

髪を払って手のひらをぎゅっと握り締めると、ぱきぱきと音がなった。少し、むくんでいた。

急に強い風が下から上に舞って、わたしの髪をぐしゃぐしゃにして、葉を掻き分けて、道路のほうへ逃げていった。

顔に髪を貼り付けたまま、ぼんやりと上空に目を凝らすと、夕日に照らされた丸い雲がひとつオレンジ色に染まっていて、薄紫色の空にぽつんと寂しげに浮かんでいた。

ん？　　と思つて首を傾けると、父の姿はなかった。ああ夢か、と納得して身体を起こす。

春とはいえ、何もかけずに眠り込んでしまうと、さすがに寒い。

両腕で冷えた身体を摩さすると、いろんなところからぱきぱきと音がなった。

わたしの身体は、鈍なまりすぎている。

東京タワーは、まだ点灯していなかった。変わらずに前方をじつと見据えている。朱色は少し、くすんでいた。

携帯を取り出して時間を見ると、五時を過ぎていた。

留守電が入っている。二件だ。

むくんだ指先でボタンを押し、耳に運ぶと、肩甲骨あたりが痛かった。首筋も張っている。肩までこつたらしい。

『ピー……「あ、俺。布団、ちゃんと干したか？ 取り込んだか？ あと皿。洗った？ 出かけてもいいけど、遅くなるなよ。今学校終わったから、これからバイト。洗濯物も取り込めよ。夜、雨になるみたいだからな。じゃー」 ピー……』

敦司だった。やっぱり、マメな男だ。

二件目を聞こうとして思い出した。

そういえば洗濯物は出しっぱなしだった。

空を見上げる。雨の降る様子は伺えない。まあ、大丈夫だろうと次のメッセージを確認する。

『ピー……「忘れてた。もう一個。ひじき、乾燥ひじき、ちゃんと買っとけよ。できたら戻しといて。水に付けとけばいいから。じゃーな」 ピー……』

敦司は、頭の休まることってあるんだろうかと思ってしまう。

常に、いろんなことを覚えている。過去のことまで抱えて、先のことまで気にかけている。

それが普通なのだろうか。そうだとしたら、どうしてわたしには、その能力がないんだろう。数時間前に干した洗濯物のことさえ、すぐに忘れてしまう。

自分で自分に呆れる。そして敦司を、少し、頼もしいと思ってしまふ。

しかしマメすぎるのもどうかと思う。

敦司からの留守電は、いつも大体、二件、納まっている。

わたしは滅多に携帯を使うことがない。時計代わりに使っているようなものだ。

なので、電話に気づかないことが多い。気づいたときには、留守電が入っている。

といってもわたしの知り合いなど父か敦司しかいないので、納まっている声といえば、ほとんど敦司のものだ。

父は、わたしがこっちに出てきてから、まだ一回しか電話を寄越していない。話下手なのだ。わたしも、父も。

道路を走る車のヘッドライトがちらちらと点き始めた。

木々の間を、相変わらず忙しそうに走り去っていく。

枕にしていた本の表紙は、真ん中が少し窪んでいる。鞆にしまおうと手に取り、裏表紙の砂を払った。

「あれ？」

ベンチの上に視線を這わせる。

無い。

座ったまま腰を屈めて、ベンチの下を覗き込む。

無かった。

「あれあれあれあれ」

立ち上がって周りを見渡した。後ろの側溝、前の土手、隣の水道の陰。

「ない、ないないない、ない」

肩掛けの鞆が消えていた。

どこを見渡してもみつからない。在るのは、のり弁の空き容器が入ったビニール袋だけだった。

ここに座ったときに、肩から外した。たぶん。そして、どこに置いただろう。足元だっただろうか。尻の下だっただろうか。いや、尻の下なら、潰れることはあっても無くなることはないはずだ。

東京タワーと弁当に、気を取られていた。鞆のことなど、何も考えていなかった。

洗濯物どこの話ではない。わたしは、自分で身につけていた鞆のことさえ、すっかり忘れている。

注意力がなさ過ぎる。あの猫でさえ、次に取る行動がわかっているのに。

「最悪」

誰かに、持っていかれたのだろうか。

この辺は、散歩のおじいさんくらいしか通らなかったはずなのに。

散歩する犬がくわえていったのかもしれないなんて思ってみて、いや、犬が持っていくとすれば弁当の空容器のほうだろうなんて考えて、馬鹿馬鹿しくて、ため息が出た。

でも確かに無いのだ。わたしでなければ、誰かが持って行ってしまったと思うしか、ない。

自分が歌舞伎町でやったことと、同じことをやられたのだ。

「どうしよう」

しばらく途方に暮れた。あの中に、崩した一万円札のおつりが全部入っていた。

頼まれた乾燥ひじき、買って帰れないな、と思ってみた。敦司にまた、お小言を言われる。生徒指導室の、先生みたいなあの格好で、けれど問題はそこではなかった。帰ることすら出来ないようだ。尻ポケットをあさってみても、今日に限って小銭のひとつも入っていないかった。

「こっから歩いたら、何時間かかるんだろう」

言ってみて、啞然とする。そして、途方に暮れた。

いろいろ帰る方法を考えてみたけれど、結局浮かんでくるのは「どうしよう」しかなくて、ベンチに腰掛けてただ時間だけが過ぎるうちに、空の色が陰り、怪しくなってきた。

後ろを振り返る。東京タワーは点灯していない。夜はまだ、少し先だ。

ぼつんと浮かんでいたオレンジ色の雲は消えていて、薄いけれど低い雲が広がり始めていた。

握り締めていた携帯を見る。

やっぱり、敦司しかいないだろう。

開いて名前を表示させ、指をボタンに這わせただけで、どうしても押せなかった。

朝、確かに聞いたのだ。「今日やったら、もう知らね」と、敦司は言っていた。

けれど電話をすれば敦司は、昨日みたいに飛んできてくれるだろう。首筋に汗を光らせて。

しかし連日だ。そしてバイト中だ。迷惑をかけるのが、さすがに躊躇^{ためら}われた。

「参ったな」

言いながら頭をかくと、ボブカットの後頭部の髪が盛り上がっていた。

ため息をついて足元を見る。木の影も、わたしの影も、無くなっていた。

ふと、スニーカーの横の、空容器の入ったビニール袋が目についた。

弁当屋の名前の裏に、味噌汁の容器の「わかめ」の文字が写っている。

おばちゃんの顔が浮かんた。ほつれい線が深く入った、えくぼのおまけ付きの人の良さそうな笑顔。

「行ってみようか」

ビニール袋を取り上げて、膝の上に置いた。縛ったところから、割り箸が飛び出している。

迷ったけれど、わたしは立ち上がり、本を小脇に挟んでビニール袋を両手で持って、歩き出した。

芝公園を後にする。

さっきとは違う学生たちが、やっぱりロードワークをしていた。

ダッシュの練習だろうか。ものすごい勢いでこちらに向かって走ってくる。

日が陰っているので、シルエットがぼやけていて、なんだか怖か

った。歩道と車道の境の柵に寄り添って、学生を巧みにかわした。

道路の交通量は増えていた。塊になった車が、イライラとわたしの傍を過ぎていく。

学生と車に急かされて、わたしもいつしか小走りになっていた。

薄紫色だった空は、灰色に変わっている。

空気がもんやりとしてきた。本当に雨が降るかもしれない。急に心細くなった。

敦司の顔が浮かんで、それに負けて、携帯をポケットから取り出してボタンを押しかけたけれど、傍で鳴った車のクラクションに驚いて、はっとして、やめた。

学生たちと離れると、若い人やおじさんたちとすれ違った。昼間とは微妙に違う面子だ。

ビニール袋を持つ手に力が入った。割り箸は、ますます長く顔を出した。

走り出したら、小脇に挟んでいた本が黒いアスファルトにはさりと落ちた。

本より先に進んでしまい、慌てて戻ってしゃがみこみ、拾い上げた。もう一度小脇に挟んだけれど、安定しないのでビニール袋と一緒に抱え込み、立ち上がった。

小道に逸れる。

弁当屋の明かりが、薄暗くなった狭い通りを照らしていた。緑色のぼりは、片付けられていた。

少し進んで、緊張してきて、足が止まった。

「どうしよう」

どうしよう、どうしよう。

思いついて来たのはいいけれど、そんなことしていいのだろうか。

客として通っているだけで、しかもまだ四回しか弁当を買っていないのに、言えるだろうか。

わたしは、おばちゃんに金を借りようとしていた。

大きな胸と、気前よく張った腹と、感じのいい笑顔。事情を話せば、きっと貸してくれるだろう。

そう思ったのだけれど、なかなか前に進めなかった。

緊張する。汗で湿った手のひらがビニール袋に張り付いて、梅雨どきのテーブルの上を撫でたときみたいになっていた。

ぼわりと強い風が吹いて、どこか遠くの方から運ばれてきた、雨の匂いがした。

アスファルトとオイルの匂いが強い、手のひらと同じように湿った風だ。

意を決して、右足を踏み出した。

明かりの前に立つと、シャッターが四分の一ほど下りていた。

店先に、おばちゃんの姿はなかった。何だか、しんとしている。

背伸びをして、後ろの壁に付けられた窓から奥の方を覗き込んだ。半分開いている。

青いエプロンの誰かが動いているのがわかった。

窓は低い位置にあるので、胸から上が見えなくて、顔がわからなかった。

よく見ると、胸も腹も出ていない。おばちゃんでは無いのは確かだ。

しばらくその場でそわそわと身体を動かして、つま先とかかとを上げ下げしながら、動く青いエプロンを見つめて、うじうじしていた。時間を稼いでみても、おばちゃんが現れる気配はなかった。

よし、よしよしよし、と心で言い聞かせ、おもいつきつて青いエプロンに声をかけた。

「あの、すみません」

思っていた以上に、小声だった。

緊張で咽が渴いていた。唾を飲み込んで、もう一度呼びかけた。

「あの、すみません」

窓の向こうの、青いエプロンの人の動きが止まる。

スポンジを持った手がこちらを向いて、窓のほうに近寄ってきた。

ほっとしたけれど更に緊張して、その人が窓から顔を出すのまでの僅かな時間、わたしは身を硬くして両肩を上げて、ビニール袋と本を握り締めて、お祈りをしているような格好で、待ち構えた。

カウンターの脇の保冷器が、うんうんうんうん唸っていた。

12・霧雨は避けにくい

「はい？」

泡だらけのスポンジを持ったままの手で窓を引いて、身体を屈めて顔を覗かせたのは、男の人だった。

背が高いんだろう。窓枠の向こうで、顔が真横になっている。

円形の水色の帽子の下に、切れ長だけれど腫れぼったい感じの目が見えた。

蛍光灯のせいだろうか、顔色が悪く見えて、そして少し、怖そうな感じがした。

「弁当？ もう終わったよ。悪いけど」

男の人は、窮屈そうに窓枠に納まりながら、構えて立っているわたしに面倒そうに言った。

それだけを言うと身体を起こして、また泡だらけの手で窓を閉めそうになったので、わたしは慌てて身を乗り出した。

「あの！ 違うんです」

半分叫んでそう言うと、閉まりかけた窓が再び開いた。自分の声にびっくりした。男の人が顔を見せて、さっきみたいに真横になっている。

窓枠を、洗剤の泡がゆっくり滑り落ちていく。

男の人は、わたしをほんの気持ち見たけれど、窓枠を伝う泡に視線が移って、その泡が下にたどり着くまでゆっくりと目で追ってから後ろを振り返った。

布巾を取り出したと思ったらしゃわしゃわと泡をぬぐって、なぜか、窓を閉めて姿を消してしまった。

「あ」

あからさまに無視されたと思った。啞然として窓の向こうを眺めた。

そのまま立ち尽くしていたら、しばらくして窓の左側にある扉が開いて、男の人がふらりと出てきた。

手の泡は無くなっていて、代わりに白いタオルが握られている。

丸まったタオルで手を拭いていた男の人は、それをふあさりと肩に掛けて、カウンターに手について「なに？」という顔をした。腫れぼったいまぶたが、くっと持ち上がっている。

店の人なんだろうか。帽子を被ってエプロンをしているし、きつとそうなんだろう。なのにこの威圧的な態度は何なんだろうと思いつながら、わたしは少し、後ずさりした。

のけぞって、ビニール袋をきつく握り締めた。なのに手から本が滑り落ちて、赤いマットの足元にぼそりと落ちた。

慌ててしゃがんで本を拾って、急いで腰を浮かせたらカウンターに頭を打ち付けた。焦りで勢いづいていた。ごん、と鈍い音が店先に響いた。

「あててて」

後頭部を^{さす}摩ると、髪にはまだ寝癖がついて盛り上がっていて、奥のほうで、じんじんと痛かった。

「ぶっ」

目の前で、男の人が吹き出した。

切れ長の目じりが下がっている。笑う顔を見ると、さほど怖い感じもしなかった。

青白く見えていた顔はなんてこと無い普通の肌色で、唇の色だけが少し、薄い。

わたしと敦司より、少しだけ年上って感じた。落ち着いて見えるけれど、笑う顔を見ると少年っぽい。同世代に感じる独特の匂いみたいなものがある。

ずんずんと頭が痛んだ。ぶつけたところを指で押すと、首筋にじんと響いた。

恥ずかしくて情けなくて痛くて、わたしは頭を抱えたままうつむいていたけれど、くくくと、男の人があまりにも長く笑うので、なんだか頭にきた。

「あの」

声を強くして、上目遣いでにらんでみせた。かなり、勇気が要いた。

「大丈夫？」

男の人は目じりに涙を溜めたまま、そんなわたしを無視して拳を口に当てて笑っている。ひとしきり笑って、肩にかけたタオルの端で顔全体を軽くぬぐってから、男の人は被っていた帽子を無造作に脱いだ。

帽子で癖のついた前髪がふんわりとおでこに垂れて、表情がぐつとやわらかくなった。

どきり、とした。

上半身を引いて、わたしは構えた。

「弁当じゃないなら、何？」

低い声だ。こもっていて、聞き取りにくい。

さっきまで全然興味無さ気だったくせに、急に珍しいものを見るような目つきでわたしを見始めた。涙が、目の端に残っている。

「おばさん、いますか」

「は？」

「おばさん、あの、赤いエプロンの」

「赤いエプロン？ ああ、ヨウコさん？」

「ヨウコさん？」

「違うの？」

切れ長の目が、少し大きくなって、わたしをじっと見ている。

「いや、名前、知らなくて。その、赤いエプロンの、こう、太った、おばさんです」

「やっぱりヨウコさんだろ。何？ ヨウコさんになんか用？」

「あの、ちょっと、お話が」

「話？」

「はい、話」

「今、居ないよ」

「え？」

男の人は、不思議そうに首をかしげている。どうしてわたしみたいな若い女が、おばちゃんに用があるんだろっ…って顔つきをしている。

「ヨウコさんに何の用？ 弁当の予約？ なら俺が変わりに聞いとくけど」

「あの、お金が無くて」

「は？」

「いや、その、うたた寝をしてたら、持っていかれちゃって。鞆。その中に全財産が入ってて、お金が無いんです、今」

わたしの話に、男の人はますます首をかしげた。眉間に皺がよっている。

「それで？」

「それで…その、おばちゃんにお願いして、お金を貸してもらおうかと思つて、来たんです。帰りの電車賃がないんです」

語尾は殆んど切れかけていた。

男の人はカウンターに手をつけたままじつとわたしを見ているので、なんだか怒られてる子供みたいな気分になっていた。

幼稚園のころの裕子先生みたいに相手が女の人ならいいけれど、目の前にいるのは男の人だ。尖らせていた唇も、萎えた。

「ヨウコさん、しばらく帰つてこないと思うよ」

「え？」

「今夜は友達とカラオケ教室だから」

「カラオケ教室」

「そ。終わつたら絶対飲んでくるし、遅くなるよ」

言って、男の人はようやく身体を起こした。

もう一度前髪をかきあげて、首を回している。わたしの首みたい
に、ぼきぼきなんて音は聞こえなかった。

「そうですか」

おばちゃん：ヨウコさんを待っていたら、ひょっとしたら夜中
になるかもしれない。

待つてるうちに敦司から電話が入って、結局は迎えに来てもらう
ことになるだろう。

立っている赤いマットの上の、自分のスニーカーを見つめて落ち
込んだ。自然とため息が漏れる。せつかく勇気を出して来たのに、
拍子抜けした気分だった。

「どっから来たの」

男の人の声に反応して顔を上げる。エプロンのポケットに両手を
突っ込んだ男の人は、左足を前に出して休めのポーズをとっていた。

「東京タワーです」

「は？ 家だよ、家。場所、どこ？」

「あ、中野、です」

「ふーん。歩いては、帰れないよな」

「…はい」

「ちょっと待つてな」

そう言つて出てきた扉から中に戻ってしまった。

言われたとおりちょっとだけ待つていると、戻つてきた男の人はカウンターにぽんと手を置いて、離れた。離れたカウンターの上に、皺だらけの千円札がのつていた。

「足りるだろ」

わたしはカウンターにのつた皺だらけの千円札に少し身を乗り出して、見つめた。それから男の人を見て、また千円札に視線を移して「あの」と言つた。

「とりあえずそれで帰りな」

「え？」

「傘、持ってたんの？」

「へ？」

「傘。雨、降ってきたけど」

男の人は、わたしの後ろを顎でしゃくった。

振り返ると、細かい霧みたいな煙った雨が狭い通りを覆っていた。

道路と電柱はまだら模様になっていて、風に運ばれなくてもアスファルトとオイルの匂いはもう、この街にたどり着いていた。

真っ暗だった。夜はいつのまにかやって来ていて、ニメートル先の街灯がちかちかと眠そうに点滅を繰り返している。

そのまま向かいのビルを見上げると、東京タワーの頭が見えた。明かりがついている。暗い空にそれだけが赤く滲んでいて、静止した金魚みたいだ。

「本降りになるかもな」

本当にそう思っているのかいないのか、どっちでもいいような口調で男の人は言った。

「そうですね」

タワーのてっぺんを見ながら、わたしもどっちでもいい感じにつぶやいた。

東京の街は雨を交わして歩くことなんて容易い。たやす田舎と違って、屋根代わりになるものが、いっぱいある。

けれど、問題は洗濯物だ。洗い直しは確実だろう。まずいな、と思っていると、後ろではたとと扉の閉まる音がした。

振り返ると、男の手に傘が握られていた。

「一応持っていったら？」

カウンター越しに渡されたのは透明のビニール傘で、無色だけれど古びていて、茶色っぽく見える。

「じゃ俺、仕事に戻るから」

男の人は、あっさりそう言うと、振り返って扉の向こうに行ってしまった。

え？ え？ と思っているうちに、窓枠に青いエプロンが納まった。顔がまた、見えなくなつた。

とりあえずお礼を、と思って青いエプロンに向かって「ありがとうございます、ございます」と声をかけると、左手だけが軽く持ち上がって、手のひらが見えた。やっぱり、顔は見えなかった。

手にした傘は、ただの棒みたいに固まっている。

窓枠の向こうに目を凝らしたけれど、男の人がわたしの相手をする様子はもうなかった。ありがとうございます、もう一度つぶやいた。小声は、湿った空気に溶けるだけだった。

小刻みに動く青いエプロンをちらちらと見ながら、カウンターの上の千円札をかざりと握って、尻ポケットの中に、そそそとしまった。

割り箸の飛び出したビニール袋は、店先にあるゴミ箱に、そっと捨てた。

何だか、一連の動きがこそこそしてしまった。

ビニール傘と本を抱えて、大通りまで小走りで出た。

霧雨が顔に張り付いた。

棒みたいなビニール傘は、ひだ同士がしっかりとくっついていて、開くのに手こずった。

ばりばりばりと音を立ててようやく開いた傘を肩にのせて、身体のを力を抜いて、駅までの道をゆっくり歩く。

雨の中で、ビルの明かりと信号と、ヘッドライトの明かりと街灯の明かりが、入り混じって揺れている。

晴れの日よりもずっと眩しくて、目を閉じながら深呼吸をした。

まとまった、塊みたいな空気が肺に流れ込んだ。水槽の中みたいだ。エラ呼吸ってどんなだろう、と思った。

まだ、ときどきしていた。

横断歩道で立ち止まり後ろを振り返ると、傘に、東京タワーが透けている。

雨に濡れたビニール越しのその姿は、ぼんやり滲んで、さっきよりも大きな金魚になっていた。

抱えた本が落ちないように、濡れないように、わたしは傘の中で身を縮めて、ひっそりと歩いた。

霧雨は、大粒の雨よりも避けるのが大変だ。

駅についたところには全身がしっとりとしていた。

やっぱり濡れるんだな、と思って、傘があつてよかったとしみじみ感じながら、やわらかくなったビニール傘を閉じた。

雨の匂いが、そこらじゅうに満ちていた。

13・わかんねーんだろうな

中野に着いたときには七時を過ぎていて、雨も、男の人が言ったとおり本降りになっていた。

ビニール傘に落ちてくる雨の音が、耳元でばらばらと不安定なリズムを刻んでいる。

風は大したことなくて、雨だけが真っ直ぐに空から降ってくるので、傘にバウンドした雨粒は、地面に素直に落ちていった。足元に跳ね返るけれど、全身に当たる量としては、少なかった。

八時まで営業のスーパーに駆け込んで、乾燥ひじきを買った。

洗濯物のことが気になっていたので、必然的に敦司の顔が浮かんで、ひじきのことでも忘れずにすんだ。お金も、千円札のおつりがあったので、足りた。

男の人の青いエプロンを思い浮かべながら清算するレジで、他に忘れ物は無かっただろうかとぼんやり考えた。

ぼうつとしていたのでそのまま雨の中に出てしまい、「あ、傘」と、濡れてから気がついた。わたしは、少し前のことから忘れていくらしい。

サンプラザ前の広場にはさすがに人の気配は無く、けれど相変わらずバスの匂いが漂っていた。雨に濡れた、シートっぽい匂いだ。

洗濯物、洗濯物、頭の中で繰り返しながら急いでアパートに戻った。

「あ」

玄関の前に立って気がついた。鍵が、無い。

靴の中に入れていたのだ。

「嘘でしょ」

何なのだろう、今日は。

終日晴れると思っていた天気には裏切られ、靴を取られ、人に金を借り、頭を打ち付けて、濡れて、部屋にまで入れない。

「はあ……」

洗濯物が気になったので、傘をさし直して、窓のある砂利道に出た。

びしょ濡れになった服たちが、泣いてるみたいにぶら下がっている。

手を伸ばして、敦司のグレーのシャツの袖を掴んだ。腕の手こたえがないと、当たり前だがただのシャツだ。着る人がいないと、ぱつとしない。濡れているから余計に頼りなく見えた。

敦司が帰ってくるまで、まだ二時間以上ある。

シャツの袖を掴んだまま雨の中で立ち尽くした。ビニール傘に当たる雨の音は、さつきと変わらずばらばらと不安定に鳴っている。

とりあえず玄関先まで洗濯物を移動しようと竿に手を伸ばしたときに、もしかして…と気づいた。

窓枠に手をかけて、恐る恐る引いてみた。

「あ。開いた」

からからと、か弱い音を立てて窓が開いた。鍵を、かけていなかったのだ。

自分の忘れっぽさに、このときばかりは感謝した。声には出さなかったけれど、心の底から喜んだ。

きよろきよろと周りを見渡して、柵に手をかけた。もう一度振り返って、誰も見ていないか確認した。人影はない。錆びた茶色の柵は体重をかけると少しきしんで、きいっと音を上げたけれど、構わずに急いでまたいで乗り越えた。

靴のまま上がりこんだ部屋のフローリングがきゅっと音を立てた。靴を脱ぎ、部屋の電気をつける。

洗濯物を取り込みながら、誰も見ていなかったか確認した。前の家の側溝に光る点が見えてぎよつとした。目を凝らすと猫がいた。朝の、白猫だ。両手を揃えて、わたしを見ていた。脅かすなよ、と舌打ちして窓を閉めた。

傘とスニーカーを玄関に運び、洗濯物を洗いなおした。洗っている最中で気がついて、乾燥ひじきを水に浸しておいた。

洗いあがった洗濯物をカーテンレールに引っ掛けて、ほうつと息を吐く。

完全に疲れきっていて、群青色の長座布団に腰掛けると、一気に力が抜けた。

そのまま寝転がって天井を眺める。壁掛けの時計を見ると十時少し前だった。

弁当屋での出来事を思い浮かべた。

態度のでかい、青いエプロンの男の人。けれど意外に気がきいて、傘まで貸してくれた。

千円札は、どこから出てきたものなんだろう。まさか店のお金を出すわけもないし、あの人の財布から出たものなんだろうか。

くくく、と笑う顔を思い出して、また少し腹が立った。けれどす

ぐにふんわりと垂れた前髪を思い出して、治まった。

敦司とは対照的な、やわらかそうな茶色い髪の毛。切れ長の腫れぼったいまぶた。

優しいのか優しくないのかよく分からないあの応対。

お金、返さなきゃな、と思って寝返りを打とうとしたときに、玄関から鍵の音が聞こえた。

「ただいまー」

間延びした、敦司の少し高い声がする。

わたしは身体を起こして、正座をして、敦司を出迎えた。

「おかえり」

「ただいま。何だよ、正座なんかして」

敦司のベージュのシャツは、両腕の部分がぼちぼちと濡れていた。真っ直ぐな黒髪は、しっとりしている。

「水もしたたるイイ男」

「は？」

思ったままを口にしたら、敦司は、何言っただこいつ、といういつもの顔をして、鞆を下ろして流しに消えた。

「お、由佳、ちゃんとひじき戻しておいたんだ」

嬉しそうな声を出して、かちやかちやと何かやっている。

わたしは小さく「うん」と言っ、正座していた足を崩した。

テレビをつけて、テーブルに頬杖をついて、敦司のかちやかちやが鳴り止むまでそうしていた。

流れていたのは洋画で、途中からだったから状況がわからなくて、ただぼんやりと見ていた。見ながら、別のことを考えていた。なんて言おうか、困っていた。

狭い六畳部屋に、いい匂いが充満し始めた。甘じょっぱい感じの、腹をくすぐる懐かしい感じの匂いだ。

「由佳、飯食ったの？」

匂いの先から敦司の声がした。「まだ」と言っ、と敦司がやってき

て、テーブルの上にこつんと皿が置かれた。ほやほやの、ひじきが入っていた。きゅうつと腹が鳴った。

「ほれ。自信作」

「美味そう」

「飯も食わないで何してたんだ、お前」

「…洗濯」

「洗濯？ 洗濯なんて一日中やってないだろが。飯、食うなら運べ。俺も腹へった」

敦司のベージュのシャツはすっかり乾いていた。

後ろ姿を見送ってから、わたしも立ち上がる。

即席のインスタント味噌汁を入れて、冷蔵していたご飯をチンして…を敦司がすでに終えていたのでそれをテーブルに運んだ。敦司は、フライパンで茄子を焼いていた。生姜のいい匂いがした。

二人で向かい合って遅い夕飯を食べた。

敦司の作る料理はいつも美味しい。ひじきは初めて食べたけれど、これもびっくりするくらい美味かった。父とたまに食べた、スープーのお惣菜なんかよりもずっと美味かった。

ニュース番組を見ながら味噌汁をすすする敦司の横顔を何度かこちら見た。

味噌汁をすすりながら、まだ口の中にはご飯がいっぱい詰まっているらしく、ほっぺたが膨らんでいる。

わたしの茶碗にはまだ半分以上ご飯が残っているけれど、敦司はもう、全部食べていた。

右の口元に、ご飯粒がくつついている。

そんな姿を、少し可愛いと思ってしまつわたしは何なんだろう。ちよつとだけ、和む。

お小言を言わなきゃ完璧なのに、そんなことを思いながらテレビを見ている敦司を眺めていたけれど、氣象予報士が明日は雨でしゅうと言ったところでふと我に返った。雨で思い出した。傘、そしてお金、返しに行かなきゃならない。

敦司の頬がへこむのを見計らつてから、おずおずと声を出した。

「敦司、あのさ」

「んん？」

「お小遣い、千円…いや、二千円くらい、貰えるかな」

「二千円？」

敦司の大きな黒い目がこちらを向いて、ぴくりと眉が動いた。

ああ、来るな、とわたしはいつものように身構えた。

「別にいいけど、何で？」

「使っちゃったから」

「ペース早くね？」

「先週、東京タワーに二回……えと、今日も行ったから。弁当も買ったし。あと本も」

「また行ったの？ 好きだなお前も」

眉はつり上がったけれど、なんだそんなことかみたいな感じで、敦司はテレビに目を戻した。口元にまだ、ご飯粒がくっついてる。

「あと、もう一個あるんだけど」

「もう一個？ 何？」

「鍵なんだけど」

「鍵？」と言って敦司はわたしを見た。雲行きが、怪しくなってきた。

「無くしました」

「は？」

「部屋の鍵ね、無くしちゃったの。ごめん」

「無くしたって……じゃ、どうやって入ったんだよ、ここに」

「窓から、入った」

「はあ？ 窓から？ 何だよそれ……」

言って敦司はカーテンレールに下がった洗濯物を見た。やけにしんなりして、洗い立て感がありありと残っていることに気づいたのだろう、その後、敦司の尋問が始まった。

結局、わたしは今日の出来事をすっかり全部話すはめになった。

話している間、敦司の顔はまた、おじさんみたいになっていた。

わたしは怒られながらも、敦司の口元のご飯粒が気になってそこばかりを見ていた。

「ちゃんとお礼言ってこいよ。しかし何でお前は……」

ふうつと息をついて、敦司が顔をぬぐうと、ご飯粒がぽとりとテーブルに落ちた。

「あれ」

「やっと落ちた」

「由佳、気づいてたの？」

「気づいてるもなにも、ずっとついてるんだもん、分かるでしょ」

「だったら言えよ。っていうか、ちゃんと話聞いてた？」

「聞いてました。すみません」

何だかおかしくて、わたしは笑ってしまった。そんなわたしを、敦司は頬杖をついて眺めている。呆あきれているというか、呆ほうけているというか、どちらかと言えば感心しているに近い顔だ。

「由佳」

「ん？」

「ホントに気をつけるよ」

「ん？ うん」

妙に落ち着いた口調だった。いつもより、声のトーンが低かった。

わたしが食べ終わるのを待って、敦司はテーブルの上を片付け始めた。わたしも手伝った。

敦司が洗い物をしている間、わたしはお風呂のお湯を張った。

洗濯物のところに行って触ってみたけれど、敦司のシャツもわたしの靴下も、まだしっとりしていた。

窓際の空気はそこだけがじっとりしている。

カーテン越しに外の雨音が聞こえていた。少しカーテンを引いて外を見た。窓を、いくつもの雨粒が伝って、落ちていく。

部屋の明かりが砂利道に差して、前の家の側溝まで届いている。白猫はどこかに帰ったらしく、いなかった。

敦司のシャツをピンチからはずしてハンガーにかけた。メタルラックの端に吊るして、ぱんぱんと叩いて皺はたを伸ばした。

ちょっといい事をした気分になって、流しに立つ敦司の隣に行つて、鼻歌を歌いながら敦司の洗った皿を拭いた。

斜め上で、ぼそぼそと敦司が何か言っている感じがしたので鼻歌を止めて、見上げた。

ベージュのシャツの、ボタンの上の敦司の顔についた黒い目とぶつかった。しばらく見つめ合った形になっていたけれど、敦司は何も言わなかった。

きちんとたたまれた棚の上の白いタオルを手にとった敦司は、ゆっくりと手を拭いて、「わかんねーんだろうな」と^{つぶや}呟いた。

14・じゃあやってみます

次の日は朝から雨だった。

この日は朝からは布団から抜け出して、着替えまでして、敦司の出發前のセリフを聞いた。

わたしがスペアキーを無くしてしまったので、敦司の鍵を預かった。敦司よりも、先に帰って来なきゃならない。

遅くなるな、というところに力を込めて、戸締りを強調して、二回ほど振り向いてから敦司は部屋を出て行った。今日は、細かいストライプの入った青いシャツを着ていた。

敦司から「しばらくこれでもたせろ」と五千円札を受け取ったわたしは、丁寧にそれを折りたたんで、小学生のころに父に買ったもらった赤くて丸いジッパー付きの小銭入れに閉まった。

ポイントでゲットしたトートバッグに、財布と携帯と、一応、昨日買った本も入れて、身支度を整えたところでロールパンをかじる。

テレビをつけて、天気予報を確認する。今日は、全国的に雨らしい。細い日本列島に、傘マークばかりが群がっている。

ロールパンをかじりながら窓の外を見ると、向かいの家の傾いた雨どいから、雨水が勢いよく飛び跳ねていた。

せっかく早起きした朝だというのに、空はどんより^{よど}澱んでいて、低い。

出かけるのが億劫^{おっくう}になってきてため息をついたら、窓が白く丸く曇った。

天気が悪いと、どうも気分がのらない。

掃除機を持ち出してコードを引き、コンセントまで手を伸ばしたところですっかりやる気を失くした。

こついつ日は危ない。やる気どころか何もする気が無くなる。

群青色の長座布団を、部屋の隅に追いやった。寝転がったが最後、一日中そうして過ごすことに成りかねない。

伸ばしたままの腕を強引にコンセントへ運び、掃除機を起動させた。

部屋中を歩き回り、掃除機をかけた。かけ始めると、ついさっきまでのやる気の無さは何だったのだろうと呆れるほど、夢中になった。

やってしまえばそれなりに楽しめるものだ。腰さえ上げれば、なるようになる。

ついでにフローリングを水拭きしてみた。ただでさえ雨で湿^し気^ける部屋の湿度はさらに上がった。歩くと、裸足の足に床が吸い付いてきた。

掃除を終えて、コーヒーを飲んで一息ついた。まだやる気のあるうちに、と思ったわたしはトートバッグを肩にかけ、窓の鍵をかけ、

玄関へ向かった。

立てかけておいたビニール傘と、水色の自分の傘を手にして外に出る。

扉の外は生ゴミみたいな匂いが立ち込めていて、屋根から落ちる雨水で玄関先にいくつもの水溜りが出来ていた。

雨の匂いが違う。わたしが育ったところは草と土の匂いがした。

黄色いレインコートに身を包み、赤い長靴を履いて、どこからか現れる青蛙を眺めていた。水溜りをつま先で蹴って歩いた。

何でもないそんな行動が、結構楽しかった気がする。

なのにどうして、少しばかり大きくなった今、雨の日は好きじゃないんだろう。

灰色の空と真っ黒になる道路の色と、空気さえも重くなる雨の日の、けれど行き交う人たちのカラフルな傘の群れに感動していたときもあつたのに、今じゃうつとうしさでいっぱいだ。

年を重ねることに、好きになれないものばかり増えていく気がする。

玄関の鍵をかけて、ドアノブを回して確認して、気になったので砂利道へ移動して窓に手をかけて引いた。

戸締りは完璧だった。傘を肩の上で回して、雨粒を振りまいて、駅までの道を歩いた。

新橋に着くと、雨の勢いは更に増していた。

広場にたまる人は少なく、傘をさす人たちがうつむき加減で足早に過ぎていく。

SLは大きな身体をびつしより濡らして照からせて、所在無げに佇んでいた。

いつもの路地を抜けて、弁当屋へむかう。

見えてきた東京タワーが、灰色で低い空を突き刺している。くつきりと見える雨足のなか、朱色の身体は相変わらず悠然とそこに居た。

タワーを眺めながら歩いていると、いつのまにか弁当屋へ折れる道の手前までやってきていた。

緑色ののぼりは、同じ色をした雨避けの下でひかえめに頭を垂れている。

やや上り坂気味の通りの向こうから、雨水がだらだらと下ってくる。

弁当屋の前でゆるくカーブして、わたしのスニーカーにぶつかって、後ろに流れさっていく…を繰り返していた。

雨水に逆らって店先まで移動すると、赤いエプロンのおばちゃん…ヨウコさんはカウンターで電話中だった。

「はい、三つですね。はい、ありがとうございます。ええ、はい」

忙しく、けれど注意深く、メモ帳にボールペンを走らせるおばちゃんせわの左手に握られた受話器が戻される。

小窓に振り返ったおばちゃんは、「カズくん、これお願い」と大きな声で中の人に呼びかけた。

窓の奥の青いエプロンの人が近づいてきて、メモを確認する手が見えて、小さく「了解」と声がした。

傘に落ちる雨の音でよく聞こえなかったけれど、たぶん、昨日の男の人だろう。顔の見えない青いエプロンが奥に引つ込むと、おばちゃんの赤いエプロンの、大きな胸と気前よく張った腹がこちらを向いた。

「お、また来たね、いらっしやい」

ぼんやり立っていたわたしに気づいたおばちゃんは、あの笑顔でカウンターに手をのせた。

「こんにちは」

つられたわたしも笑顔で答えた。

「まさか今日も東京タワーかい？ 好きだね、あんたも。今日なんて下から見てたらびしゃびしゃになっちまうよ」

「いや、今日は違うんです」

「そう。買い物か、なんか？」

「いや、今日はその、お金と、あとこれ、傘を返しに来たんです」

わたしは言いながら手にしていたビニール傘を差し出して見せた。トートバッグにぶら下げてきたビニール傘は、全体的に濡れていた。

「お金？ 傘？」

おばちゃんは小首をかしげた。顎の肉が、軽く二段になっている。

「あの、昨日借りたんです。夜に。ここにきて。その、青いエプロンの男の人に」

「借りた？ 青いエプロン？」

「はい。たぶん、今奥にいる、あの青いエプロンの男の人に」

「カズくんに？」

「カズくん…なのかどうか、わかんないんですけど、たぶん、その人に」

わたしは店先に立ったまま、昨日の出来事をぼつぽつとおばちゃんに話した。

雨の勢いは治まらなくて、話している自分の声さえ聞き取りにくい。

だんだんとつま先が冷たくなってきて、寒くなってきて、くしゃみが出た。

気をきかせてくれたおばちゃんが、カウンターのなかに入れてくれた。丸いパイプ椅子を差し出され、それに腰かけた。

話の途中でまた電話が入り、おばちゃんとの会話が途切れた。椅子に座った分、低くなった目線の先におばちゃんの尻がある。丸いけれど意外にも引き締まった尻に驚いた。

手持ち無沙汰から小窓に視線を移すと、青いエプロンの男の人が見えた。やっぱり昨日の人だ。まな板に肉のかたまりをのせて、適度な大きさに切り分けている。

黒い半袖から伸びた腕が、包丁を動かすたびに、筋張ったり緩んだりしている。

切れ長の目がついた横顔は真剣で、清閑^{せいかん}だった。鍋から上がる湯

気が時々その横顔を隠す。

ぼうつと眺めていると、横から肩をたたかれて、びくんと背筋が伸びた。

「いい男だろ」

おばちゃんはやにやしならわたしを見ていた。

男の人は、宮瀬^{みやせかずや}一弥という名前らしい。

一応社員という形をとって雇って、もう三年が過ぎるという。わたしよりも三つ年上だった。ずっと厨房に立って何百何千という弁当を排出してきたんだ、と大袈裟に語るおばちゃんは、妙に誇らしげにカズくんを褒めちぎっていた。

へえ、とか、ほう、とか、短い返事をしながら、いつのまにかわたしの話からおばちゃんの話に切り替わっていた会話に飽きてくるころ、突然おばちゃんに顔を覗き込まれた。

「ところであんた、今なにか仕事してるの？」

至近距離のおばちゃんの顔にびっくりして、少しのけぞりながら「いえ。探してるんですけど」と呟いたら、おばちゃんは更に続けた。

「じゃあさ、うちでバイトしないかい？ 若いんだから何もしてないなんて勿体ないだろ。先週一人辞めちまってね、ちょうどバイト募集しようかと思ってたところだったんだよ」

言いながらカウンターの下の棚に手を伸ばしたおばちゃんは、手書きのバイト募集のぺらぺらの黄色い紙を取り出した。

「これ、その壁に貼ろうと思ってたら電話が入ってね」

「はあ」

「あたしとカズくと二人でしばらくやってみたけどやつぱり昼時なんかは手が回らないんだよ。配達だつて入るだろ？ 店番も必要だしやつぱりもう一人欲しいところなんだわ」

「はあ」

「ね。試しにやってみないかい？ 難しいもんでもないし、すぐに慣れるさ」

肩に手をのせられた。軽い感じだったけれど、おばちゃんの重みでずんと肩が沈んだ。

おばちゃんの顔には、ほうれい線とえくぼがくつきりと食い込んでいる。ああ、やつぱり感じのいい笑顔だ、そう思っただけで赤いエプロンの胸と腹を見た。ああ、やつぱり大きそうな人だ、そう感じて」

じゃあやってみます」と頷いた。

おばちゃんの話は唐突で、自分の返事も早すぎるだろうと思ったけれど、断る理由なんてなかったのだ。面接の手間も緊張も省けるし、この東京で、顔を知ったおばちゃんのところでも働けるなら、逆にありがたい。

良かった良かったと手を合わせるヨウコさんは、うんうん唸っている保冷器から瓶入りのコーヒー牛乳を取り出して、わたしにくれた。

また、電話が入った。「幕の内二個ね、いつもありがとね」ヨウコさんの引き締まった尻を見ながらコーヒー牛乳を飲んだ。給食の味を思い出した。コーヒー牛乳がここにある意味が、少し分かった気がした。

カウンターの外ではまだだらだらと雨が降り続いている。

電話を終えて振り返ったおばちゃんが開けた小窓から、ご飯の炊ける、いい匂いが流れてきて、雨の匂いを消し去った。

「カズくん、これ、お願いね。あと今日は木曜だからあの人来るかもね。マーボー用の豆腐、仕込んでおいたほうがいいかもね」

カズくんが振り向いてこちらに歩いてくる。

目が合った。お、という顔をしている。

コーヒー牛乳を持つ手に力が入った。

ぺこりと頭を下げてみたけれど、なんだかすごく、緊張していた。

15・思わず、見惚れる

こうしてわたしのバイトは始まった。

働くなんて勿論初めてのことで、最初こそいろいろ戸惑ったけれど、ヨウコさんにあれこれ教えてもらって日にちが経つにつれて、次第に慣れていった。

弁当用の発泡スチロール容器を準備したり、鍋を洗ったり、お茶とコーヒー牛乳を補充したり、消毒をしたり、初めはそんなところから入ったけれど、最近ではカウンターで注文を受けることも出来るようになった。

これは結構緊張する。相手はおじさんやまとめて頼まれてきたらしい若い人などさまざまだけれど、ビジネス街なので男の人の割合が圧倒的に多い。

お金を受け取る手に触れないように慎重になってしまつので、ただでさえたとえしいわたしの動きと口調はロボットみたいになる。

「見ない顔だね、新入りさんか」

「はい、新入り、です」

なんていう当たり障りのない会話を交わしていると、「可愛い子でしょ、覚えてやってね」ヨウコさんの合いの手が入って、おじさんの意識がわたしから外れるので助かる。

若い男性客なんかは、わたしのことを意外にもじろじろと見る。目が合うと、わたしよりも先に向こうが視線を逸らす。相手のほうが弱いと、それを楽しんだりする余裕がある。

たまにピンク色やグレーの制服に身を包んだOLさんもやっている。

毛先がすっかりカールされて、程よい感じの茶色の髪をくるくると指先で丸めながら「のり弁とお」なんて言われると、可笑しくなって少し笑う。向こうも笑う。つられてもう一度笑うとOLさんもさらに笑う。きっと、わたしたちは別の意味で笑いあっている。

電話にもたまに出るようになった。

かけてくるのはほぼ常連さんで、注文の弁当も大体決まっている。

メモにとって、小窓を覗き込んで、カズくんに声をかける。

それが、一番の緊張ごとだったりする。

バイトを決めた二週間前、敦司にそれを報告すると、シャツのボタンを三番目まで外していた指の動きが止まり、大きな目を丸くさせて驚いていた。

「大丈夫なの？」

その日はおじさんみたいな顔でずっと心配していた。中野からわざわざ芝公園近くの弁当屋に通うことに対しても、わたしより敦司のほうが不安がっていた。

朝ちゃんと起きれるのか、サボり癖が出ないか、失敗ばかりしな
いか、「バイトでもみつけたら」と言っていたくせに、かなり心配
して質問攻めだった。

一番の心配事は、歌舞伎町で起こったわたしの発作だったらしく、
「絶対無理はすんなよ」と何度も頭を撫でられた。敦司の手のひら
の温度を感じながら、外れたボタンを見ながら、「大丈夫だって」
と笑ってみせた。

朝は敦司と一緒にアパートを出る。戸締りは敦司がしっかりやる
のでわたしはその姿を後ろから眺めているだけだ。

並んで駅までゆっくり歩いて、改札で別れる。

「がんばれよ」

敦司の手が頭に置かれる。敦司は、田舎にいたころよりずっと、
渋い顔が多くなった。

弁当屋は、午前中と昼下がりまでが忙しさのピークだ。

それ以降は、立地にもよるのか、人が来るのも電話が鳴るのもぼ

つりぼつりとなる。

人が途切れたところを見計らって、カウンターの丸いパイプ椅子に腰掛けて休憩する。

おばちゃんから貰ったコーヒー牛乳を両手で包みながら、ほっと息を吐いて、小窓の向こうを眺める。

カズくんは、一日の大半を厨房のなかで過ごしている。

わたしは滅多に厨房に入らないので、二週間が経つ今も、カズくんとはほとんど会話がない。

メモを渡すときに「お願いします」と言っつて、「了解」とカズくんがそれを受け取るまでの僅かな時間がわたしたちの接点だ。

なので、カズくんと言う人がどんな人なのかイマイチよくわからない。

わたしがお金と傘を返しにきたあの日も、「なんだ、別によかったのに」とぼそりと受け取って、わたしが「ありがとうございました」と頭をかきながら言うと、思い出したみたいに「頭、大丈夫だった？」と細い目をさらに細くして、くくくと笑っていた。

怖いのか、そうでないのか、掴めない。ま、わたしが頭を打ったことに対してあれだけ笑えるのだから、若いのだろう、とは思う。

厨房で働くカズ君はいつも青いエプロンに半袖のＴシャツだ。

キャベツの千切りなんて、びっくりするくらい早い。肉の塊も、

あつというまに小さくなる。

その度に腕の筋肉が綺麗に動く。コーヒ―牛乳を持ったまま、思わず、見惚れる。

「由佳ちゃん、口、開いてるよ」

高い声がして振り向くと、美月^{みつき}ちゃんが立っていた。

「あ、おかえり」

「ただいまー」

美月ちゃんはおもむろに保冷器を開けて、中からお茶のペットボトルを取り出すとコクコクと小さな咽を動かして美味しそうにそれを飲んだ。

美月ちゃんがここからコーヒ―牛乳を取り出したところを見たことがない。いつも、お茶だ。なかなか渋い子だ。

「今日学校でさー、リョウくんに告られてさー」

「告られた？」

「うん、好きなんだけど、だって」

「へえ」

「面倒くさいんだよねー」

「…へえ」

美月ちゃんは、ヨウコさんの娘さんだ。小学校五年生で、まだ赤いランドセルを背負った子供だ。しっとりとした肩までの癖のない黒髪は、まだ何にも手を加えていない瑞々しさを溢れている。

「由佳ちゃんさ、いつも見てるよね、カズくんのこと」

「へ？」

「ぼつと見てるよ、あたしが帰ってくるといつも」

にきびもなんにもないつるつるの顔に、からかうような笑顔が浮かんでいる。ぱつんと切りそろえられた前髪の下が目がくるくると踊っている。

「カズくん、よく見ると、あ、よく見ると、だよ、結構カッコいいもんねー」

小窓の向こうを覗く美月ちゃんのつま先が立っている。

「カズくんね、彼女いないみたいだよ、由佳ちゃん、立候補してみたら。あたしも目、つけてただけだよー、でもすんごい年上でしょー。あたしが大人になるころ、カズくん、もうおじさんだもん」

美月ちゃんは、まるでヨウコさんのようにわたしの返事もまたずにぺらぺらと一人でしゃべっている。ああ、親子なんだなと思いつながら、スリムなジーンズに包まれた、ヨウコさんに似た引き締まった尻を眺めた。

びよんぴよんと飛び跳ねる美月ちゃんに気づいた小窓の奥のカズくんがこちらを見た。美月ちゃんがひらひらと手を振って、それに答えるようにカズくんも手を振った。肉を抑えていた左手のひらが、ぴかぴかしている。薄い色の唇の端がきゅっと上がった。

窓を開けて、背伸びをした美月ちゃんが「カズくん、由佳ちゃんが好きなんだってー」と中に向かって大声を張り上げた。

わたしはびっくりしてパイプ椅子から腰を浮かせた。

美月ちゃんを静止しようと口元に手を伸ばすと、「あはは、冗談冗談」とけらけらと笑って、「あたしお菓子買ってくるー」とランドセルを揺らしてカウンターの外に走り去っていった。

台風みたいな子だ。

わたしは呆然とその姿を見送って、パイプ椅子に腰掛けた。両手で包んでいたコーヒ―牛乳は生ぬるくなっていて、手のひらが汗ば

んでいる。

「ませた子だろ」

今度は直ぐ傍でする声に驚いた。「うわっ」とまた腰を浮かせると、小窓からカズくんが顔を出していた。真横になりながら、くすくすと笑っている。

ぼっ、と自分の顔が赤くなるのが分かった。意識していないのに、美月ちゃん言葉を思い出して焦った。

「俺がここで働き始めたところから、ああなんだよ、美月ちゃん。最近の小学生って、すごいな。電車に乗ってても笑えるぞ、芸能人の否定話なんて、テレビとか雑誌なんかよりすごいからな」

くくくと笑う目と視線がぶつかる。わたしは口をぱくぱくと動かして、今の美月ちゃんの言葉を否定しようと必死だった。

「好きなの？」

笑いながらカズくんが言った。美月ちゃんみたいな、悪戯っぽい目だ。

「は、いや、違くて、美月ちゃんが勝手に」

「分かってるって」

「は…」

「あんた、入ったときからよそよしいもんな、苦手なだろ、俺のこと」

片手を窓枠にかけて、まだ真横になったままわたしを見るカズくんに見下ろされて、わたしは口を半開きにさせたまま固まった。

「よく怖いって言われるからな。別に脅してるわけじゃねーんだけど」

「…そうじゃなくて」

「目つきが悪いからかな」

「いや、そうじゃなくて」

「そうじゃなくて?」

「あたしが、苦手なんです」

カズくんは、は? という顔で私を見ている。

「ぶ。やっぱり苦手なんじゃん、俺のこと」

「あ、そういう意味じゃなくて、その、男の人が、苦手で」

「あ？ そなの？」

「そうなんです」

わたしはうつむいた。瓶を持つ手は、さっきよりも汗ばんでいた。

「ただいまー。あれ、なんだい、若いもん二人で。お邪魔かしら。
深刻そうだね」

ヨウコさんが配達から帰ってきた。

小窓で横になるカズくんの顔と、パイプ椅子でうつむくわたしの様子を見てなにか勘違いしたのか、ちよつと声が低かった。けれど、表情は興味津々といった感じで、楽しそうだ。

「いいねー、若いって。うん、いい、いい」

面白そうにそう言うと、「カズくん、あんまり由佳ちゃんをからかうんじゃないよ」とにやにやと笑ってどこかへ電話をかけ始めた。

「あ、あたしだけどね、今日のダンス教室にさ、娘もつれて行こうかと思ってるんだけど平気かね、いやね、カッコいいお兄ちゃんがいるんだって話したらさ、あの子興味持ちちゃってね。え？ そうなんだよ、参ったね、ませガキで。あはは。友達もつれていきたいっていうんだけどね……」

大きな声がカウンターに響く。

おばちゃん、ダンスもやってたんだ…思いながら尻を見た。どうりで引き締まっているわけだ。

カズくんのほうを振り向くと、カズくんもおばちゃんの背中を見たまま黙っていた。

ふと目が合った。どちらからともなく、わたしたちはくすりと笑った。自然にそうなったことに、わたし自身が驚いた。

怖い人じゃないのかもしれない。初めて会話らしい会話ができたことと、笑うと下がる目じりをまじまじと見たことで、抱えていた緊張も多少ほぐれた。

美月ちゃんが帰ってきた。ぶら下げたコンビニ袋の中に、ちっちゃくてカラフルなお菓子がいくつも入っている。「あー、なに二人で笑ってんのー」と興味津々だ。

カウンターの外でランドセルごとぴょんと跳ねる美月ちゃんと、大きな声で電話を続けるヨウコさんの姿を眺めて、わたしとカズくんは、声を出して笑った。

16・じつとして、息を止めて

バイトを始めて、わたしの生活は規則正しくなった。

店は基本的に日曜が定休日だ。それ以外の日はほぼ毎日出勤して、精力的に働いている。真面目な勤労者だ。だいたい八時間働いて、帰してもらつ。

美月ちゃんとはかなり仲良くなった。年齢の差はあれど、そこは女同士だ。そこそこの話は合うし、美月ちゃんの恋愛話も、わたしの小学生時代とまるで異なるので、嘘みたいで面白い。

ヨウコさんと美月ちゃんの会話に混ざるようにして、わたしと力ズくんもそれなりに距離が縮まった。もう、顔を見ただけで緊張するようなことはなくなったけれど、腕の筋肉とかふんわり垂れる茶色の髪を見ると、軽く動揺する。

一ヶ月が過ぎて初めての給料日、わたしは中野サンモールをあちこち物色してまわり、ジャガイモやニンジンや、イチゴジャムや食パンなんかを買いあさって部屋に戻った。

敦司はバイトがあってもなくても、大抵わたしよりも遅く帰宅する。それでもちゃんとご飯を作る。

包丁も鍋も水道も食材も、計算されているような速さで見事にそれぞれの役割を果たしていく。

敦司にしてもカズくんにしても、女のわたしよりもそれらしい。

料理をするふたりの後姿を見ると、たまに台所に立つ父のこ
とを思い出す。

可愛らしいお弁当を作ってくれはしたけれど、父の、包丁使いは
何年経っても危なかつた。大きな手の太い指で握り締める包丁
は、おもちゃみたいに小さく見えた。

父は今夜なにを食べるんだろう、と思いながら冷蔵庫に食材を詰
め込んで、わたしはカレー作りに取りかかった。

給料日で気分が良かった。自分が稼いだ金で、敦司に手料理でも
作ってやろうと思いついたのだ。

それでカレーだ。カレー程度ならわたしにも作れる。田舎にいた
ころも、カレーは何度か作った。父にはそれなりに好評だった。

念には念を入れて、作り方の手順を見ながら慎重に進めた。

包丁をがっちりと握り締め、カズくんみたいに適度な大きさに材
料を切り刻み、敦司のようにそつなくことを運んだつもりでいたけ
れど、途中、まな板から数回ジャガイモが転げ落ちた。

部屋のなかでカレーの匂いで充満し始めるころ、テーブルの上で
携帯が震えていることに珍しく気づいた。

手に取り、出してみるとヨウコさんからだった。

『あ、由佳ちゃん？』

「はい」

悪いんだけどね、と鼻息も荒く始まったヨウコさんの話によると、あさつての午前中納品でかなりまとまった数の弁当の注文が入ったらしい。イベント会場の昼食に配るのだそう。

業者が午前十時半までに引き取りにくるので、それまでに仕上げないといけないらしく、どうやら明日の営業が終わって、明け方から...ともすると夜通しの仕込み、詰め込み作業になりそうだという。

『明日さ、由佳ちゃんにも残っててもらいたんだけど大丈夫かね』

一度帰宅して、始発でまた出勤してもそれじゃ遅いだろう。第一、一度寝てしまったら始発に乗れるように起きれるかどうか分からない。

「はい、大丈夫です」

『いやー、助かるよ。助っ人も探しておくからさ、悪いけど頼むね、由佳ちゃん』

ヨウコさんはその後、まだ興奮した様子で何か話していた。

大変だなあ、とは思ったけれど、なんだか緊急事態みたいで、わたしはヨウコさんの声を聞きながらわくわくしていた。一端の、働く人間みたいな気分になっていた。

電話を切つてからもそわそわしていたので、火にかけたままのカレーのことをすっかり忘れていた。気づいたときには、底のほうが大いぶ焦げていた。

働く人間を気どる前に、身につけなければならないことがわたしにはまだまだありそうだ。

落ち込んだままカレーをかき混ぜていると、敦司が帰ってきた。

「いい匂いすると思ったらまさかここからは。何？　どうしたの？」

「カレー作った」

「いや、それは匂いでわかるけど」

「給料入ったんだ、今日。あたしのおごりであたしのお手製カレー」

「すごいな」

「すごいよ、いろんな意味で」

「由佳が、作ったんだよな」

が、の部分強調して、敦司は言った。

靴を脱いでわたしの後ろに立った敦司は、へえ、へえ、へえ、へえ、繰り返し返している。焦げ臭いことに、気づかないんだろうか。

すごく嬉しそうな敦司は、部屋で鞆を下ろしてからシャツの腕をぐいと捲くり、レタスをちぎってサラダを作った。あっというまだった。

「なんかいいよな」

同じセリフを独り言みたいに何度も言いながら、敦司はひたすらスプーンを口に運んだ。

勢いがいいので、敦司のグレーのシャツにカレーが飛んでくっついてしまわないか、心配になってしまっほどの食いつぶりだ。焦げなんて、まるつきり気にしていない様子だった。

わたしはそんな敦司の男の子らしい姿を眺めながら、思いのほかパンチの効いてしまった辛口カレーをちびちびと口に運んだ。何度も牛乳を飲んだ。

失敗作とはいえ、相手のために作ったものを喜んで食べてもらえることがこんなにも気分のいいものだとは知らなかった。

わたしは、父や敦司の作った料理を、こんなにも満足げに充実した顔で食べたことがあつたらうか。

作ってもらうことがあたりまえで、淡々と口を動かしていただけたらう。美味しいときは「美味しい」と言葉が自然に出るけれど、嫌いなものにはまず手が出ない。

美味しくない場合には素直に「まずい」と文句をつけ、与えられたものを腹に流し込むという行為を繰り返していただけの気がする。餌のように。食べたくないものを目の前にした猫が、ぷいとそっぽを向くように。

「作ってもらえるっていいよな」

敦司はまだ言っている。今日は口元にご飯粒はくっついていないけれど、鼻の頭にぽつんぽつんと細かい汗が浮かんでいる。

「良かったよ。そんなにがつがつ食べてもらえるなんてさ。焦げてるけど」

「いや、なかなかイケル」

「カレーだからね、そうそう失敗もしないでしょ。…焦げてるけど」

「好きなやつに作ってもらってというのがいいよな、やつぱり」

「は？」

「あ」

スプーンをくわえてわたしを上目遣いで見た敦司は、そのまま一瞬止まって、「なんでもない」と妙に焦って口走り、スプーンの音をやけに高く鳴らしながら、皿に広がったルーをかき集めた。

よほど辛いのか、それとも暑いのか。

おでこにまで汗をにじませ始めた敦司は、シャツの襟元をつかんでさばさと胸に空気を送り込んでいる。皿を持ち上げてわたしから顔を隠すようにして、集めた最後の一口を飲み込んだ。

結局、敦司は三杯もおかわりした。

わたしは、一皿たいらげるのがやっとで、がぶがぶと飲んだ牛乳で腹が張っていた。次に作るときには、中辛と甘口のルーを混ぜてみようと思った。いつ作ろうかな、と考えたけれど、そう遠くない未来のような気がした。

敦司と流しを綺麗にしてから、窓際に体育座りをして二人で涼んだ。ときどき、柔らかな夜風が前髪をかすめる。

茶色の柵にもたれると、錆びた鉄の匂いがした。鼻先にかかった髪の毛からは、玉葱の匂いがする。

右の空に傾いた丸い月が、白白と浮かんでいた。濃いめの藍色の空に、金属用のペンキを一滴垂らしたみたいなクリアな月だ。身体

に染み入るような月明かりで、気持ちまでまっさらになりそうだった。

この光が、余分なものや凝り固まったものや、そういう unnecessary ものを浄化してくれればいいのに、と思った。

胸につつかえているものはしぶとくて、いつまでも取れない。いつのまにか沈着している。

固まってしまうと取り除くのは容易でない。その上に溜まってくものも流れていかないし、新鮮なものを詰め込んでごまかしてみても、古いものに邪魔されて、新しいものから零れていってしまう。

「綺麗だな」

「うん」

「盆踊りのときもいつも、満月だったよな」

「うん」

敦司となら、いくらでも昔話ができる。

丸い月を見上げながら、いつしか幼い頃の話になっていた。

順を追って中学生二年のころの話までたどり着いたときに、わたしたちの会話は途切れた。少し重い空気が漂って、何もしてくれない月明かりだけが窓際を照らしている。

「あのときは参ったよ」

沈黙を吹き飛ばそうとわざと明るく言っただけ上げて、頷いた。敦司は苦い顔の口元を少しだけ上げて、頷いた。

なーお…なーお…

遠くのほうで猫の音がする。春特有の鳴き声だ。わたしはその声に耳を凝らしながら、体育座りのジーンズの膝をぎゅっと抱え込んだ。裸足の足先が冷えてきて、つま先を擦り合わせた。

「好きなんだよな」

ぼそりと敦司が言った。何のことか意味がわからなくて顔を上げると、敦司は、わたしの足先をじっと見ていた。

「なにが？」

「お前が」

驚いて足の動きが止まった。

それでも敦司は、わたしのつま先をまだ見ている。

「好きって、なにが」

「だからお前が」

「なに、急に」

「わかんね」

突然なにを言い出すのだろう、この男は。冗談にしては意味が深すぎる。からかいにしては性質たちが悪い。

「好きなんだよ、昔から。なぜか、ずっと」

わたしではなく月を見上げた敦司の横顔の、耳の後ろが陰っている。月明かりが、敦司の思考を狂わせたのだろうか。ぼんやりと、うわ言みたいな調子で呟いている。

「敦司、大丈夫？」

本気で聞くと、わたしに顔を向けた敦司と目が合った。黒い目が

どこことなく潤んで見える。ほんの少しどきりとして、言葉を繋いだ。

「どうしたの？」

「好きなんだよ、由佳が」

ぎゅっと何かが込み上げた。心臓を掴まれたような感じた。敦司の言葉の意味がやっとわかって、わたしは何度もまばたきをした。すればするほど動揺して、何も言えなかった。

なーお…なーお…

遠くでまだ、猫が鳴いている。月の明かりが次第に弱まって、辺りの色のトーンが落ちる。

少し陰った敦司の大きな目が、真っ直ぐにこちらを向いている。

素直な、正直な視線だ。敦司がなにを思っているのか、すぐにわかった。

予感、というのは、こういうものなのだろうか。映画より、ドラマより、ずっとリアルだった。

敦司の顔が近づいた。わたしの気持ちを量^{はる}ような少しの間があつて、やがて躊躇^{ためら}いがちに静かに。

左肩にのせられた敦司の右手を、わたしは自然に受け入れた。唇が触れている間、わたしはじっとして、息を止めていた。

緊張していた。けれどさっきまでの動揺はなかった。

離れても、不思議とわたしは落ち着いていた。

敦司は全然おじさんみたいな顔なんてしてなくて、苦しいような切なさうな、反省しているみたいな顔で、ゆっくりと離れていった。

わたしがいつまでもぼんやりしていたので、敦司のほう戸惑っていた。耳を真っ赤にさせて、「ごめん」と呟いた。

敦司がお風呂に入っている間、わたしはまだ柵に寄りかかったまま窓際で月を見上げていた。

どうしてかわからないけれど、泣きそうだった。

悲しいんだろうか、嬉しいんだろうか。よく、わからない。

つかえていたものが取れたというよりは、何かが溶け出して広がったような、複雑な気持ちだ。

けれど同時に、その気持ちを覆うようにして、透明で薄い、柔らかな膜がはったような感覚もあったのだった。

なーお…なーお…

猫の聲が近づいている。それに応えるようにして、近いうちに
同じ鳴き聲がした。

月は知らん顔で、わたしを見おろしている。

17・人と係わらない限り

カーテンの隙間から差し込む光が眩しくて、わたしは目を覚ました。

雀の鳴き声があちこちから聞こえていた。微かに羽ばたく音もする。

顔を横切る光は壁に届いて、一本の黄色い細い線を描いていた。

もぞもぞと寝返りを打って、光を遮った。

壁にくっつくようにして、敦司はぐっすり眠っていた。毛布にぐるぐるにくるまって、ミノムシみたいだ。黒い頭だけが覗いている。

敦司の枕もとの目覚まし時計を見ると、六時少し前だった。音が鳴り出すまで、あと二十分ある。

夕べはなかなか寝付けなかったので、二十分でも寝たい気分だった。けれど目を閉じて深呼吸してみても、二度寝出来る感じがしない。

仕方なくわたしはむっくりと身体を起こして、這いつくばりながら窓際へ行った。カーテンをひくと、擦りガラスを通して朝の光が眩しかった。

ぎゅっと目を閉じる。

起こしてしまうんじゃないかと振り向いて確認してみたけれど、

敦司に動く様子はなかった。細かった光は大きくなっていて、部屋
いっぱい広がっている。

静かに窓を開けた。五月の朝の、まだ汚れていない爽やかな風が
流れ込む。

キスの後、特になにが起こるでもなかった。

「おやすみ」を言い合って、いつものように別々の布団に入った。

なーおなーおと鳴く猫の声を黙って聞きながら、お互いに、沈黙
に耐えていた。

敦司がなかなか寝付けないでいたのはわかっていた。わたしも、
布団のなかで息をひそめて丸まっていた。

動いちゃいけないような気がした。毛布を深く被って、その中で
ちびりちびりと呼吸していたので、苦しかった。

同じ体勢でいるのがさすがに辛くなってきた、慎重に、ちょっと
だけ身体を動かした。が、布団が擦れて、かさりと弱い音を立てた。

しまった、と失敗したような気分でいると、ごそりと敦司も動い
た。妙にほっとして耳を澄ましていると、「ごめんな」と小さく聞
こえた。

わたしは黙っていた。寝たふりをしていただけけれど、起きてい
るのは敦司もわかっていただろう。

悶々というか、ぴりぴりというか、どうにも居心地の悪い空気が漂っていた。

なにか言おうかな、と何度も思ったけれど、いい言葉が思い浮かばなかった。

言ったところで、お互いの緊張がほぐれるわけでもないだろう。逆に朝まで眠れないかもしれない。

そのうちわたしは眠りに落ちた。何だか変な夢を見たような気がするけれど、覚えていない。

片目を閉じて、まだ白っぽい空を見上げた。昨日月の居た場所には、尾を引いた千切れ^{ちぎ}れた雲が薄っすらと浮かんでいる。

しばらく眺めていると、雲はゆっくりと、空に溶けて無くなった。

足を部屋に投げ出して、柵に寄りかかる。

夜、ここで敦司とキスをした。

その出来事も敦司の言葉も、昨日見た夢の一部だったんじゃないかと思ってみたけれど、唇に指をあててみると、敦司の感触は意外にもしっかりと残っているのだった。

毛布にくるまった敦司をぼんやり眺めていると、目覚ましが勢い良く鳴った。

もそもそと、敦司が顔と腕を出して目覚ましを止めた。少しむくんだ顔で、眩しそうに目を細めながらこちらを向く。「おはよ」と言うと、敦司は少し驚いた顔をして、「早いな」と言って起き上がった。

夢みたいな夜の後だって、朝は必ずやってくる。

昨日の残りのカレーを温めなおして、神妙な雰囲気の中、朝ごはんを食べた。

焦げ臭さは昨日よりも鼻について、わたしは眉間に皺が寄った。敦司の顔を黙って盗み見ると、同じような顔をしながら口を動かしていた。

ほとんど会話も無いまま、わたしたちは部屋を出た。

空は、水色になっている。遠くのマンションのベランダの窓がいくつが開いていた。既に洗濯物のぶら下がっている部屋もある。

わたしと敦司が小道に出ると、白い猫が前を横切った。

塀の隅で警戒するようにこちらを見上げている。「昨日鳴いていたのはお前か」とおもわず呟くと、敦司のほうが反応して歩調が緩んだ。

大通りに出る。平日のような交通量は無い。

坂を下る途中で、腕を組みながら歩くカップルとすれ違った。酔

っているような足取りで、わたしたちの後ろに過ぎていく。きやは、と女の人が甲高く笑うのが聞こえた。

コンビニの前には中学生くらいの男の子たちがいて、漫画雑誌を全員で覗き込んでいた。一人が笑うと他も一斉に笑う。格闘シーンかそうじゃないのか。筆圧の強いページを開いている。

乗客の少ないバスが通り過ぎた。窓際のおばあさんと目が合った。ような気がするだけで、わたしの後ろの何か別のものを見ていたのかもしれない。

適度に緩い、土曜の朝だ。

無性に炭酸が飲みたくなって、自販機でコーラを買った。がこん、と景気のいい音と共にボトルが落ちてきた。

「なんか飲む？」と聞くと、敦司は少し迷ってから同じものを指差した。やっぱりな、と思いながらボタンを押す。

歩きながら半分まで一気に飲み干すと、我慢するまでもなくゲップが出た。思っていた以上に豪快だった。

あはは、と敦司を見上げて笑ってみせた。笑っているうちに本当に可笑しくなってきた。涙と鼻水が出てきた。

何か拭き取るものはないかとジーンズのポケットをあさってみると昨日のレシートしか出てこなかった。焦げ付いたカレーを思い出すと全部が可笑しく思えてきて、腹を抱えて笑った。

「ぶ」

何かが弾けたように、敦司も笑い出した。「汚ねーな」とわたしの頭を叩く顔に、いつもの調子が戻ってきている。「カレー、焦げてたでしょ」と言うと、「朝気づいた」と答えた。

意外に鈍い奴だ。

すれ違ったおじさんが、いちやつくな、みたいな顔をしてわたしたちをじろりと見ていった。

そんな感じに映るのだろうか、わたしと敦司も。恋人同士がじゃれ合うみたいに。

誰がどんな時間を過ごしていたのかなんて、すれ違っただけの人にはわからないものだ。

あのカップルも、中学生たちも、おばあさんも、おじさんも、昨日どんな時間を過ごしてこれから何をするのかなんて、わたしの知ったことじゃないし、関心だってない。

人と係わらない限り、想像だけで終わってしまうんだろう。

サンプラザ前をジョギングしている女の人がいた。水色の上下のジャージ姿だ。空の色と同じで、見ているこちらも清々しい。

ポニーテールが左右に揺れて、楽しそうだ。でも走っている本人は苦しいのかもしれない。表情だけでは本当のところはわからない。

隣の敦司を見上げると、美味そうにコーラを飲んでいる。

「コーラ、美味しいね」

「朝から炭酸はちょっとキツイかもな」

そうか、とわたしは最後の半分を一気に飲み干した。

駅に着いた。敦司はいつものようにわたしの頭に手を置いた。今日はわたしも、負けじと敦司の肩を叩いてやった。

シャツの後姿を見送ってから、改札を抜けた。

ホームには今日も知らない顔たちがそれぞれの面持ちで並んでいる。

その列のひとつに、わたしも静かに連なった。

昨日は何もありませんでした、みたいな顔をして。

18・たまには夜のタワーも

店に着くと、カズくんもヨウコさんも既に仕込みに入っていた。

「おはようございます」

「おはよ、由佳ちゃん」

「はよ」

挨拶を交わし、わたしは自分の黄色いエプロンをしていつもどおりの営業が始まった。

黄色のエプロンはヨウコさんが与えてくれたものだ。「由佳ちゃんっぽい色」と渡されたのだけれど、どういう意味だろう。新米、ということだろうか。

左右のポケット部分だけが黄色とオレンジのチェック柄だ。まあまあ気に入っている。

その日はのんびりと過ぎた。土曜はいつも客が少ない。明日の準備のため、夕方過ぎには早々にシャッターを下ろした。

弁当屋の厨房の奥に、三畳ほどの小さな部屋がある。そこをわたしやカズくんが休憩室に使っている。

たまに美月ちゃんの友達が集まっていることもある。美月ちゃん

に似た、おませな印象の女の子たちだ。

わたしとカズくんが一緒に入っただけだと、ひそひそと、何やら勘ぐられる。が、それにも慣れた。

二階はヨウコさんと美月ちゃんの居住スペースだ。入ったことがないので部屋の様子は知らないけれど、二人きりで暮らしているのは何となく分かる。ヨウコさんの旦那さん…美月ちゃんのお父さんにあたる人を、見たことがないのだ。

「二時くらいから仕込み始めようと思うんだけどね、大丈夫かい？」

赤いエプロンの裾で手を拭きながらヨウコさんは言った。わたしとカズくんは目を合わせて、それからこくりと頷いた。

「よろしくね。それまで休んでね。あ、その辺の材料適当に使って夕飯食べていいからさ、カズくん、由佳ちゃんになんか作ってやつて。あたし支払いと集金と、仕入れに行ってくるからね、んじやよろしくね」

カズくんが「いつてらっしゃい」と返事をした。それを見て、わたしも「はい」と声を出した。

厨房の掃除を始めたカズくんを手伝った。掃除が終わるとカズくんは、「先に休んで」と腰に手を当てながら言った。「じゃ、そうします」と答えて、わたしは厨房を出た。

部屋にはテレビもラジオもない。おもちゃみたいな白いテーブルと赤茶色の座布団が何枚かあるだけだ。

今日はヨウコさんが毛布を準備してくれていたので、その上に寝転がって天井を眺めた。することが無かったので、持ってきていた本を読んだ。ページをめくってもめくっても内容が頭に入ってこなくて、何度も前に戻った。たぶん、わたしは興奮している。

本を閉じて毛布に絡まった。ごろごろと部屋を転げまわり、ひとしきり楽しんだ。

何だかお泊り会みたいな気分になっていた。今日はここに泊まって、夜中から仕事を開始するのだと思うと、妙にわくわくした。

転がりながらふと気づいた。ここに泊まるということは、カズくんも一緒ということだ。

急にどきどきし出した。敦司以外の男の人と、ひとつの部屋で長い時間一緒にいたことなんてない。

「やばいな」

どきどきが不安に変わって、絡まった毛布の端を握り締め、天井の蛍光灯を眺めていると突然ドアが開いた。

「なにしてんの」

ドアの先にカズくんが立っていた。弁当容器を二つ抱えて、丸まったわたしを見下ろしている。

日向ぼつこの最中に襲われた猫の気分だ。目を見開いたまま固まっていた。

「面白い？」

「あ、いや、全然」

「っていつか、もう寝んの？」

「まだ、寝ません」

焦ってわたしは起きあがった。毛布が絡んでいたので時間がかかった。

カズくんはわたしの弁当を用意してくれていた。野菜炒めとハンバーグと、ポテトサラダと煮物と、ウインナーとおしんこが入っていた。

「なんか、豪華」

「あまり物だし」

ウィンナーはご丁寧にタコさんになっていた。

足を数えてみると、六本しかなかった。ちろりとカズくんを見て、出そうになった言葉を呑みこんだ。

カズくんは、わたしにもタコさんウィンナーにも、特に興味もなさそうに黙々と口を動かしていた。Ｔシャツの裾がぺろんと捲めくれていた。

食べ終わるとカズくんは、畳の上にごろりと横になった。

背の高いカズくんが寝転がったせいで、三畳部屋はもつと狭くなつた。

わたしは隅のほうで膝を抱えて、寝ながら腹をさするカズくんの姿を眺めた。二人きりだとやっぱり緊張する。

Ｔシャツが上下して、腹が見え隠れしている。食べたばかりなのに平らで引き締まった腹だ。そんなところは、敦司と同じだ。

天井を見ながら、カズくんが口を開いた。

「あんたさ、東京タワーが好きなんだって？」

「へ？」

「ヨウコさんが言ってたよ、由佳ちゃんの下から見るタワーが好き

「なんだって」

「え」

「変わってるよな」

「そう、ですかね」

「上んないの？」

「上んないっていうか、タワーが見ただけだから下からでも十分で」

くくつと笑ったカズくんは、そうか、と呟いた。

「中野から通うの、大変じゃねーの」

話が飛ぶ。緊張しているので、質問に反応するのが大変だ。

「はい」

「それ、どっち？」

「あ、大変じゃない、のほう」

「そ」

質問するくせに、あっさりしている。会話はそこで終わる。

カズくんはどこから通ってるんだろう。そういえばわたしは、この人のことを何も知らない。

わたしが中野から弁当屋に着くと、カズはいつも先に来ている。仕事をしめている。

帰りもわたしのほうが先に出るので、カズくんがどこに帰っていくのかも分からない。

そもそも若いのに、どうしてこんなちっぽけな弁当屋に勤めているのだろう。三年も。

「あの」

「んん？」

思わず声をかけてしまった。しまった、と思ったけれど、振ってしまったので続けるしかない。

「どうして弁当屋……ここで働いてるんですか」

「タワーが見えるから」

「へ？」

「東京タワーの見えるところで働きたかったから」

頭の下で腕を組みながら、普通にそんなことを言っている。可笑しな人だ。

「見えるところって」

「タワーが好きなんだよ俺も。別にどこでも良かったんだけど、ヨウコさんもいい人だしさ。ま、縁があったというか、そんな感じ」

「へえ…」

「上京して調理の専門学校通いながらバイトさせてもらってたからさ、資格とったら他に行こうと思ってたけど、何となくまだここにいる」

「そう、ですか」

「そう」

タワーが見えるからって：カズくんだったってわたしのことを言えた口じゃないと思う。そんな理由か、なんて少し思ってしまったけれど、どうしてか笑う気になれなかった。

なんとなく分かる。わたしが東京に出てきて、真っ先に東京タワ

ーが見たいと思ったのと同じようなものだろう。

東京タワーを見ていると、自分が東京にいるのだと実感できる。けれど同時に、この街に出てきたことの意味を考えて何となく落ち込んでしまったりもするのだが。

わたしなんて特にそうだ。何がしたくて、ここに居るのだろう。

カズくんは天井を見つめたまま、わたしは膝を抱えたままですばらく無言だった。

もやもやしていたけれど、少し嬉しかった。係わりを持つ人のこととは、ちよつとだけでも何かしらの情報は仕入れておいたほうがいい。そのほうが、やりやすい。

「よし、行ってみつか」

高く持ち上げた両足を下ろし、反動をつけて勢いよく身体を起こしたカズくんが言った。

「え？」

「東京タワー」

「東京タワー？」

「行くぞ」

「へ？」

立ち上がったカズくんは、ドアの前で振り向いて「行くぞ」とも
う一度行った。

「行くぞって」

「たまには夜のタワーもいいだろ」

「いや…」

「嫌^{いや}？」

「あ、いや、そうじゃなくて」

「じゃ、行くぞ」

靴を履いたカズくんはさっさと部屋を出ていってしまつた。

「あ、待って」

訳が分からないままわたしもつられるように立ち上がった。スニ
ーカーに足を入れ、つまずきながらカズくんの後を追った。

大通りに出る前に追いついた。カズくんはジーンズのポケットに手を入れて歩いている。足取りは軽い。

そのまま後ろについて歩いた。

右に折れると、赤く色づいたタワーが見えた。

風は極弱く動いている。

19・大丈夫の答え

赤い東京タワーがどんどん大きくなる。

点灯したタワーをちゃんと見るのは久しぶりだった。というよりも、タワーをじっくりと見るのが最近なかった。

バイトを始めてから日中はずっと弁当屋の中だ。たまに店先に出て向かいのビルの上から頭を覗かせる姿を見たことはあったけれど、もう随分と縁遠くなっているような気がした。

「下からって、どの辺りから見てたの、いつも」

「え？」

「下から見る東京タワーが好きなんだろう？ どこで見てたの」

「ああ」

ちょうど芝公園の横を過ぎるところだった。

指を差し、「そこ」と答えると、カズくんはその方向に向かって土手を登り始めた。すたすた行ってしまう。わたし以上にマイペースだ。慌ててあとに続いた。

狭い階段を登ろうとしたときに、前のめりにこけた。「いで」と声をあげると、「大丈夫か」と先に登っていたカズくんに見下ろさ

れた。

「あんたって、いちいち面白いのな」

笑いながら手を差し出された。反射的にその手を取ろうとして右手を上げかけたけれど、はっとして引っ込める。

「だ、大丈夫です、一人で立てるし」

「そ」

カズくんはまた、くくつと笑って手を引っ込めた。

この人は笑ってばかりだ。わたしがカウンターに頭を打ちつけたときも、今も。

カズくんには少し、薄情なところがあるような気がしてきた。そうじゃないのかもしれないけれど、あまりぐいぐいと踏み込んでこない。

「結構です」と言えば、「じゃあ、好きに」と言うタイプだろう。

「大丈夫」と言っても、「本当に？」といつまで経っても心配し続ける敦司とは正反対だ。

でもいい。無駄に優しくされると緊張してしまう。男は苦手だけ

れど、このくらいの距離感はむしろやりやすい。だからわたしはこうして、カズくと二人で夜道なんて歩けてるのだろうし。

「そのベンチ」

「ふーん」

弁当を食べながらぼんやりとタワーを見上げていたベンチだ。そして鞆を盗られた場所だ。何だか随分前のような気がする。

「なるほど。いいポジション」

「でしょ」

ちよつと嬉しくなる。

夜空に煌々（こうこう）と浮かび上がるタワーを見上げた。昼間とは全然違う顔。赤くて、何となくすましている感じだ。

相変わらず前方をじつと見据えている。しゃんとしている。夜もいいな、そう思った。黒バックも、なかなか似合っている。

「ここでお金失くしたんです」

気が緩んだのか、わたしはあの日のことを語り始めてしまった。

「そうなの？」

「ここで寝ちゃって、起きたら鞆がなくなってる」

「こんなところで寝るからだろ。普通は寝ないだろ」

「…あまりにも気持ちが悪くて。晴れてたし。まさか盗られるなんて思ってたし。おじいちゃんくらいしか、通らないし」

「イタズラされなくてよかったな」

「え？」

「男苦手なんだろう？ こういう場所こそ危ねーぞ」

「はあ」

「あんたさ、無防備すぎんだよ、たぶん」

無防備、なのだろうか。それよりも、かなりのバリアを張って生きてきたつもりなのだが。

踏み込まれないように。自分からも踏み入らず。受け入れるものも、なるべく少なめにして。

もつとも、カズくんの言う無防備は、そういう意味とはまた違う

のだらうけど。

「せっかくだし、上ろう」

カズくんはまたさっさと行ってしまう。

階段を下りて、わたしを見上げている。

手、貸そうか、なんて言うてはいるけれど、両手はポケットに入
ったままだ。貸すつもりなんて全然なさそうだ。

さっきのわたしの態度で、わたしが手を借りるなんてしないこと
をわかっての言葉だろう。

この人、どういふつもりなんだ、とその手を見やりながら「平気
です」とぶっきらぼうに答えて、わたしは薄暗くてよく見えない段
差を足先で探った。

入り口でカズくんに入場料を払ってもらった。

慌てて出てきたので、財布も携帯も全て置いてきてしまっていた。

エレベーターに乗った時点で、わたしは既に浮き足立っていた。

展望台なんて、本当に何年ぶりだろう。下に下にと流れていく東
京タワーの赤い身体と、どんどん小さくなっていく地上の建物に少
しくくらしてしまふ。

それでもわたしはガラスにへばりついて、小さい子みたいにきやあきやあはしゃいだ。

乗り合わせたカップルがくすくすと笑う声が聞こえたけれど、聞こえないふりをした。

「すごい」

エレベーターを降りると、別世界だった。目の前に光の海。普通に感動した。

ぐるぐる歩き回り、三百六十度分、おもいつきり夜景を楽しんだ。気づくとひとりぼっちになっていて、慌ててカズくんの姿を探した。

南側のガラスの前でカズくんの後ろ姿をみつけると、妙に安心した。隣に立つと、「はしゃぎすぎだし」と笑われた。

カズくんは、遠くのレインボーブリッジ辺りをじっと見始めた。わたしもなんとなく、その方向に目を凝らす。

「綺麗」

「だな」

「東京タワーって、毎日こんな景色見てるんだ」

「なんだそれ」

「昼も夜も、一日中」

「毎日毎日」

「フトコロ、深いね」

「今タワーの腹の中だしな」

「あはは、そうだね」

隣を見上げると、カズくんの切れ長の目は余計に細くなっていた。素直に楽しんでいる自分に気づいて、急に照れくさくなる。

視線をそらして、遠くじゃない、足元の、ずっと下の方に広がる明かりを目で追った。

明るいけれど、黒の中に身を潜めたいいつもとは違う街並み。きよろきよろと視線を彷徨わせて弁当屋を探してみたけれど、全然見つからなかった。

明かりを落としてしまったあんな小さな弁当屋なんて、探せるわけがない。

今、わたしがここに居るなんてことも、下にいる人たちには勿論わからないんだろう。

ここからだって、下に誰がいるのかなんてわからないし、見えな

い。

一体どれくらいの人たちが、どんなことを考えて、この夜を過ごしているのだろう。

この光の海の中で。魚みたいにちっぽけな、たくさんの人たちは。

「なんか、小さいよね」

「なにが」

「いろいろ」

「いろいろ、な」

「なんで、抱えてるものはおつきく感じるんだろ」

「…捨てられないからだろ」

「…なんで捨てられないんだろ」

「捨てなくてもいいんじゃないの」

柵に両手をかけて、カズくんは伸びをした。ぐっと反らされた背中のかくほみをなんとなく目でなぞる。真っ直ぐな、いい背骨だ。

ガラスに視線を移す。光にまぎれるようにして、わたしとカズくんが並んでいる。ガラスに映る目と目が合ったような気がするけれど

ど、光に邪魔されて、よく見えない。

ぼんやり映るわたしたちは、頼りない。

「捨てたいものも、忘れたいものも、いっぱいあるよ」

「まあな」

「いろいろ、めんどくさい」

「タワー好きなんだろう？」

「え？」

「タワーみたいに受け入れればいいじゃん、とにかく」

「なにそれ」

さあな、なんて言いながら身体を起こしたカズくんは、尻ポケットに手を入れて首をかしげた。自分で言ったくせに、本当にわからない、みたいな顔をしている。

ビルの窓の明かりは、灯っては消え、消えては灯りを繰り返している。微妙な時間帯だ。

車の長い列がゆるゆると連なって交差しながら走っている。

観覧車は、気づかないくらいの速度でゆっくり動いている。

あちこちに散らばる看板の明かりが周期的に点滅する。

綺麗だけれど、次第に寂しくなってきた、その明かりを包むようにして広がる空を見上げた。

空の藍色は変わらない。ずっと高いところにある深い空を見上げると、この街も自分も、ものすごく小さく思えてきた。

二人同時に、ため息に似た息をふうつと吐いた。

もう一度、わたしたちは顔を見合わせて笑った。極弱く。

この距離感がちょうどいい。すつとぼけた感じのカズくんの態度も、気楽だ。

なかなか興味深い人だ、とわたしはひとり、頷いた。

感心に似た気持ちは、帰り道で二転三転した。

わたしはカズくんにおんぶされていた。

カズくんの背中で、どこに手を置いていいのか分からずに、上体を反らして乗っかっていた。

大通りに出ですぐ、何もない歩道でわたしは派手に転んだ。

どうして、この人の前ではかりいろいろ失敗するのだろう。

転んだ痛みよりも、何もないところで転んだことに自分でびっくりしてしまって起き上がれずにいた。アスファルトに突っ伏しながら、啞然としていた。

なかなか顔を上げないわたしを心配したのだろう。両脇に手を突っ込まれたかと思うと、わたしの身体はひょいと起こされていた。と同時に、近いところで顔を覗き込まれた。

「大丈夫か？」

さっきまで普通に会話ができていたのが嘘みたいに、これにわたしは反応した。途端に緊張して、案の定固まった。両脇に置かれたままの手が、熱い。

なかなか歩き出さないわたしに業を煮やしたカズくんは、今度はおもむろにわたしを背負ったのだ。

「あわわわわ」

降ろして、の言葉さえ声にならなかった。ばたばたと足を動かすわたしに「落ち着けて」と喝を入れながら、カズくんは歩き出した。

「あああああ、あの」

「うるせ」

「お、おろ…」

「は？」

「おろ、降ろし…」

「やだね」

くくく、とカズくんはいつもの調子で笑いながら、とんとんとんと軽快に歩いている。

そのうち鼻歌まで出てきた。この状況を、楽しんでいるらしい。

「だ、大丈夫、だ、から…」

「荒治療だ、もっと引っ付け」

前から来る人たちは、見て見ないふりをする。

後ろからやってくる人たちも、ちょっと振り返って、余計なものを見てしまったような顔をして追い抜いて行くだけだ。

敦司とは、キスだってできたのに、何なのだろう、この動揺は。

「ほん、とに、大丈夫、だから」

「まあ、いいから」

答えになっていない。

やっと出るようになった声を振り絞って、何度も「降ろして」と訴えたけれど、聞く耳を持つてくれない。

必死で足をばたつかせても、ますますがっちり抱え込まれるだけで、無駄な抵抗だった。

「ちゃんとしてろって。むしろしがみ付くくらいしろよ。つまんねーな」

思っていたタイプじゃない。「そうですか」と受け流すタイプでもない。これじゃ、かなりのドSだ。

「こんなことも駄目なの？ この先どうすんだよ、男できたら」

どうすんだよって、どうすんだよ。回らない頭で言葉を返そうとしたけれど、抵抗するのが無駄だとわかると、力が抜けてきた。

観念したわたしは、まるで荷物みたいにカズくん^{カズくん}に背負われたまま大通りを下り、店まで運ばれた。

カズくんが一步足を踏み出すたびに、心地よい振動が背中から伝わってくる。なのにわたしはカズくんの背中に寄りかかれなかった。真っ直ぐな背骨は、わたしを背負ったせいで少し丸まっている。

途中、車のクラクションが二回鳴って、冷やかされた。

カズくんはずっと鼻歌を歌っている。

恥ずかしいのと情けないのと、観念の後に残ったいつもとは違う緊張に、頭が混乱していた。

普通に、ときどきしていた。

背骨、撫でておけばよかったな、と何日後かには思ったのだけだ。

19・大丈夫の答え（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ノッポンブラザーズをご存知ですか？ 東京タワーのキャラクターです。

双子の男の子、という設定のピンクのバナナみたいな容姿に、それぞれ赤と青のオーバーオール着用したゆるキャラです。

彼らの夢のひとつに、「子供から逃げられないようにすること」とあるのですが、彼らの身長は二メートル二十三センチ。

大人でも逃げ出しそうなその身長設定に、彼らの夢が夢で終わってしまわないことを祈りました。

20・人と係わっていくって

店に戻ると、部屋に美月ちゃんがいた。

毛布の上につつぶせになって、雑誌を読んでいる。

若そうな、けれどわたしとは違う種類の女の子が好きそうな、パステル調の色合いが強い雑誌だ。美月ちゃんの、ピンクと水色の上下の服装とぴったりマッチしている。

わたしたちの姿を見て、美月ちゃんの目がみるみるうちに大きくなった。

「なに、なにー？　なんでおんぶなんてしてんのー？」

カズくんはわたしを背負ったままだった。

「いつのまにそういう関係になったのー？」

美月ちゃんは、明らかに勘違いしている。

毛布の上にがばりと起き上がり、見ていた雑誌を両手でつかんではんばんと床を叩きはじめた。何だかわからないが、ひどく喜んでいる。

「ち、違う、そんなんじゃない」

焦ったわたしはカズくんの肩を叩きながら抱え込まれている足をバタつかせたのだけれど、カズくんの方は言えば、この状況も楽しんでいらしかった。

「ついさっきから」

くくくつ、と笑いながら、美月ちゃんのことまでからかい始めた。

「ついさっき！　ねえねえ、二人でどこ行ってたのー？」

「いいとこ」

「えー？」

好奇心でいっぱい的美月ちゃんの顔は、少しばかり赤らんだ。

靴を脱ぎ、部屋に上がったカズくんは、「よいしょ」とわたしを降ろした。

降ろされたわたしは足に力が入らなくて、というよりも全身から気力が奪われていて、畳の上にへたり込むしかなかった。

「大丈夫？」

両手を畳について足を投げ出し、既にリラックスしているカズくんが笑いながらわたしを見ている。

大丈夫って、あんたがこうさせたんじゃないか、と上目遣いで睨んでみせたけれど、効果はなかった。

毛布を抱え込んで部屋の隅に移動したわたしは、まだ力が入らない。

そんなわたしを尻目に、カズくと美月ちゃんはけらけら笑いながらおしゃべりをしている。

東京タワーに行ったこと、わたしが階段でこけたこと、何もない道路の上でもいつきり転んだこと、わたしの失敗談ばかりをして、すごく楽しそうだ。

わたしのことなんて、完全無視だ。唇を尖らせて、そんな二人をしばらく部屋の隅でぶうたれて眺めていた。

何なんだろう。最近は疲れることばかり多くて大変だ。いろんなことに振り回されているような気がする。

敦司にしてもカズくんにしても、どんだけわたしを仰天させれば気が済むんだ、なんて少しイラつきながら、おしゃべり続けるふたりをこちらでも無視してやろうと本に手を伸ばしたとき、携帯のラ

ンプが青く点滅していることに気づいた。

確認すると留守電が二件入っていた。

「敦司だ」

二件、ということは敦司に決まっている。聞いてみるとやっぱり
そうで、一件目に楽しそうな高い声で『今日は何か食いに行こうか』
と入っていた。

そこで「あ」と思い出した。今日は帰らないことを言っていなかった。

朝の神妙な雰囲気飲み込まれて、すっかり忘れていた。

やべ、と思いながら二件目を聞くと、半分怒っているような、でも心配そうなトーンの落ちた声で『もうすぐ夜で暗くなるしどこほ
つつき歩いているんだ』という内容のメッセージが流れてきた。

また心配かけてしまった。

改札で別れた敦司のシャツの後姿を思い出して頭をかいていると、
美月ちゃんが目敏く声をかけてきた。

「どしたの由佳ちゃん、渋い顔して。電話？ あ、もしかして彼氏
？ えー、それじゃ浮気になっちゃうじゃん、カズくんがいるのに
！。ねえカズくん」

美月ちゃんはわたしの返事など待たずに一人で勝手に妄想して面白そうにカズくんを話をふる。ヨウコさんにそっくりだ。

カズくんは、口の端だけを上げて笑っている。

「いや、違うんだけど」

「誰、誰ー？」

「いや、ちょっと」

「怪しー」

「今日、戻らないって言うのを忘れてきちゃった」

言ってから慌てて口をふさいだ。これじゃ、美月ちゃんの好奇心をますます煽ってしまう。

「えー、誰にー？」

思ったとおり目を輝かせ始めた美月ちゃんに詰め寄られた。

わたしは身を引いて壁に張り付いた。小学生の女の子にビビってどうすんだ、と情けなくなる。なんでもない、と訴えても美月ちゃん

んはなかなか引かない。

「由佳ちゃん、誰かと一緒に暮らしてんだ！。ねえ、誰と？ 女の子？ 男の人？」

「友達…」

「だからあ、女の子？ 男の人？」

「お…」

「お？」

「い、いいじゃん、誰だつてさ」

「あー、男の人でしょー、言わないってことは絶対そうだ」

ますます楽しそうな美月ちゃんを横目にカズくんの顔をちろりと見た。

一瞬目があつたけれど、興味なさそうに視線を逸らされる。

さっきはわたしのことをからかっておんぶまでしたくせに、今度は知らん顔だ。

なんとなく、ムカついた。

「男の人。一緒に住んでるの。ずっと昔から知ってる人。心配して電話くれた」

視線は美月ちゃんの顔を通り越して、そっぽを向いたカズくんを見てしまい、自分でも驚くほど棘のある声が出た。

なんだか、いろいろぶちまけたい気分だ。

「男の人！」

「うん、そう」

「やっぱり！」

「いつも心配かけてばっか」

「えー、由佳ちゃんそういう人居たんだー」

「まあ…そう」

あ、これでは彼氏みたいに聞こえてしまう。

「ねえ彼氏？」

「そうじゃないけど！ あ、違うけど…でも！ 昨日の夜、キ…」

「き？」

「キ、キ、」

カズくんは畳に横になった。うん、と伸びをしている。

なんだよ、なんなんだよ。

口をパクつかせたまま眺めていると、肩肘をついて頭をささえたカズくんがこっちを向いて、目が合った。

急に焦る。

「キ、キ、金魚」

「はあ？」

「ちょっと電話してくる！」

わたしは立ち上がって外に出た。

扉の前で寝転がるカズくんが邪魔で、その上をまたいだ。妙に緊張していた。

「あ、敦司？ ごめん、あたし」

電話をするとすぐに敦司が出た。

『お前さー、もう夜だぞ、何してんだよ』

おもいつきり不機嫌だ。かさかさと、何かの音がする。また掃除でもしてるんだろうか。

「ごめん、今日帰れないって言うの忘れてた」

『は？ まさか、また金盗られたんじゃないやねーよな。ってか、また動けないとか？』

電話の向こうの声が急に慌てだす。しん、として音が鳴り止んだ。

「ううん、そうじゃなくて、弁当屋が忙しくて。明日までにすごいいっぱい弁当作んなきゃなんないの。で、今日泊まって、夜中から皆で作業するんだ」

『……よくわかんないんだけど』

「えーと……」

頭を整理する。

敦司は「は？」とか「うん」とか、「で？」とか「日本語で話せ」とか言いながら、わたしのヘタクソな説明を聞いていた。

二メートル先の街灯が、ちかちか点滅している。

巧く説明できなくてもややもやししながら、Ｔシャツの裾から手を突っ込んで背中をかいた。

開いた隙間から、すうっと涼しい風が入り込む。

帽子を被った若い男の人が、狭い通りの向こうからゆっくりと歩いてきた。

店先にぼつんと立つわたしをじっとりと見ている。歩調が緩む。値踏みするような目つきだ。

ぞくりとして、携帯を耳に当てたまま一步後ろに下がった。「あんた無防備すぎんだよ」カズくん言葉を思い出して、Ｔシャツに入れた手を降ろす。

「そんなことないもん」

背筋を伸ばし、キツと男の人を睨んでやった。男の人は眉間に皺を寄せて、ぺっと唾を吐いてから大通りのほうへ消えていった。

『は？ なに？』

電話の向こうで、敦司が怪訝な声を出す。なんでもない、と言いかけた時にいきなり後ろから肩を叩かれた。ひいっと声をあげて振り返ると、ヨウコさんだった。

赤いエプロンはしてないけれど、同じ色をしたＴシャツ姿のヨウコさんの大きな胸が目の前にあった。「びっくりしたじゃないですか」と声をあげると、ヨウコさんの気前よく張った腹が上下した。

「下に下りてきて聞いたんだよ美月から。由佳ちゃん男の人と電話しに行ったってね」

「え？」

『おい由佳、ひいってなんだよ今の声』

「聞いたって……」

「友達かい？」

『由佳？』

「あ、なんでもない」

「その子、暇かね？」

「え？」

『おいってば。誰かと話してんの？ 由佳？』

ヨウコさんと敦司の二人に質問されて、どっちと話しているのかわからなくなってきた。

わたしは二つのことを同時に進行するっていうことができない。

ひとつのことを整理するのだって、時間がかかるタイプだ。

電話に出て、カレーを焦がしたように。玄関の鍵をかけて、窓の鍵を忘れたように。

あたふたしていると、ひょいとヨウコさんに携帯を奪われた。

「あ」

「もしもし？ あら、ホントに男の人だね。あ、ごめんなさいね、あたし弁当屋のものですけど。そうそう、由佳ちゃんの。こんばんは」

「ええええ…」

ヨウコさんは奪った携帯で敦司と話し始めてしまった。

唖然として眺めていると、ヨウコさんの「あはは」という大きな笑い声が狭い道に響いた。大きな胸が揺れている。

「いやそんなことないよ、由佳ちゃん、すごくよく頑張ってくれますよ。え？ あはは、そうだね、ちょっと変わってるとこあるけどね」

「変わってるって……」

ドラマなんかで見る、おばちゃんの電話シーンのようだ。

ヨウコさんの手の中でわたしの携帯がぼやりぼやりと点滅している。確かに繋がっている。普通に会話しているその姿に、口を開けて見入ってしまった。

「急にごめんなさいね。ええそうなんですよ、久しぶりの大注文だね。彼氏さんだろ？ 由佳ちゃん借り出しちゃって悪かったねえ。え？ ああ違うの、なんだそうなの。うん、うん、へえ、そうなの」

「……」

敦司も敦司だ。いきなり代わられて、よく会話なんてできるものだ。しかも何の話題で盛り上がったるのだ。

「ところでさ、あんた……あ、あんたなんて悪いね、名前なんていうの？ カワハラ……アツシくんね、アツシくんさ、手伝いに出てこれ

ないかい？」

「…は？」

手伝いつて、いきなり何を言い出すんだろう。わたしは驚いて目を見開いた。ヨウコさんはわたしと目を合わせて、にっと歯を見せた。

「友達ふたり、助っ人で頼んでおいたんだけどさ、急にひとり駄目になっちゃったんだよ。バイト代もちゃんとお支払いしますんで、いやいや全然。駄目かね？」

なるほど、そういうことが、と納得しかけて頷いてしまった。けれどすぐにはっとして、まじまじとヨウコさんを見つめていると、ぱつと表情が明るくなった。いつも以上にえくぼがくい込んでいる。

「ああ、ありがとうね。うんうん、ごめんね、急でね。助かります。あ、じゃあ由佳ちゃんに代わるからね」

はいよ、と携帯を差し出される。わたしは何度もまばたきをしてヨウコさんを見た。

助かった助かった、と言いながら、わたしに片手をあげたヨウコさんは、ほつれい線をえくぼと共に顔に刻み込みながら、店の裏手に消えてしまった。

ぽかんと立ち尽くす。

左手に握られた電話から、「おい」と声が漏れてきて、慌てて耳に運んだ。

「あの」

『すげーな。いつも言ってたヨウコさんって人だろ?』

「うん。っていうか、敦司、来るの?」

『そうみたい』

「そうみたいって」

『ま、明日日曜だしいいわ』

電話の向こうで敦司が軽く笑った。

「なんか、ごめん」

『別にいいよ。それに...』

「それに?」

『心配だし』

「しん…」

『場所、教えて』

「あ、えつと」

またへたくソな説明で敦司に弁当屋の場所を教えて電話を切った。

「はあ」

息を吐き出して携帯を尻ポケットに入れた。

大変だ。いろんなことが一気に起こると、すごく疲れる。

父とふたりで暮らしていたときは、こんなに焦ったり、緊張したり、啞然とすることだってなかったのに。

ひとつひとつ周りに何かが増えていくたび、予想もしないことが突然起こる。

社会と…いや、それじゃ大きすぎるか。人と係わっていくって、こんなことなのだろうか。

面倒だけど、ときどきする。

はらはらするのに、わくわくする。

遠足の前日みたいな感じだ。

小学生の終わりごろから、もうずっと味わっていなかった。しばらくぶりだ。久しぶりすぎて、どう対応していいのかイマイチよくわからない。

「大変だな」

飛び跳ねながら部屋に戻る。

言葉とは裏腹な自分の行動に、ふっと鼻先で笑いが漏れた。

20・人と係わっていくって（後書き）

> 敦司、ヨウコさんと話すの巻<

「もし… え？ 誰？ 弁当屋… あ、由佳の。ああすみません、こんばんは」

「いつも由佳が世話になってます。迷惑かけてばっかじゃないですか？ かなりマイペースだし」

「何だか忙しいみたいで。彼… いや、違います。兄弟みたいなもんです。最近由佳がこっちに出てきたんで一緒には暮らしてますけど」

「はい？ あ、河原… 敦司です。はい？ 手伝い、ですか」

「ええ、そうなんですか。バイト代… いや、そんなのはいいんですけど。夜中から、ですよね」

「えっと、わかりました。明日はバイトも休みだし、行ってみます。いえいえ全然。あ、はい」

21・爪先立ちで、ふらふら

「うわー、カッコいいー!」

敦司到着後の部屋に響いた第一声は美月ちゃんのものだった。

扉の前に立つ敦司はぺこりと一礼して、どうしていいのかわからない顔をしている。

「アツシくん、だったよね、いやいやごめんね、急にかり出しちゃってねえ」

ささ、どうぞどうぞ、と手招きして部屋に促したのはヨウコさんだ。

美月ちゃんとヨウコさんのふたりに機関銃のように話しかけられている敦司は、終始頭をぼりぼりとかいていた。

が、そこは敦司だ。「いえいえ、そんなことないです」「急なことで大変ですね」「できるだけのことはお手伝いします」なかなかのお手前でふたりの会話の相手をする。

わたしは敦司が到着してから一言も会話をしていない。「あ、来た」と言っただけだ。

「いつも由佳がお世話になってます」の保護者みたいなセリフが

敦司から出たところで、こっ恥ずかしくなつて顔が熱くなった。

思わずカズくんを見てしまう。にやにやしているカズくんの切れ長の目と視線が合つて、うつむいて、萎えた。

隠していたものを発見されてしまったときのような気分だ。

「由佳ちゃんいいなー。こんなカッコいい人と一緒に住んでるんだ」

美月ちゃんはすごい。どんどん敦司との距離が近くなる。終いには容赦なくあちこちを触りまくっていた。

小学生相手に少々顔を赤らめてる敦司は、困惑気味に苦笑いを続けている。

ただでさえ狭いところに五人が揃つてしまったことで、部屋は異様な熱気を帯び始めていた。

変に動揺していたわたしが、暑いと感じていただけかもしれないけれど。

「ちょっと飲み物買ってくる」

わたしは財布片手に立ち上がった。怒ったみたいな声になっていた。

「あ、んじゃ俺も行く」

そう言って腰を上げたのはカズくんだ。「え」と立っただままぼけっとしてゐるわたしの横を通り抜けるときに肩を叩かれた。

「行くぞ」

「あ、はい」

条件反射みたいに返事をして、靴をはく。

振り返ると敦司と目が合った。何か言いたそうに口が開いているけれど、「でね、アツシくん」美月ちゃんにシャツの裾をつかまれて、動けずにいる。

うん、うん。美月ちゃんに顔を向けた敦司は、微妙な笑顔を貼り付けたままでもう一度わたしを見た。

「ほら行くぞ」

カズくんがわたしの頭を軽く叩く。

「あ、じゃ行ってくる。みんなのも何か買ってくるね」

敦司の視線を背中に感じながら部屋を出た。

「何でカズくんまで出てきたの」

「悪いの」

「悪くないけど、別にあたしひとりで大丈夫だし」

「別に心配して一緒に出てきたわけじゃないし」

「そう、ですか」

「あの場にいると疲れるだろ、美月ちゃんとヨウコさん、相変わらずすごいな」

くく、と笑ったカズくんは、歩きながら両腕を左右に振って、ストレッチみたいな動きをしている。Ｔシャツの背中にプリントされたサルの顔が歪んで、笑ったり怒ったり泣いたりを繰り返す。

「あの子と住んでんだ」

にんまりと顔を覗き込まれて、わたしは赤面した。しながら頬が膨らんだ。

「幼なじみで、敦司が先に東京に出てきてたから。今は仮住まいさせてもらってるだけで、その、別になんにもないし。それに」

「なんでムキになってんの？」

「む、ムキになんてなってないし」

「出てくるとき、心配そうだったな」

また、くくくつと笑う。

「そうかな」

「あんたのことが好きなんだろ」

「え？」

「からかい甲斐のありそうなタイプ」

「ちょっと」

カズくんの本性がだんだん見えてきた。やっぱり、相当なイジワルだ。

「だ、駄目だからね、敦司はすごくいい奴なんだから。いじめたら」

「ぶ。いじめるとかねーし」

「ホントに、いい奴なんだから」

いい奴なんだから…何だろう。いい奴なんだから、いじめたら許さない、とでも言いたいのだろうか、わたしは。

カズくんには自分から男の人と一緒に住んでるなんて勢いでバラシテおきながら、実際敦司がやってきてそれをからかわれると、その事実を隠したくて仕方ない。

見せたくないものを見られちゃったみたいな感覚がどうにももやもやする。

なのに今度は敦司をからかわれると、それにもむかむかして敦司をかばってみたい。しかも自分のことまで正当化しようと必死だ。

なんなのだろう、わたしは。どっちに付きたいのだ。

っていうか、何がしたいんだ、わたしは。

「あー、もう！」

「なんだよ」

「めんどくさい」

「じゃ、戻れよ」

「そうじゃなくて!」

「また背負えってこと?」

「違うから!」

コンビニでオレンジジュースとコーラと缶コーヒーなんかを買った。

美月ちゃん用に、カラフルなちっちゃいお菓子もいくつかカゴに入れた。

今夜は涼しい風が吹いている。

火照った顔を撫でる風は、イライラしながらでも気持ちがいい。両腕をあげてぐるぐる回りながら歩いた。

回るたびに、カズくと東京タワーの姿が交互に視界に入ってくる。

カズくんは呆れ顔だ。タワーは、いつもどおりだ。

ムキになってスピードを上げた。髪の毛の一本一本まで風にさらしたかった。

ふらふらになってもまだ回った。

ミキサーにかけられた林檎みたいに、柔らかく、しつとりと、ぐちゃぐちゃになってみたい。

それでもちゃんと、自分でいられるだろうか。林檎みたいに、自分の味を保てるだろうか。

そのうち気持ち悪くなってきて、しゃがんだ。しゃがんだついでに寝転がった。

アスファルトはひんやりしていて、気持ちがいい。

目を閉じると暗闇がぐるぐると回っていて、地面にゆっくり吸収されていくようだ。

溶けて、液体になって、染み込んでいく感じだ。

「おい」

「気持ちわる」

「あんだけ回れば当たり前だろ」

「このまま寝る」

「はあ？」

急に敦司の顔が見たくなる。助けに来てくれないかな、と思う。

なのになから見下ろしてるカズくんは、抱き起こしてもらえないかな、とも思ってしまう。

なんだ、この女の子みたいな気持ちは。

ふと、壁に描かれたお姫さまの絵を思い出した。三段レースの、ふりふりのドレスを着たお姫さま。わたしが描いた、乙女チックな、傾いた、バランスの悪いお姫さま。

「あはは」

「狂ったか」

「お姫さま、爪先立ちで、ふらふらしてんの」

「はあ？」

「あたしに似てるんだ」

「お姫さま？　なんだよそれ。まさか今度はお姫さまだっことか言うんじゃないーだろーな」

「無理。死ぬ」

言えば、どうなるか、さっきのことで何となくわかっていた。「やめて」と言えば、「やる」人だ。

寝転がりながら、しばらく待ってみた。

「じゃ、そのまま寝てろ」

そついうものでもないらしい。

わたしはしぶしぶ立ち上がり、背中と尻の砂をはらった。

カズくんの背中サルに追いつく。真面目な顔でわたしを見ている。

可笑しくなって、その顔を叩いてやった。「いで！」サルの変わりにカズくんが声を上げる。

「なんだよ、起きたのか。寝てればいいのに」

「イジワルだね、カズくんは」

「甘やかさないと言え」

「ふーん」

夜空を見上げる。東京タワーの赤い頭が見えた。

わたしとカズくんが出てきてからの東京の景色も、じっと見ていたのだろう。

わたしは、どんなふうに映っているんだろうか。それともやっぱり、暗くて、光に紛れて、小さすぎて見えないだろうか。

「おい」と赤い頭に向かって手を振りたい気分だ。わたしはここだ、と。

背後にいろいろ抱え始めたけれど、動いてるわたしはそれなりに頑張ってるぞ、と。

22・その前の選択

部屋に戻って、わたしは真っ直ぐに敦司の隣に座った。

それが普通のような、そうしなければいけないような、そんな気がしたからだ。

聞きたいことはすべて聞いてしまったのか、美月ちゃんはおとなしくなつて畳に寝転んでいた。眠そうだ。「おかえりー」と言う目がとろんとしている。

ヨウコさんは居なかった。二階に戻ったのだろう。

敦司は所在無げに壁に寄りかかってあぐらをかいていた。隣に滑り込みながら「ただいま」と小さく言つと、「おかえり」とそつけなく返事を返された。

他に言葉が出てきやしないかと見上げながら少しのあいだ待つてみたけれど、敦司は口を結んだまま、わたしをじっと見下ろしているだけだった。

「ほい」

とカズくんがジュース類を畳の上に広げると、美月ちゃんが起き上がり、まずお菓子に手が伸びた。迷いなくウーロン茶のボトルを小さな手でつかみ、コクコクと美味しそうに飲んでいる。

わたしはコーラに手を伸ばした。が、なにか間違ったような気分になる。

缶コーヒーを手にしてみてもしっくりこなくて、オレンジジュースのボトルを取った。つかんでからもこれでよかったのかと首をかしげる。

今わたしが身体に流し込みたいのは何なのだろう。

お菓子とウーロン茶を手にした美月ちゃんの調子が戻ってきて、三十分くらいは美月ちゃんの話に三人で耳を傾けていた。

時々、似たような苦笑が浮かぶ。

しばらくするとヨウコさんがやってきて、「美月、もう寝なさい」と小さな頭をやんわり撫でた。

ぶつくりした、けれど手の甲が遠目でも荒れているのがわかるヨウコさんの手が美月ちゃんのしっとりした黒髪を揺らしている。

わたしはぼんやりとその様子を眺めていた。美月ちゃんの癖のない髪は、蛍光灯の明かりに幾度も反射した。

昔、これと同じような光景をどこかで見たような気がして、ああ父だ、と思い出す。

薄暗い茶の間の、蛍光灯の明かりを背負った赤茶色の父の顔。うたた寝をしてしまったわたしの頭に置かれた大きな手。

そのときの感触を思い出そうと目を閉じる。温かかったろうか、グローブみたいな手は重かっただろうか。わたしは、どんな顔をしていたのだろう。

父はもう、寝ただろうか。それともまだ、仕事だろうか。

美月ちゃんが二階に戻ってから、ヨウコさんとわたしたちは明日の作業のことを少し打ち合わせた。

聞いているうちに閉じそうになるまぶたが重い。うつらうつらしている敦司の手が頭に伸びてきて、こつかれた。

「じゃ、ちょっと眠っておいてね」

ヨウコさんが二階に戻った。壁掛けの時計を見ると、十時になるうとしている。

美月ちゃんとヨウコさんが居なくなると、途端に部屋はしんとする。ぼんやりしながらも、居心地は悪かった。わたしは足の指を動かして、そこばかりを見ていた。

「明日、宜しく願います」

最初に声を出したのは敦司だ。黒髪をかきながらぺこりと頭を下げた。

「急で驚いたんじゃない？ ヨウコさん、あの通りだから」

茶色の髪をかきあげて、カズくんが言う。細い目が、くいと下がる。

「ええ、正直」

「これからまたちよくちよくあるかもよ。ヨウコさん、気に入るとしつこいから」

「え、そうなんですか」

「うん」

微妙に緊張しているのだろうか、お互いに、話しながら髪の毛をいじりっぱなしだ。

敦司は通った鼻筋をかいで、カズくんは細い目の端をかいでいる。

わたしは、動かしていた足の指を無意識にぎゅっとつかんでいた。

「ま、いいんですけど。でもいつも今日みたいに急に声がかかると参っちゃいますね」

「覚悟しておいたほうがいいかもよ」

「え」

「美月ちゃんにも相当気に入れちゃったみたいだし」

「あはは。小学生ですよ？　すごいっすね」

「俺もここに来たとき同じ感じだったよ。俺なんて結構避けられること多いのにさ、お構いなしに攻撃されたもん」

「そうですか」

「でもまあ、そのおかげですぐに慣れたけど。ヨウコさんもいい人だし」

「人が良さそうですもんね、こっ、見るからに」

「はは」

「あはは」

ふたりの両手はもう畳に降りていた。

敦司はあぐらの股の間に、カズくんは身体を支えるようにして後ろに。

わたしだけが、つかんだ足先から手を離せずにいた。

男同士の会話なんて近くで見ることなかったから、妙に真剣に見入ってしまった。

しかも敦司とカズくんが。なんだこの共演は、と尻がむずがゆい。なんだよ、二人して微妙に仲良くなっちゃって、そんなことを思っていた。

長縄跳びのロープの隙間を狙うように、会話に混じるタイミングを計っていたけれど、再び睡魔に襲われ始めたわたしの視界は細くなる。

まぶたが落ちるたび、ぱつと目を見開き、鼻をすすってみたり、頭をかいてみたりしていたけれど、気づくとかくんと首が折れるという動きを繰り返してしまう。

それでも途切れ途切れに続くふたりの会話を聞こうと必死で堪えていた。

何度目かで敦司の肩におもいきりこめかみをぶつけた。意外に痛い。

ふつと鼻先で笑って、毛布を投げて寄越したのはカズくんが。

「だから道路で寝てくれば良かったのに」

「道路？」

カズくんの含み笑いの声の後に、ぶつけた肩の上から敦司の言葉が降ってくる。

「東京タワーではしゃぎすぎたんだろ」

カズくんは面白そうに笑っている。

「そんなことない」

「滑るし」

「すべ…」

「転ぶし」

「ちょっと…」

「背おわ…」

「あー！ もういいの！」

反射的に敦司を見上げた。黒い目が、きょとんとしてわたしを見ていた。「なに？」と言う顔だ。

「早く寝ろ」

茶色の髪をかきあげて、カズくんはまた笑った。ふわっと戻ってきた髪が額に垂れて、いい具合の形を作ったけれど、それに見惚れてる場合じゃなかった。

わたしは毛布を頭からかぶって寝転がった。

毛布を通して、なんだか敦司の視線を感じる。

くすくすと聞こえるカズくんの笑い声に怒りながら丸まっていた。鼻先に押し付けた毛布が次第に温かくなってくる。目が冴えてしまったようでも駄目だった。相当疲れていた。

ふと目を開くと目の前に敦司の寝顔があつて、驚いて飛び上がった。

部屋は電気がつけられたままだ。壁の時計を見ると、零時を過ぎている。

両隣を交互に見ると敦司とカズくんがいて、すっかり寝入っていた。

わたしはその中央で、飛び上がった状態で尻をついていた。

「なんで真ん中…」

三人で寝るときの、一番嫌なポジションだ。

どうやらわたしは、怒っておきながら速攻で眠ってしまったらしい。

今のこの状況に困惑する。まさに川の字の真ん中だ。

二人に挟まれているというのが落ち着かない。

毛布を抱えてそろそろと前に移動して、壁に寄りかかってふたりを眺めた。

敦司は毛布に包まって、カズくんは仰向けに腹を出して眠っている。

ちょっと腰を浮かしてまじまじと寝顔を見てやると、二人とも揃ってまつげが長かった。そして口が開いている。

「ふい」

ふつふつと可笑しさがこみ上げてきた。二人のまつげを引っ張ってやりたい気分だ。

だけど、色も質も違う髪の毛を撫で比べてみたい感じもする。なのに、立ち上がって蹴り飛ばしてやりたい気持ちにもなる。

二人はどういう反応をするだろう。怒るだろうか、笑うだろうか、それとももっと別のリアクションをとるだろうか。

それをわたしはどんな顔で眺めるのだろうか。その顔を作ってから、この表情でよかったのだろうか、なんて悩むのだろうか。

その前に、引っ張るか、撫でるか、蹴り飛ばすかの選択だ。

オレンジジュースを手を取った。けれどやっぱりお茶にして少しだけ飲んだ。生ぬるくなったほろ苦い液体は、胃にじんわりと染み入った。

しばらく二人の寝顔を見比べていたけれど、結局なにもしなかった。

そろそろと這いつくばって二人の間に戻った。

左右均等に幅をとる。

川の字を整えて天井を眺めていると、何故か安心するのだった。

二時過ぎにヨウコさんに起こされた。

わたしたちは眠い目を擦りながら厨房へ向かった。

ヨウコさんに似た体つきのヨウコさんのお友達のおばちゃんは、もう準備に取り掛かっていた。「おはよ」と言う言葉に、三人でペ

こりと頭を下げた。

作業は順調に進んだ。

ヨウコさんとカズくんと敦司で調理をして、わたしとヨウコさんのお友達が出来上がったものから容器に詰め込んでいった。

敦司はヨウコさんに包丁使いを褒められていた。カズくんが言ったとおり、「うちでバイトしな」としきりに攻められている。

頼むからそれはやめてくれ、とわたしは唐揚げを容器に詰め込みながら頭のなかでばやいていた。

そんなことになったら、二人が厨房にいるあいだ、わたしはどんな顔でカウンターに居ればいいのかわからなくなってしまう。

どっちに注文のメモを渡せばいいのか、迷ってしまいそうだ。

どっちに渡しても、それでよかったのか、いつまでも悩みそうだ。

ヨウコさんのお友達もやっぱりおしゃべりで、並んで作業をしているあいだ、しきりに話しかけられた。

わたしは曖昧に返事をしながら、敦司とカズくんの後ろ姿ばかり横目に入れて、おばちゃんの声の隙間にふたりの声を捕らえようとした。

けれどフライパンの中で弾ける油の音や調理器具が立てる金属音なんかで声は打ち消されて、会話までは耳に届いてこない。

ときどき顔を見合わせて笑う姿を見て、ヨウコさんのお友達の声に「そうですね」なんて上の空で返事をしながらも、二人の様子が気になって仕方がなかった。

でもなんだか、いい気分だった。

「よし！ 終了！」

ヨウコさんのチェックが終わり、その大きな声とともに作業が終わった。

銀色の調理台の上にたくさん積み重なった弁当を見ると、何かを成し遂げた、みたいな気持ちになる。

べたついた身体は気持ち悪いけれど、すっきりする。

「すごい！ 久しぶりにこんなにいっぱいのお弁当見たー」

八時には起きて厨房に下りてきていた美月ちゃんも、調理台に手をかけてぴよんぴよん飛び跳ねて、嬉しそうだ。

わたしも美月ちゃんと同じことをしながら、喜んだ。敦司とカズくんは、揃って腕を組んでいる。脂で顔がてかてかしていた。

十時半までには後片付けも終わっていて、大量の弁当はパレットに積まれて業者が引き取っていった。

トラックの後姿を見送りながら、ぐんと伸びをする。

日曜の、空が青い。

夏休みの宿題を、一夜漬けで終えた気分だ。

朱色に戻った東京タワーは、今日もビルの上から頭だけを覗かせている。

明るくなったこの場所は、見えているだろうか。誰かに、この達成感を伝えたくて仕方がない。

黄色いエプロンを外して、振り回した。タワーに向かって、「おい」と叫んでみる。

返事の代わりに風が吹いた。汗ばんだ頭をふわっと撫でていく。

23 よくわかんないんだ

厨房での敦司とカズくんの会話には、東京タワーでのわたしの失敗談が出たらしい。思ったとおりだ。

弁当屋からの帰り道、敦司はカズくんから聞いたその話を、いかにも笑えました、みたいな口調でわたしに話して聞かせたけれど、見上げる横顔はたいして面白そうでもなかった。

電車を降りて、中野に戻る。

この街に降りると、ほっとする。肩の力が抜けるというか何というか。

もんやりとした、いつものバスの匂いを割りながら坂を上る。

寝不足の身体は、少し重い。

テンションが上がりきってしまうと、あとは下がるだけだ。

少し高くなった太陽が身体を温めて、眠気が次第に増してくる。

アパートの部屋に戻り、扉を開く。

冷蔵庫の裏の、レンジの奥の、カーテンのひだの、どこか見えないうちに潜んでいたような、こもった空気がとろりとわたしたちを出迎える。

一晩戻らなかっただけで、その匂いは新鮮だ。一瞬、知らない人の部屋に入り込んでしまったような気分になるけれどすぐに慣れる。生活臭は、安心する。

部屋を進んですぐに、群青色の座布団に覆いかぶさった。

敦司がカーテンを引くと、薄暗かった部屋は一気に明るくなる。

わたしが立てた埃は光に反射してゆらゆらと泳ぎ、窓が開かれるとぐわんと動いて、あちこちに散らばって消えた。

もうすぐお昼だ。

まもなく午後になろうというこの時間の日の光は、まったく気持ちがいい。すぐに寝れそうだった。

寝そべりながら見る前の家の側溝には、結構な勢いで伸びている雑草が青々と茂っている。

いつもの定位置に、白猫はいなかった。

みゃーう、と遠いところで声が聞こえたような気がして耳を澄ましているうちに、とろとろとしてきた。

「ちょっと寝るか」

「うん」

そのあと敦司がなにか言ったような気がしたけれど、聞き返そう
と思ってるうちに眠っていた。

目が覚めると、もう六時だった。

ごによごによと、小さな音量で声が聞こえてくる。

身体を動かしてその方向を見ると、リモコンを掴んだままの敦司
がぼんやりとテレビを見ていた。背中が丸まっている。

わたしの身体には毛布がかけられていた。腕を出し、よいしょと
床に手のひらをつく。

ゆっくりと起き上がると敦司が振り向いた。おはよ、と言うと、
口元を指差すので確認すると、よだれの跡がついていたらしく、か
さかさと言が鳴った。

群青色の座布団には、丸く濃く跡が残っていた。敦司の頭にも、
珍しく寝癖が残っている。

テーブルの上に、飲み残しのコーヒーが入った白いマグカップが
のっていた。インスタントコーヒーが入った瓶は、電気ポットの横
に置かれたままだ。

わたしより、敦司のほうが疲れたんだろう。

外でご飯を食べようということになって、顔だけを洗って、おもてに出た。

敦司もわたしも、昨日のままの格好だ。緩いへびみたいに続く狭い小道を二人でぼんやり歩いた。

何となく服が身体にまとわりつくような感じはあるけれど、夕方の風が心地良くて気にはならなかった。

まだ薄っすら明るい空には、同じように薄い雲が広がっている。

駅までは行かず、大通り沿いのラーメン屋に入った。「何食べたい？」と聞かれて、普通に「ラーメン」なんて答えてしまったけれど、失敗した。歌舞伎町のラーメン屋を思い出してしまった。

あーあ、と思いながら店に入る。小ざっぱりとしている。少しほつとした。カウンターも椅子もテーブル席も、脂じゃなく、清潔さで光に反射していた。

店主は若くて生き生きしている。紺色のＴシャツが、はち切れそうだ。「いらっしやいませー」と大声をかけられて、敦司もわたしも急にしゃんとしてテーブル席につく。

ラーメンを啜りながら、ぽつりぽつりと話をした。

美月ちゃんとヨウコさんの話をすると、敦司は困ったような顔で笑っていた。

東京タワーに行った話は自分からはしなかった。敦司はそれとなく話題に出したけれど、わたしは意識的に受け流した。

カズくんの名前が出ると、何だか申し訳ない気持ちになる。

背負われた背中感触を思い出して、ひやひやする。

話を逸らそうとしていることに気づいたのか、敦司も清潔なテーブルに片肘だけで頬杖について、弁当屋での話は打ち切られた。

妙な間に、二人同時に最後の餃子に箸が伸びた。

譲ってくれた餃子を割り箸に挟んで、持ち上げる。

ふざけて「あーん」と敦司の口元に運んだらその口が開いた。予想外の反応に、わたしのほうが驚いて、照れた。

黒い目は、餃子を通り越してわたしを見ている。

「ほい」と言いながら餃子を口の中に納めてやると、敦司は片肘をついたままもぐもぐと口を動かし、しばらくわたしを眺めていた。

「うまい?」

「うん」

「最後の一個だったのに」

「うん」

何だか非常にアンニュイだ。こんな敦司も、たまには、いい。

でもそれって反則だろ、なんて胸の内で毒づきながらもときどきし、視線を外してラーメンの残り汁を割り箸でかき混ぜた。

ちろつと目を向けると、敦司は、カウンターに座る男の客の背中をぼんやりと見ていた。

後頭部の寝癖が立っている。

首から上だけ、敦司を幼く見せていた。

アパートまでの帰り道はもうすっかり暗くなっていて、二日前より心持ち欠けた月が浮かんでいる。

狭い道を、ゆっくりゆっくり歩いた。

同じくらいゆっくりと敦司の手がわたしの手に触れた。

敦司は黙ったまま前を見て歩いている。暗くて、その表情はわからない。湿って、温かい手に力が入って、わたしもまた、気づかないくらいの強さでその手を握り返した。

街灯の少ない狭い道は、月明かりだけが頼りだ。

少し近くなった敦司から、緩い風につけて微かに汗の匂いがする。

部屋に戻って、敦司が淹れたコーヒーを啜った。

開けた窓の外から、やっぱりみゃーうと声がする。

会話らしい会話がなかったので、わたしは半分ありがたい気持ちになりながら窓際へ移動してその声に耳を凝らした。

みゃーう…みゃーう…

どこだろう。か細く、小さすぎる声。わたしは手招きして敦司を呼んだ。

「猫みたいな声がする」

「どこから？」

「わかんない」

敦司が隣に来て、柵から身を乗りだした。砂利に視線を這わせて、あたりの様子を伺っている。

みゃーう…

「あ、聞こえた」

「ね」

「ちつちえーな」

「子猫かな」

みゃーう…みゃーう…

敦司とわたしの影が、砂利の上に伸びている。

しばらくそのまま、小さな細かい声に耳をすましていたけれど、やがて敦司の影が横を向いて、頭ひとつ低いわたしの影を見下ろした。

見上げると目が合った。何か言いたそうに口が開いている。

「なに？」

「あのさ」

「うん」

「好きなの？」

「え？ 何が？」

「弁当屋の、あの人」

拗ねたような、だけど泣き出しそうな顔だ。シャツの襟が少し、くたびれている。

「あの人って…カズくんのこと？」

「うん」

「好きなの…って、カズくんのこと？」

「うん」

「…カズくんのこと」

わたしは俯いた。

そんなの、ちゃんと考えたことがない。

「俺は由佳が好きだし、その、一応ちゃんと返事も聞きたいし」

「…うん」

「何ていうか、その、このままっていうのも、結構しんどいし」

敦司も俯いた。砂利の上に伸びる影の肩が、揃って小さく落ちて
いる。

改めて問われると、よくわからなかった。

そもそも、どの辺の「好き」から、特別な「好き」に当たるのか
がわたしにはわからない。

でも、敦司のわたしに対する「好き」は、特別な「好き」なんだ
ということはある。

それはとてもくすぐったくて、ほわりと嬉しくて、悪くない、と
いうよりむしろ心地いい。

わたしは敦司が好きだ。でも、それが特別なのかと聞かれたら、
「はいそうです」とは答えられない気がする。

敦司といると安心する。キスもした。緊張したけれど、穏やかで
もあった。

でもその先を求められたらどうだろう。よく考えなくたってわか
る。わたしには受け入れる自信がない。まだ、怖いのだ。

初めこそ苦手だったけれど、カズくんのこと嫌いじゃない。

好きってわけじゃないけれど、どうしてか気になる。少しずつい
いな、と思うところを見つけて、勝手にときどきしたりしている。

だからと言って、カズくんとうとうなりたい、という気持ちはない。それは敦司に対しても同じことだ。

でも、二人が離れていくのはイヤだ。このまま二人とも傍にいてくればいいのに、そう思ってしまう。

川の字で寝た、あの感覚だ。二人がいて、間にわたしがいて、それで十分だったりする。

みんな、こんなことを思ったりするんだろうか。それともわたしが、ものすごく欲張りなんだろうか。

恋とか愛とか恋愛とか、一体、みんなどんな気持ちでスタートを切っているのだろう。

「返事、出せる？」

敦司の影が横を向く。わたしは答えられなかった。小さく、首だけを横に振った。

「そっか」

わたしは、何一つ自分じゃ答えが出せないのだ。急に情けなくなる。

寂しそうな敦司の声に、胸まで苦しくなった。初めてのやるせない感情に、鼻の奥がつんとする。

敦司に世話になって、しんどいなんて言わせて、わたしは何をやっているんだろう。

敦司の優しさとか気持ちに頼っておいて、カズくんの髪や腕や背中に触れてみたいなんて考えてるわたしは、おかしいんじゃないだろうか。

一体、何様のつもりなのだ。

気づいたら視界がぼやけていて、ぽつんと涙が落ちた。

慌ててぬぐっても、次から次に涙はこぼれて床に染みをつくる。

「由佳ごめん、責めてるわけじゃねーんだ、ごめん」

焦った声がして、わたしの頭に敦司の手が置かれる。いつもの、いたわるような温かさだ。

違うんだ、そうじゃないんだ、言葉には出さず、ぶんぶんとうたしは左右に首を振った。

「泣くなって」

敦司の手が、肩に下りる。うん、うん、うん、今度は首を縦に振った。

ひいっと咽が鳴る。涙と鼻水で、口の中がしょっぱかった。馬鹿みたいだ。何を泣いてるんだ、わたしは。

「汚ねー顔」

覗きこんだ敦司の黒い目が笑う。無理に笑わそうとしているのが分かる。

わたしはむくれて、「うるさい」と言っ、少し笑って、また泣いた。

引き寄せられて、ほわりと敦司の匂いが近くなる。

首もとの、ボタンの奥の白い肌。

一日経った敦司の匂いは、この部屋に帰ってきたときと同じ匂いだ。居心地がよくって安心する。

ぎゅっとしがみ付く。たぶん、わたしは酷いことをしているんだろつ。

このシャツを通した敦司が好きだ。でも。

白くて硬い肌に、直接触れたらどうなるんだろつ。

カズくんと同じことをされたら、どうなるんだろう。

こんなふうに安心するだろうか、もっと緊張するだろうか、苦しくて逃げたくなるだろうか。

わからないことばかりだ。

「敦司」

「ん？」

「ごめんね」

「うん？ ああ」

「ごめん」

「うん」

「よくわかんないんだ」

「…うん」

みゃーっ…

またひとつ、小さな細い声でした。

涙で濡れた敦司のシャツに顔を押し付けて、わたしはしばらく小さく小さく泣いていた。

24. だって自分のこと

次の金曜日、ヨウコさんが風邪でダウンした。

お昼過ぎから体調が悪かったらしく、店を閉めるころにはぐったりとしていた。額に手を当てて、相当苦しそうだ。

「明日は休んだほうがいいですよ」

心配したカズくんが声をかけると、ヨウコさんのえくぼが小さくくい込んだ。

「でもねえ、二人じゃ大変だろ」

「明日は土曜だし、お客さんもそんなに多くないだろうし、大丈夫です、たぶん」

さすがにわたしも心配になって、けほけほと咳をするヨウコさんの背中を撫でた。

赤いエプロンの胸も腹も、心成しかしぼんで見える。

「あたしも休みだし、お手伝いするから。お母さん、休んでいいよ」

パステルピンクのパーカーに身を包んだ美月ちゃんも、心配そうにヨウコさんの腕を撫でた。

「ありがとね、辛かったらそうするね」

いつもの元気がない。返ってくる言葉も普段の半分以下だ。

なのに大鍋を掴んで、洗浄開始の姿勢をとっている。

カズくとわたしは、なかなか言うことを聞かないヨウコさんの背中を押して、半ば強引に二階へ促した。

美月ちゃんも手伝ってくれて、三人で店の整理を終えた。

次の日、ヨウコさんはやっぱり熱を出した。

赤いエプロンをかけながら厨房へ現れたのだけれど、顔まで赤いヨウコさんに驚いたわたしとカズくんは、昨晚のように二人がかりでヨウコさんを二階に押し込めた。

とりあえず店を開いて営業を開始した。美月ちゃんも時々二階から顔を出した。

平日の忙しさはなかったので、助かった。六時過ぎに最後のお客さんを見送ってから、シャッターを下ろした。

「ヨウコさん、どお?」

「うん、今眠ってる。まだちょっと熱あるけど、ご飯食べれるし、大丈夫みたい」

厨房の奥の三畳部屋で、仕事を終えたわたしとカズくんと美月ちゃんの三人で休んでいた。

「明日日曜だし、ゆっくり休めるといいんだけどね」

「うん、何にもしないように言っとく」

「美月ちゃんも移らないように気をつけろよ」

「うん、あたしは強いから平気」

壁に寄りかかってお茶を飲む美月ちゃんの、カモシカみたいになり伸びた足が、スカートの下ではたばたと動いている。

このまま帰ってしまうことに、なんとなく気が引けた。

たぶん、カズくんも同じ気持ちだったのだろう。「何か買ってくる」と言っ、コンビニへ出かけていった。

「ヨウコさん、本当に大丈夫かな」

元気なヨウコさんしか見たことがなかったわたしは、しばらく見えたヨウコさんの赤いエプロンが気になって仕方がなかった。

「大丈夫だよ、あたしと同じ。強いから、お母さん」

「そう?」

「うん」

「美月ちゃん、明日ご飯とか大丈夫?」

柄にもなく心配してしまう。カレーだってまともに作れないわたしは、ご飯のことなど聞いて、何になるのか。

「全然。滅多にないけど、お母さんが風邪引くことなんて前からあったし、いつも二人だし、平気平気」

「そっか」

やっぱり、ヨウコさんと美月ちゃんの二人暮らしなのだ。

聞いてから虚しくなった。二人の生活は、自分でもよく分かっているはずだった。

どちらかが寝込めば、片方がそれ相応の対処をするだけなのだ。

父も、寝込んだことは勿論あった。けれど、一日がっちり寝てれば妙な回復力で元気になっていた。

きつと、ヨウコさんもそうなんだろう。片親の、頑張ってしまう強さと健気さはよく知っている。

「でもお母さん、無理するからちよつと心配なんだよね」

そうなのだ。無理するのだ。

「あたしもね、お父さんと二人なんだ」

「え？ アツシくんじゃなくて？」

「いや、こっちに来る前。お父さんと二人で暮らしてたんだ」

「あ、そうなんだ。じゃあ、あたしと一緒にだね」

にこにこ、美月ちゃんが笑っている。「え、大変だね」「何があったの」「お母さんは？」こんな話をすると、大抵こういう返事が返ってくる。

美月ちゃんにはそれが無い。同じ境遇だからだろう。美月ちゃんも少なからず、きつと同じことを言われているはずだ。

本当は、わたしだって気になる。「お父さんはどうしたの？」そう聞いてみたい。

でも聞いたところでどうにもならない。そんなこと、意味がないのだ。

「じゃあさ、由佳ちゃんがこっちに来ちゃって、お父さん、寂しいかもね」

うん、と頷いて、はたしてそうだろうか、と疑問に思う。寂しいんだろうか、父は。

わたしが東京に出てきてからもうすぐ二ヶ月が経とうとしているけれど、父はまだ一回しか電話を寄越していない。

わたしからは、一回だって電話もしていない。

話下手な親子とは言え、ちょっと疎遠過ぎる。

でも気になっていないわけじゃない。いつも、心のどこかで引っかかる。

二人で居てもひっそりとしていたあのテーブルで、タコとか、かつおのたたきとか、動かないものと向き合って、野球中継なんかを見ているのだろうか。

ただでさえ薄暗いあの茶の間で。

それでも、敦司の家で眠り込んだわたしを連れて帰る必要もなくなつたし、眠い目を擦りながらわたしの弁当を作る手間もなくなつたし、少しは清々してるんじゃないだろうか。

「由佳ちゃんはどうしてこっちに出てきたの？」

痛い質問だ。

どうしてわたしは、東京に行きたいなんて言ったのだろう。

あの家から出たかったのか。一人で何かをしたかったのか。もっと別の世界を見てみたかったのか。

どの理由にも当てはまるような気がするけれど、全部違うような感じもする。

父を残して、ひとりでこっちに出てくるだけの意味が、今の生活にあるのだろうか。

「なんとなく、なんだ」

「なんとなく？」

「うん。情けないことに」

「ふーん、そうなんだー。ふーん」

寝転がる美月ちゃんの短いスカートから、ピンクのチェックのパンツが見え隠れしている。

「あたしね、将来ケーキ屋さんになりたいんだー」

「ケーキ屋さん？」

「うん、ケーキ屋さん」

弁当屋じゃないのか。あまりにも素直な小学生の夢にびっくりする。

「何でケーキ屋さん？」

「カラフルでキレイでしょ？ 美味しいし」

「うん、まあ」

「ここでね、弁当と一緒にケーキも売るんだ」

「ここで？」

「うん。弁当もやって、ケーキもやるの。お母さんが弁当で、あたしがケーキ。お母さんができなくなったら、ケーキ屋さんだけにするんだー」

急に自分が恥ずかしくなった。

こんなに小さな子でさえ、夢みたい、希望みたいなものをちゃんと持っている。

それもなんというか、自分本位じゃなく、小さな頭と胸で、ちゃんと、親のこと、店のことも考えているのだ。

意図的だろうか、無意識だろうか。どっちにしても、偉いと思う。

「美月ちゃん、すごいね」

「えー、なんでー？」

「ちゃんと考えてるんだね」

「だって自分のことだもん」

将来のこと、父のこと、自分のことすらわからないわたしは、小学生以下だ。

「あ、カズくんおかえりー」

コンビニの袋を抱えて、カズくんが帰ってきた。

カラフルなお菓子と、ウーロン茶と、色んな種類の栄養ドリンクが入っていた。

「これ、ヨウコさんにやって」

「ありがとー。やっぱりカズくん気が利くよねー。あたしやっぱりカズちゃんと結婚しようかなー」

「予約されちゃうわけ？」

「でもすぐおじさんになっちゃうもんなー」

「なんだよそれ」

「あははー」

美月ちゃんはやっぱりすごい。なんていうか……

「あ、由佳ちゃんとカズくんが結婚すればいいんだ。そしてお母さんとずっと弁当屋やって。あたしはお菓子作るからさー。ね？ いいと思わない？」

さすがヨウコさんの娘さんだ。

「ね。そしてあたしはアツシちゃんと結婚すんの」

それは、なんか困る。

「由佳ちゃん、今度遊びに行ってもいい？」

「え？ うん」

「じゃあ、いつなら大丈夫？」

世話好きでしつかりした、ヨウコさんそっくりの小学生は、お菓子を頬張ってからウーロン茶をこくこく飲んで笑った。

わたしは曖昧に笑い返しながら、膝を抱えてもじもじしているだけだった。

話好きな近所のおばちゃんに、玄関先で捉^{つか}まった父のように。

カズくんは口の端を上げて、そんなわたしたちを面白そうに見ていた。

25・気づかないうちに

日曜日、敦司はバイトが入っていた。

わたしは弁当屋が休みなのではない。

「六時過ぎには帰るから」亭主みたいな言い方をした敦司を見送って、久しぶりに部屋の掃除をすることにした。

腕まくりをして、伸びてきた髪を結わえると、だんだんその気になってくる。

テーブルも群青色の長座布団も部屋の隅に追いやって、メタルラックもずらしてみたりして、徹底的に、隅々まで磨きこんだ。

風呂もトイレも流しも、どこを見てもぴかぴかだ。

黙々と、何も考えずにできる地味な作業は、案外わたしに向いている。

満足して前髪をかきあげた額に、窓から入り込む風が涼しい。

カーテンが揺れて、取り残しの埃がすすすと足の甲を越えていく。

慌ててあとを追いかけて、掴んで丸めて柵の向こうに放り投げた。

風に浮いた埃は一時その場で舞って、長い時間をかけて砂利の上に着地した。

前の家の側溝の、数日前よりもさらに面積を増した雑草のなかに白い塊が見えたような気がして目を凝らすと、いつもの猫がうずくまってこちらを窺っていた。

久しぶりの再会に、嬉しくなる。

ちゅちゅと舌を鳴らして呼んでみると、ほんの少し身体をずらして、反応した。

もう一度呼ぶと、驚いたことに数歩前に出てきた。

やっと顔を覚えたか、と近寄ってくるのを期待して待っていると、猫は一声、「にゃあ」と鳴いただけだった。

ふん、とは思ったけれど、何となくやつれた感のある猫に同情したわたしは、食べかけのまま流しにおいてあったパンを持ってきて投げた。

猫は自分の数十センチ前に落下したパンに一瞬驚いて腰を浮かしたけれど、そろりそろりと近づいて匂いを嗅いで、銜えたとおもったらすぐにどこかへ走っていった。

昼になり、フローリングに直に横になってごろごろしていると、昨晚の、小さくてか細い声が至極近くで聞こえてきた。

這いつくばって柵に近づくと、丸い毛玉が砂利の上を転がっている。

ふわふわと頼りない、綿飴みたいなその正体は本当にちっちゃな子猫らで、数えてみると三匹いた。

白が二匹と茶トラが一匹。

「おおっ」と腰が浮く。わたしは柵を両手で握り締めて、互いにじやれ合うその姿を凝視した。

子猫らは固い砂利の上で何度も転げ回り、絡み合い、倒したり倒されたりしながら一生懸命遊んでいる。

やがて普通サイズの茶トラの猫がやってきた。目を閉じて、傍らで「にゃあ」と鳴く。

親猫だろうか。一匹の子猫がそっくりだ。だとすると、父親はあの白猫か。いつかの声を思い出して、しばし、にやにやした。アイツもちゃんと自分の世界を生きているのだと思った。

親猫らしい茶トラがゆっくり歩き出すと、じゃれあっていた子猫たちもはつとしたように移動を開始した。

砂利に足を取られて幾度も転んで、歩いているのか走っているのかさえわからないその姿は、思わず手を差し伸べたくなるほどの頼りなさだ。惨め^{みじ}たくさえ見える。抱き上げて、目的の場所へ連れて行ってあげたい。

けれど子猫らはそんなわたしの心配をよそに、おぼつかない足取りでもちゃんと前へ進んでいくのだ。行くべき所へ、しっかりと。健気に。たくましく。

わたしは柵から身をのり出して、小道の向こうに消えていく母子らを見送った。

ぴかぴかの部屋をあとにして、駅へ向かった。

なにか、何でもできそうな爽快感がある。このチャンスは無駄にできないと思った。

スニーカーの靴底で力強くアスファルトを蹴り上げて、前へ進みながら鼻歌など歌ってみた。

切符を買い、改札を抜け、電車に乗り込み、新宿で降りる。

相変わらず粘着力の強い、ガムテープみたいな匂いのする地下道を小走りで抜けた。途中から全力疾走に切り替えて、歌舞伎町に出た。

ガムのいっぱい付いた裏通りに入って、あのラーメン屋の前に着いたわたしは、鞆のなかの封筒を確かめてから深く息を吸い込んだ。

扉を開き、タノモウと言わんばかりの勢いで店内に入ると、何時ぞやの店主とひとりの男性客がいて、怪訝な顔をされた。

店主に向かって茶封筒を突き出し、「岩田さんに渡してください」と声を上げる。少し、裏返った。

店主が「ああ？」と言って首を捻ったので、「痩せた、眼鏡の、男の人」と説明を付け加えると、「ああ、痩せた、メガネの……岩

田ちゃん」と繰り返されたので安心した。

苗字だけは憶えていた。くしゃくしゃの薬袋に書いてあったよそよそしい他人の名前。

あの男がここの常連かどうかなんてわからないけれど、そんなことはどうだってよかった。とにかく、金を戻した、という事実を作りました。

わたしは封筒を押し付けるようにして、一度だけ頭を下げて、店を出た。出るときに目の端に映ったカウンターの上の新聞紙は、やっぱり崩れ落ちそうに山積みになっていた。

もしかしたら店主のふところに納まってしまいかもしれない金のことを考えると少しばかりへこんだけれど、「いやこれでいいんだ」と思い込むことにした。

歩きながら、おかしさが込み上げてくる。「借りは返したぞ」と間違っているような合っているような言葉を呟くと、本気で笑えた。

挑発的なホストたちの写真の前で立ち止まる。あの日のように品定めしてみたけれど、どこが誰に変わったのか、もしくはまったく変わっていないのか、全然わからなかった。

勢いついでに、新橋へ向った。

SL広場の古本市で、『お菓子とケーキの作りかた入門』という本を買う。

バンダナを頭に巻き付けたおじさんに、「へえ、お姉ちゃん、ケ
ーキ作りするんだ」と言われたので「友達が少々」と答えると、「
彼氏にでも作るのかね」と返されたので「未来の、お客さんに」と
教えてやると、首をかしげながらも頷いていた。

おつりを受け取る手が触れたけれど、悲観的にはなかった。

いつもの道順で、タワーへ向う。

途中、弁当屋の様子を遠くから眺める。

シャッターが降りている店先は、ひっそりと、穏やかだ。二階の
窓が開いていて、洗濯された赤いエプロンとピンクのスカートなん
かが見えている。

通りの向こうを、美月ちゃんくらいの女の子が自転車に乗って過
ぎ去っていった。

東京タワーの前には、今日も入場待ちの列ができていた。

列を追い越して歩きながら、一人ひとりの顔をちらちらと盗み見
る。

これから中に入っていくこの人たちは、足元のずっと下に広がる
東京の街を見下ろして一体何を思うのだろう。

自分はちっぽけだとか、ここであの人と約束を交わしたんだとか、感傷的になったりするんだろうか。

それとも、運命の人はどこにいるのだろうとか、いつかこの街を手中に収めてやるとか、もっと前向きで、勇ましい、強欲な、そんなことを。

思い思いの顔をして立ち並ぶ人たちに、面と向かって聞いてみたかった。

タワーの真下まで行って、そつと触れた朱色の身体は、ひんやりと冷たい。

ごおんごおんという振動が伝わってきて、変にほてったわたしの手を少しばかり冷めさせた。

人の列が少しずつ前へ進む。

タワーは今日も、誰も拒まない。見慣れた顔も、新しい顔も。

受け入れて、送り出して、その繰り返しだ。

青い空を突き刺して、でんと構えている。

中野に戻り、スーパーでカレーの材料を揃えた。レジに並びかけた体を翻して、青果コーナーへ戻り、林檎を手にしてカゴに収めた。すり下ろしてカレーに混ぜてしまえば、林檎嫌いの敦司も気づか

ないうちに食べれるだろう。

アパートへ戻る途中、小道ですれ違ったおばさんに「こんにちは」と声をかけられた。

わたしは驚いて、でも反射的に「こんにちは」と返したけれど、ここにこ微笑むおばさんに見覚えはない。

後ろに過ぎて、角を曲がるおばさんの背中を見送ってから、もしかして前の家の人かな、とぼんやり思う。

気づかないうちにわたしもまた、この辺の住人の一部になっている。

玄関の扉を開ける前に、わたしは父へ電話した。

なかなか出ないので、切ろうとしたときに「どうした？」と焦った声が漏れてきた。

どうしたって。思わず笑ってしまう。

わたしからの初めての電話に驚いたのだろう。「何かあったのか」と心配する父に、「今度の日曜に一旦帰るから」と伝えた。

六月最初の日曜は、母の命日だ。電話もしない、いきなり家を出てしまう、そんな娘でも命日を忘れるほど薄情ではないつもりだ。

「そうか」と言った父はぶっきらぼうに、でも気づかないほどに軽い嬉しさの混じった声で「気をつけて帰ってこい」と言って電話

を切った。

部屋に入り、早速カレー作りに取り掛かった。

林檎を摩り下ろし、カレーに溶かす。

ルーは、甘口と中辛を半々で混ぜた。もしかしたら甘すぎるかもしれないな、と思ったけれど、まあいいや、と鍋の中身をかき混ぜた。

じつくり、ゆっくり、焦がさないように慎重に。

林檎はもう、カレーの色に溶け込んでいる。

しばらく流しに立って、無心にカレーを混ぜていた。

混ぜながら辺りの音に耳をすますと、換気扇の隙間から雀の鳴き声が漏れてきた。ちりと自転車のベルの音がして、「きやはは」と子供たちの声がする。

かんかんかん、と階段を上る靴音がした。アパートの、誰かが帰ってきたのだろうか。ばたんとドアが閉まる音が聞こえてくるまで、わたしはじっとして、耳を傾けていた。

夕日が差し込んでいた部屋は、いつのまにか薄暗くなっている。

ほんの少し差したオレンジ色の光が、床を四角く切り取っていた。部屋にはカレーの匂いが充満している。

カーテンが揺れて、外から、別の匂いが入り込んだ。

「林檎、入ってるんだけど」

カレーを食べながら、敦司にネタばらしをした。

敦司は黒い目を見開いて「え」と言っ、カレーに鼻先がついてしまふほどの距離で匂いを嗅いでいる。

「マジで」

「マジで」

「全然わかんね」

「鈍いね」

「まろやかだなとは思っただけど」

「美味しいでしょ」

「うん、美味しい」

わたしは得意になってスプーンを口に運んだ。

林檎は丸々一個摩り下ろした。よっぱど鈍いな、とわたしは敦司の膨らんだ頬を眺めてにやけた。

帰ってきてからずっとカレーの匂いに包まれているわたしの鼻は、少し馬鹿になっっているような気がする。わたしが食べる限り、目の前のカレーはカレーだ。でも何となく、林檎の匂いの比重が勝っている気がする。

今日も敦司は三杯おかわりをした。わたしも二杯、たいらげた。

夕食後、敦司が流しを片付けているあいだ、わたしはいつもどおり風呂のお湯を張った。

ふんふーん、と流しから、カレーの匂いに混じって敦司の鼻歌が聞こえてくる。

乾いたバスタブの底が、ゆっくり湿っていく。一センチ…二センチ…水栓の銀色のチェーンを飲み込みながら徐々に増していく水かさを眺めていると、ふふ、と笑いが漏れた。

鈍いのは、わたしか。

皿を洗う敦司の隣りに立って、布巾を手にした。

「敦司」

「ん？」

「ホントは気づいてたでしょ」

「なにが」

「林檎」

「いや」

「嘘だ」

「そんな匂いはするかなーって思ったけど」

「ふーん。鈍いね」

「まあね」

林檎の皮を生ゴミ入れに入れながらまだ鼻歌を続ける敦司の背中に声をかける。

「次の日曜、家に帰るから」

「え？」

中腰のまま振り向いた敦司に笑いながら答えた。

「お母さんの命日だから、とりあえず一旦」

「ああ、そうか」

「うん」

皿の水滴は、布巾にじんわり吸い取られていく。

水分を含んだ布巾は少し、重さを増した。

群青色の長座布団にふたりで腰かけてテレビを見た。

時折カーテンが揺れて、夜の風が入り込む。

昼間見た猫の話をすると、へえ、と関心していた。歌舞伎町に行ったことと、東京タワーに行ったことは話さなかった。

またそろりと入り込んだ風が、裸足の足を滑っていく。

ふいに、敦司がカーテンに顔を向けた。わたしも、同じことをした。

懐かしい、夏草の匂いがする。

最終話・檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下

一週間後の土曜の夜、わたしは敦司と東京駅の新幹線ホームにいた。

ヨウコさんに一時帰宅のことをそれとなく話すと、「しばらくゆつくりしてきなと言いたいところだね、由佳ちゃんがいなくて大変だし。でもせめて前日に帰ってやったらどうだい」と言われたので、お言葉に甘えることにした。

由佳ちゃんがいないと大変だし、の言葉がほっくり嬉しい。

しかしそれも土曜の話だったので、「いや、いいんです」と断ろうとしたのだけれど、一度言ったことはなかなか覆さないヨウコさんには敵わない。

お昼過ぎに、わたしは帰された。「じゃ、また月曜に」とカウンターで軽く頭を下げると、ヨウコさんと美月ちゃんに「いつてらっしゃい」と元気に肩を叩かれた。

相変わらず力強いヨウコさんの激励に、ずんと肩が下がる。肩を摩りながら小窓に視線を移すと、カズくんが横になって笑っていた。

思わず手を振ると、カズくんの左手が上がった。少し、頬が緩んだ。

結局、なんだかんだとやっているうちに、夕方になってしまった。

敦司が帰ってきてからのほうがいいだろうと、群青色の長座布団に被さってごろごろしていた結果なのだけれど。

毛玉みたいだった子猫らは、一回り大きくなって砂利の上を転がっている。

だいぶ、足腰もしっかりしてきた。どうやら、力関係も出てきたらしい。茶トラが強い。白猫二匹に果敢に攻め入っていく。たぶん、メス猫だ。

わたしは顎の下で両手を組んで、そんな猫らをぼんやり眺めていた。

「別にいいよ」と言ったのだけれど、敦司は東京駅まで着いてきた。

「もういいよ」とも言ったのに、入場券を買ってホームまで着いてきた。

何がそんなに心配なのか、わたしの隣でしきりに時計を気にしている。

これじゃ何かの歌みたいじゃないか、そう思うと可笑しくて笑いながら新幹線に乗り込んだ。

扉が閉まる直前に、「んじゃ行ってくる」と手を振ると、敦司は「おじさんに宜しく」と手を上げて、わたしの頭をぽんと叩いた。

東京の灯りが、ゆっくり遠ざかっていく。

鈍行に乗り換えて、自宅付近の小さな駅に着いた。

開いた扉から外に出ると、一気に蛙の声が押し寄せる。人の声や車のエンジン音のほうで、その中に埋もれて僅かに聞こえてくる、といった感じだ。

東京とは違う、ひんやりとして澄んだ、夜の風。運ばれてくる強い夏草の匂いで、帰ってきたことを実感する。

プレハブ小屋みたいな待合室には、わたしよりも若い高校生くらいの男の子たちがたむろっている。これも昔、よく見ていた光景だ。面子は変わっているけれど、やっていることは同じだ。大人たちの視線を気にして何かを隠してみたり、女の子を目で追って品評し合ったり。

通り過ぎたわたしも、きっと点数を付けられているのだろう。それともスルーか。まあどうでもいい。不思議なもので、前ほど気にならなくなっている。

古びた飲み屋街の細道を通り、旧国道に出て、神社の前を過ぎ、家までのおよそ一キロの道のりを歩いて帰った。

コンビニで缶ビールを買った。父への手土産のつもりで。自分用に買ったパック入りのコーヒー牛乳は、飲みながら歩いた。

ストロー越しに、弁当屋の味がする。

坂を上って、下る。

見えてきた自宅の窓の灯りが、ぼんやりと夜に滲んでいる。隣りの敦司の家の灯りは、夜道に薄く膜を貼っていた。

鍵のかかっている玄関を開けて「ただいまあ」と茶の間にそろりと入っていくと、作務衣姿で寝転がっていた父が驚いて体を起こした。

「なんだ、明日じゃなかったのか」

「その予定だったんだけど、今日になった」

「いきなりだな。何にも用意してないぞ」

「用意ってなにが」

「食うものも、飲むものも、何にもないぞ」

「ああ、いいよ。お腹空いてないし。飲み物は買ってきたし」

缶ビールを差し出すと、父は素直に喜んだ。

わたしは真っ直ぐ仏壇の前に行って、母に線香をあげた。林檎、明日買ってくるから、心で呟いて、手を合わせる。立ち昇る線香の細い煙の向こうで、母は柔らかに微笑んでいた。

父が台所からかりんとうを持ち出してきたので、つまみながらテレビを見た。さすがにコーヒー牛乳とでは甘すぎて、お茶を淹れずずずと啜る。

テレビからの笑い声で沈黙は辛うじて免れていたけれど、なかなか会話は弾まなかった。

同時にかりんとうに手が伸びる。二人とも一番小さなかりんとうを狙っていた。たいして食べたくもないのに手持ち無沙汰から伸びた手だ。

伸ばした手を引つ込めた父は缶ビールを手にくいと煽った。かすかすと音がする。たぶん、もう入っていない。父の咽は動かなかった。

わたしは摘んだかりんとうをこりりと齧って、そんな父の横顔を眺めながらお茶を啜った。

「どうだ、向こうは」

テレビ画面が天気予報に変わったとき、父がぼつりと声を発した。顔は画面を見たままで、耳だけこちらに凝らしている。

「それなりにうまくやってるよ。バイトも見つけたし」

「バイト？」

「弁当屋で働いてるんだ。日曜以外、毎日。まじめにやってる」

「そうか。敦司くんには迷惑かけてないだろうな」

「かけてない、かけてない、全然かけてない」

「そうならいいけど、迷惑かけるようなら考えろよ」

「考えるって？」

「いつまでも世話になってるわけにいかないだろ」

そうだね、呟いてわたしも天気予報に視線を移した。梅雨の季節がどのこのころの…気象予報士のお兄さんが何か言っている。東京はまもなく梅雨入りするらしい。

「あのさ、」

「なんだ」

ふいに聞いてみたくなった。

「弁当作り、お母さんと約束したって言ってたじゃん。あれ、何？」

「約束？ ああ…お前が学校に上がったら弁当は毎日ちゃんと作ってやってくれってな」

「ふーん……他には？」

「ああ？」

「他にお母さんと約束したことってある？」

「ああ、いっぱいあるわ、ありすぎて大変だわ」

「ごろりと横になった父は、片手で尻をかいている。裸足の足の深爪が、何だか痛そうに見えて目を逸らした。

「例えば？」

「例えば…夜更かしさせるなどが、病気になる前に医者に連れて行けとか…」

「あとは？」

「分からないことがあったらそのままにしておくなどが、優しい子になるようにとか…」

「…あとは？」

「素直ないい娘に育ててくれ、とか」

「……」

何だか、わたしのことばかりだ。聞いているうちに、疲れてくる。わたしが疲れるのだから、父はもっと疲れるだろう。

「とにかくちゃんと見守ってくれってな。大人になるまで」

「…大変だね」

「大変だ」

たぶん、まだまだいっぱい約束したんだろう。につこり微笑んで母はあんなところにいるけれど、なかなかどうして、強い人だ。

父はそれを聞きながら、母を見送りながら、どんなことを考えていたのか。今のわたしを見て、どう感じているのか。

とりあえずわたしが大人になるまで、父と母の約束は続いていくのは明らかだ。可哀想だが仕方ない。わたしもできるだけ、期待にこたえられるように頑張りたい。

今は初めてのことばかりで、いっぱいいいだけだけど。一つ一つクリアしていけば、何とかかなりそうだ、とも思う。

しばらくして父は立ち上がり、奥の自室に引っ込んだ。背中に向

かつて「おやすみ」と言うと、「風呂に入って早く寝ろ」と返事が返ってきた。

言われたとおり風呂に入り、二階に行って電気を点ける。

カーテンを引いて遠くを見ると、高速道路の車の列が緩々続いていた。勿論、東京タワーなんて見えない。

ベッドの上に、ごろんと横になる。

睡魔はすぐにやってきた。久しぶりの自分の布団は埃っぽくて、もう何となく、懐かしいものになっている。

次の日、父は一旦事務所に顔を出さなければならぬということだったので、二人で遅い朝食を摂ってから、わたしは一人で母のお墓に向かった。

途中、どうしても通らなくてはならない場所がある。あの、橋だ。

錆びた欄干の脇を全力で走り抜ける。

走れば走るほどあの日の息苦しさが襲ってきて、目が回りそうになる。

転がるように駆け抜けて、数百メートルオーバーしてから息を整えた。

両脇が草で覆われた、石と土で固められた階段を上って、墓地に出る。

青々と繁った木々に囲まれている霊園は日陰になっていて、時折零れる木漏れ日が墓石をちらちら照らし出す。この一帯だけ空気の流れが違って感じるから不思議だ。雀の声だけがする。静かだ。

母のお墓周りを綺麗に掃除した。無心に。黙々と。

墓石の脇に小さな青蛙がいた。水を垂らしてやるとぴくりと体を動かして、その咽を気持ち良さそうに震わせていた。

草むしりを終えて、ふうと息を吐いて立ち上がる。

腰に手を当ててぐんと体を反らして後ろを見ると、階段から父がやってきた。

右手にペットボトルの水と、細い花束を握っている。左手に持った新聞紙で顔の周りを扇いでいた。

「綺麗になったな」

「見事ですよ」

ペットボトルと花束を渡されたので、わたしはプラスチックの花立に水を注いで花をさした。

父はしゃがんでライターから新聞紙に火をつけている。毎年見て

いる姿だ。丸まった背中を眺めながら、わたしは線香に火がつくの
をじっと待つ。

土の上でちりちりと身を振った新聞紙は、あつという間に小さく
なって、灰になって、散らばっていく。

線香の半分をわたしに渡した父は、よつこらしよと立ち上がり、
墓前に置いた。わたしも後に続き、同じことをする。

よいしょとしゃがんだ父の隣りに並んで、手を合わせた。

幸せになれますように　わたしはずるい。いつも、こう願って
しまう。願われたご先祖様だって、勿論母だって、たまったもんじ
やないだろう。

大体、墓参りでお願い事すること自体、間違っている。なのに
いつも願ってしまう。幸せになれますように。いつかいい事があり
ますように。前向きに生きられますように。父が長生きしますよう
に。

よいしょと父が立つ。わたしはしばらくしゃがんで手を合わせた
まま墓石を見つめた。

お母さん。呼んでみても、ここに母はいないような気がする。誰
も、居ないような気がしてくる。

だって願っても、叶ったためしは無い。いくら願っても、なるよ
うにしかないのだ。自分でなんとかするしか。

それでも、手を貸してはくれないけれど、どこかで見ていてくれ

てるとは思っただ。

何をやっているんだ、と。もっとしっかりしなさい、と。

父の知らないわたしも、きっと母は見ている。橋の下のこと、東京タワーのこと、恥ずかしいがキスのことも。

そう思うとありがたく、こそばゆく、でもムカついて情けなくもあり。それでも何となく前進はできるような感じがするのだ。

父の乗ってきた車に乗り、自宅へ向かう。

橋に差し掛かったところで窓を全開にして、「バカヤロー」と叫んでみた。大声で。腹の底から声を出した。

歩いている人が驚いて立ち止まった。なんだなんだときよろきよる辺りを窺っている。

「なにやってんだ、馬鹿」

父に怒られながらへらへら笑った。

途中のスーパーで買い物をした。

林檎と、お茶菓子なんかを適当に買う。

「八時の新幹線には乗るからね」

「ああ」

茶の間にごろりと寝転がった父の背中に声をかけて、わたしは仏壇に林檎を供えた。

甘い、蜜の匂いがぷんとする。

茶色のテーブルを挟んで反対側に、わたしも寝転がった。

色褪せた、畳の向こうの父の顔。

浅黒い顔からは、もう寝息が立っていた。

はっと目が覚めると、縁側から光が差し込んでいて、部屋全体をオレンジ色に染め上げていた。

一瞬どこにいるのか分からなくなって首を動かすと、壁の傾いたお姫さまがわたしを見下ろしていた。

テーブルに手をかけて父を覗き込む。ぐぐぐ、とくぐもったいきをかいている。何処かで見たような光景に、少し笑った。

何となく起こすのが可哀そうだったので、わたしは静かに立ち上がって仏壇の前に行った。

線香に火をつけて、そつと手を合わせる。

「じゃあね」というよりは「いつてきます」みたいな気持ちで。

微笑む母に「随分いっぱい約束させたね」と笑い返して、備えた林檎の一つをもらった。

Tシャツの裾で林檎を擦りながら縁側へ出る。

空は、いつか見た檸檬色の光で覆われていた。

遠くの山に深々と、夕日がじっくり沈んでいく。

一日の終わりに、ほつつと温泉にでもつかるようだ。

蜂蜜みたいな輪郭は、けれど、それよりもあっさりとした滑らかさでとろりと山に溶けている。

縁側に置いた足は、夕日と同じ色に染まっていた。

ごそごそと音がして振り向くと、父が起き上がるところだった。

大きなあくびをして、座りながら腰をさすっている。

「お父さん、もうそろそろ行くよ」

「ん？ ああ、そうか」

わたしの隣に立った父は、むくんだ顔で空を見上げた。浅黒い顔もまた、夕日の色に染まっている。

林檎を持ち上げて、夕日に翳^{かざ}した。つやりと光って、朱色に変わる。

「お父さん」

「ああ？」

「こつから、東京タワー見える？」

「見えるわけないだろうが」

「だよね」

縁側に届く、線香の匂い。

「お父さんさ、お母さん以外に、好きになった人っている？」

「ああ？」

「二人同時に、好きになつたりとか」

「さあ、どうだったかな」

鼻先に林檎を押し付ける。

蜜の香りがくすぐつたい。

「好きなやつでも出来たか」

「わかんない」

「なんだそれ」

「初めてのことばかりでさ、大変なんだ、いろいろ」

「そうか」

「うん」

しゃりりと林檎を齧った。

甘いような、酸っぱいような。

何かの味に、すごく似ている。

「でもその積み重ねだからな」

「そうなの？」

「初めてが無いと、次が無いしな」

檸檬色の空が、徐々に深さを増してくる。

父の、群青色の作務衣が横を向いた。

「で、誰が好きなんだ」

父の奥で、母が笑っている。

「わかんないよ」

「とにかく、電話くらい寄越せ」

「はいよ」

「迷惑はかけるなよ、人様に」

「わかってるって」

「彼氏が出来たら言うんだぞ」

「はいよ」

ポケットが震えたような感じがして、手を入れて携帯を取り出した。

赤く点滅している。留守電が、三件入っていた。

敦司と、誰だろう。ヨウコさんか、もしかしてカズくんか。

わたしの生活は、少しずつ動き出している。

まだ中途半端なものがいっぱい。

仕事も、敦司のことも、カズくんのこと、父のことも。

ちゃんと考えて、自分で処理しなくちゃならないことが山ほどある。

面倒だけれども、まだまだ起こる色んなことを、もっといっぱい見てみたいし、やってみたい。

将来の夢とか希望みたいなものも、漠然とで構わないから、抱えて歩いてみたいのだ。

「もうちょっと、あっちで頑張ってみるから」

「ああ」

「もう行かないとやばい」

「送っていくから早く準備しろ」

うん、と返事をして、蜂蜜みたいな夕日に手を翳す。

林檎を齧る。しゃりりと固い。甘くて酸っぱい。

同じような気持ちを抱えて、わたしはまた、東京へ戻る。

完

最終話・檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下（後書き）

最後まで目を通してくださった皆様、どうもありがとうございました。

由佳の今後…できれば続きも書きたいな、とは考えています。

お声をかけてくださったぴよ様にお礼を。そして企画にご一緒させていただいた作者様方に感謝を。温かい言葉をかけてくださり、本当にありがとうございました。

拙作は、様々な「はじめて」を織り込みながら書いてきたつもりですが、「これからやって来るはじめてに備えた前段階」って感じのお話にも仕上がったようです（笑）

若いうちは色んなことが初めてで、戸惑うことも迷うことも沢山あると思います。

ただ、数は減るにしても、いくつになってもそれはやってくると思っています。

イキナリの初めては本当に右往左往しますが、初めての積み重ねによって次へ進めると思うので、どうぞ逃げないで、受け入れて、チカラに変えていってください。

最後になりますが、読んでいただいて本当にありがとうございます。

また何か書き始めましたら、こちらのあとがきにて報告させてもらいますので、宜しければ覗いてみてください。

08・05・18 水沢 莉

「はじめてのxxx。」HPにリンクしてあるBBSで、各賞の投票が始まっています。

素晴らしい作品が沢山あるので、是非投票に参加してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8259d/>

檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下

2010年10月9日01時18分発行